
俺、ツインテールになります。18
水沢夢 [イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。18

水沢　夢

イラスト　春日　歩



俺、ツインテールになります。18
水沢夢 [イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


「ねえ、そーじ。
あたしのツインテール……結んで」



これが俺たちのツインテールだ！
いくぞ、首領！
終の零星（フォー・ヴァリス・ジョーカー）!!

目次

水沢夢
［イラスト］春日歩

俺、ツインテールになります。18

人物紹介

観束総二

主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

津辺愛香

総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、
ネタにされると激しく怒る。

トゥアール

異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

イースナ

善沙闇子の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

桜川 尊

慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

観束未春

総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

俺、ツインテールになります。

17巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

正式にアナザーテイルブルーとなった尊の助けもあり、総二たちはポセイドンギルディ、ゼウスギルディの二大神エレメリアンを撃退する。しかしついに結集した最終軍・終の零星が、首領からの挑戦状をツインテイルズへと叩きつけるのだった。

アルティメギル組織図

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊
隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- **リヴァイアギルディ部隊**　隊長：リヴァイアギルディ
- **クラーケギルディ部隊**　隊長：クラーケギルディ
- **タイガギルディ部隊**　隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者　フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。



アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。

終の零星（フォー・ヴァリス・ジョーカー）



隊長神：アポロギルディ
構成神：ポセイドンギルディ
ゼウスギルディ
ハデスギルディ

神の一剣最強の四体で、首領を守護するために結成された最終軍。



離反

首領直属戦士 ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）



隊長：エンジェルギルディ
元隊長：アポロギルディ など
戦女神：ヴァルキリアギルディ

最強部隊。隊長エンジェルギルディをテイルホワイトが消滅させ、崩壊する。

死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙の副将（ライトファング）：プテラギルディ
左牙の副将（レフトファング）：トリケラトップギルディ

強力な戦士を擁する処刑部隊。覚醒したテイルレッドの力により、壊滅した。

貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

プロローグ

あたしたちのツインテール。

今日こそ、そーじに好きだって言おう。

姿見の前で自分をそう鼓こ舞ぶするのが、あたしの朝の習慣。

明日こそ、そーじに好きだって言おう。

ベッドの中でしみじみそう思うのが、あたしの夜の習慣。

自分でも呆あきれる、情けないルーチンワークだ。

何年もそんなことを続けて、それでも幼馴染おさななじみっていう関係から進展しなくて。

年とし頃ごろの男と女がずっと一緒にいたら当たり前のようになるだろう、恋人っていう間柄には変われなかったくせに──いつしかあたしたちは、怪人から世界を守るなんていう奇妙な存在に大化けしていた。

エレメリアンとひたすら戦い続ける毎日。

それもまた、いつしかルーチンワークになっていった。

たまにちょっぴり勇気を出して、さりげなくそーじに告白っぽいことして、結局伝わらなくても……「まあ、それどころじゃないから仕方ないよね、世界を守らなくちゃいけないもんね」──なんて。

あたしは、戦いを言い訳にしていた。

嘘うそばっかり。あたしは一度だって、世界のために戦ったことなんてない。

ただ、そーじを守りたい、それだけだった。

これを本人に言っても……愛の告白だなんて、気づいてくれないだろうけどね。

けれど今、大好きな幼馴染――観み束つか総そう二じとの関係に、転機が訪れるかもしれない。

無限に現れ続けるエレメリアンたちにも、それを統率する偉い奴やつ、首領がいる。

そいつを倒してしまえば、もうあたしたちの世界にエレメリアンがやって来ることはなくなるかもしれない。

戦いの日々が終われば……それを言い訳に、そーじとの関係を停滞させることはできない。

なら、そのアルティメギルの首領って奴を倒した後で、そーじに告白しようかなって考えた。

けれど――。

あたしたちは、決して無敵の存在っていうわけじゃない。

最初の頃ころはエレメリアンなんて秒殺だったけど、今は苦戦も多い。

特にあたしは、戦いくさ女め神がみを名乗る幹部に一度徹底的に負けたこともある。

じゃあ、そいつよりもっともっととんでもない敵と戦うってなった時……無事に帰ってこられる保証はないかもしれない。

戦いの後じゃ駄目なんだ。

最後の戦いが始まる前に、やるべきことはやっておきたい。

あたしたちツインテイルズは自分の心を力に変えるから……そのやるべき告白ことをやってダメだったら、思いっきり弱くなっちゃうかもしれないけど。

後悔だけは、したくない。

未いまだに、そーじの方から告白コクってくれないかな……なんて、弱気なことを思ってるあたしが、ずいぶん大胆なこと考えてるなぁ……。

　色んな友達が増えた。色んな恋敵ライバルが増えた。

　トゥアールも会長もイースナも、桜さくら川がわ先生だって……最近、今まで以上に可か愛わいくなった。

　みんな、そーじに恋してるんだよね。

　本当に感謝してる。みんながいなかったらあたし、こんなに小さな勇気さえ持てなかった。

　あたしたち、ツインテールに導かれて出で逢あうことができて、本当に良かった──。

　あたしは轟ごう音おんで我われに返った。

　黒雲を貫いて、ツインテール型の稲妻が轟とどろいている。

　火山からツインテール型のマグマが大噴火し、地上に降り注ぐ。

「世界の破滅カタストロフが……ツインテールの形を持って現れ始めた……」

　あたしの隣で、そーじは──テイルレッドは、それを呆ぼう然ぜんと見つめていた。

　あたしの大好きな人が。

　ツインテールが大好きな大馬ば鹿かが。そのツインテールが世界中から憎まれるかもしれないと、心を痛めている。

　自分の守ってきたものが消えてしまうかもしれないと、嘆いている。

　そーじ。

　たとえ世界がどんなことになっても……あたしは、ずっとそーじのそばにいる。

　戦いで負けそうになったって……あたしが最後の最後まで、そーじの隣にいる。

　そーじは何があっても諦あきらめないかもしれないけど……あたしは、そーじの次に諦めたいんだ。

　そーじの勇気を、あたしにも分けてちょうだい。

　明日、あたしたちはアルティメギル基地へ突入する。

　だからあたしは今日──そーじに想いを伝える。

第一章

ほのぼのツインテール。

一階にツインテールの気配がするな。

起きがけのおぼろげな意識の中、そう感じた俺は、自分の部屋を後にした。

早朝は窓から愛あい香か、犬小屋に慧え理り那な、クローゼットにイースナがいるなど、俺の部屋からツインテールの気配がすることは日常茶飯事だ。

しかし、一階からツインテールの気配を感じることは、実はあまりないのだ。

階下に複数のツインテールの気配を感じながら階段を降り、リビングのドアを開ける。

まず俺は、キッチンのツインテールの気配に吸い寄せられた。

桜さくら川がわ先生が、料理をしている。メイド服のエプロンの上から、さらにもう一枚、料理用のエプロンをして。

「──おはよう、観み束つか」

俺に気づいた桜川先生は、柔らかな笑みを浮かべて挨あい拶さつをしてくる。

桜川先生がこの家に来ること自体はそう珍しくもないのだが……何な故ぜだろう、今日は雰囲気ツインテールが違うように感じてしまったのは。

「お嬢様と一緒にお前を迎えに来たら、喫茶店から出てきた未み春はるさんが中で待っているよう言ってくれたのでな。ならば、お前の朝食でも作りながら待っていようかと思ったわけだ」

俺が不思議そうにしていたからだろうか、桜川先生が理由を説明した。

「お前は、朝はパン派だったな。卵はどうする？　ベーコンエッグにするか、スクランブルエッグがいいか？」

「えっと……じゃあ、スクランブルエッグでお願いします」

「わかった。お嬢様と一緒に、少し待っていてくれ」

　そう言って調理に戻る桜川先生。両手に卵を持ち、淀よどみない動作で割ると、中身をボウルに落とす。

　元々桜川先生は、かっこいい大人の女性という感じだったが……今はそのかっこよさに、心の余裕のようなものが感じられる。すごく自然体なツインテールというか。

　その理由に、俺はすぐに思い至った。

　これまで桜川先生は愛香が戦えない時の代打として、何度かテイルブルーに変身したことがあった。

　そんな時、エンジェルギルディの遺のこしたツインテール属性の属性玉エレメーラオーブを基に制作されたテイルブレスアナザーを託されたことで、桜さくら川がわ先生も正式にツインテイルズのメンバーとなった。

　しかし大幹部である多愛属性ハーレムのポセイドンギルディ、結婚属性ブライドのゼウスギルディらと相対し、自分の悩みを刺激されたこともあって、自信を無くしてしまった。

　それでも理事長や慧え理り那なの深い愛に触れることで、桜川先生は迷いを吹っ切った。

　ポセイドンギルディ、ゼウスギルディとの決戦では俺たちのピンチに颯さつ爽そうと駆けつけ、ツインテイルズ全員で力を合わせて両者を撃退したのだ。

　その一件で理事長から聞いたのだが……なんと慧理那は、神しん堂どう家の複雑な事情により、桜川先生の姉にあたる存在だった。知ってしまえば思い当たるフシは多かったものの、やはり驚いたものだ。

　これまで神堂家のメイドとして慧理那や理事長と一線を引いて接してきた桜川先生だが、慧理那たちと本音で話し合ったことで、今は自然体で日々を過ごせているのだろう。

「おはようございますわ、観み束つか君」

　リビングのツインテールの気配も気になっていたが、やはりその気配は慧理那のものだったようで、背後から声をかけられた。

「ああ、おはよう、慧理那」

　俺は挨あい拶さつを返した後──慧理那の方を二度見してしまった。

　リビングのソファーに座る慧理那だが……ソファーの周りに、十数名ほどの神堂家のメイドさんが立っていたのだ。

「やっほー総そう二じきゅ～ん」

　ボブカットのメイドさんが、手を振ってくる。周りのメイドさんたちも、それに続いた。

　高い高い！　メイド密度が高い!!

「『おはよう、慧理那』……やーんめっちゃ自然……！　もう夫婦でしょ!?」

　何か、メイドさんに俺の声真ま似ねされた……。ちょっと恥ずかしい……。

「あとはお嬢様が『あ・な・た』とか言えば完かん璧ぺきですよぉ！」

「ふぇぇ……そ、それはまだ少し……恥ずかしいですわ……」

「『まだ』なんですねっ！　やーんお嬢様可か愛わいい!!」

　何やら慧理那を巻き込んできゃいきゃいと騒ぎ出すメイドさんたち。

「いえ────────い総二きゅんの家────────ぃ!!」

　ショートカットのメイドさんが、めっちゃテンション高く宣言し、その場でくるくると回転し始めた。

　…………今のはダジャレか……？

「す、すみません観み束つか君、朝からこんなに大勢でお邪魔してしまって……」

　俺がソファーの傍そばに行くと、慧え理り那なが恐縮してきた。

　雰囲気が変わったのは、桜さくら川がわ先生だけじゃない。慧理那もだ。

「お姉ちゃん」の慧理那のツインテールが少し大人びたように感じるのは……きっと、桜川先生が吹っ切れたことと無関係じゃないだろう。

「全然大丈夫だよ。遠えん慮りよなんてしないで、いつでも遊びに来てもらってくれ」

　いきなり自室の犬小屋から出現されるよりは、こっちの方が安心だしな。

「は、はい……いつでも来るというか……本当は一緒に住……な、なんでもありませんわ!!」

　慧理那が首を振ると、彼女のツインテールが緩やかに揺れる。

「うおおおおおおおおおお甘酸っぺええええええええええええええええ!!」

「ね、ほら、お嬢様の隣に座って！　二人の肩と肩の距離はマイナス二センチね!!」

　そんな大人びた慧理那を見て、メイドさんたちが大人げなく騒ぎ出す。それって肩と肩が合体してないか……!?

　この人たちを含めたら、全然大丈夫は過言だったかもしれない……。

「わ、私もう…………クケェ────────ッ!!」

　ボブカットのメイドさんが、両腕をクロスさせてメイド服の肩口を摑つかんだかと思えば、そのままメイド服を引き裂さいた。ボタンが周囲に散弾のように飛んでいく。

　上半身下着丸出しになったメイドさんは、にやけ顔で慧理那を見ていた。

「こら、ここは観束の家だぞ、あまり迷惑をかけるんじゃない。……すまんな観束、あいつ、たまにああして嬉うれしそうに自分のメイド服を破る癖くせがあるんだ。気にするな」

　キッチンから顔を覗のぞかせる桜川先生。子供のやんちゃを微ほほ笑えましく見守る母のような表情で、部下のメイドさんを注意する。

　いやあの、上司ならもう少し強めに窘たしなめた方がよくないっすか、その癖。

　もっとも、気にするなと言われて、はいそれでは気にしませんと思える俺も、だいぶ感覚が麻痺してきているような気がするが。

「……私もこの仕事けっこう長いんだけどさ。この一年で、お嬢様とメイド長、すっごく変わった。総そう二じきゅんと出会ってからだよね……二人とも毎日楽しそうで、私たちまで嬉しくなっちゃうんだ」

　ボブカットのメイドさんが、晴れ晴れしい微笑みを湛たたえながら俺の隣に座った。

　あのすいません、ブラジャー丸出しなんですけど。

「だから総二きゅん……これからもお嬢様とメイド長……二人をよろしくねっ!!」

「はい！」

　メイドさんの心からの笑顔に、俺も快こころよく返事をする。慧理那と桜川先生のことが、本当に好きなんだろうな。

　この人が怪鳥音を発しながらメイド服を自分で引き裂さいたのを見た後じゃなきゃ、もっと感じ入ることができたと思うんだよな。

廊下からドタドタとけたたましい足音が聞こえ、リビングのドアが勢いよく開く。

「うぉあああああああああ、何ですかこの雌めす密度は!?」

やって来たトゥアールが、大勢のメイドさんたちを見て仰天する。

「あー、総そう二じきゅんの周りの女の子で一番おっぱい大きい子来たー」

おっとりとした雰囲気のメイドさんが、おっとりとした声でトゥアールを指差した。

「そう、私は総二様の周りで最強のおっぱいを誇る者、トゥアールです!!」

それが生態であるかのような自然さで名乗り上げてしまうトゥアール。

トゥアールはヒーローだった頃ころの癖くせなのか、勇ましく名乗り上げることが習慣のようになっていたが、現役復帰してからはそれに拍車がかかっているのかもしれない。

「ええい、そこなメイドは大したことない半裸を総二様に見せるんじゃありません!!」

「いいのいいの、どーせ総二きゅんが旦だん那な様になったら私たち毎日こんな格好することになるでしょ、若い男の子だもんね~」

何な故ぜ毎日メイド服を破る……!?

疑問はツインテールの気配にかき消され、俺は再びドアの方を振り向いた。

リビングに入って来た愛あい香かが、恨めしげな目でトゥアールを凝視する。

「さんけた……」

　どうもトゥアールは自分の胸のサイズを長きにわたって逆サバを読んでいたらしく、ゼウスギルディとの戦いでそれをバラされてしまった。

　それを知って以降、愛香はこうして呪じゅ詛そのように『さんけた』と呟つぶやいているのだ。

　愛香だって身長は三桁けただろ？　と意味不明な慰なぐさめの言葉を無意識にかけそうになってしまうほどには、愛香は哀愁をまとっている。

　先ほどのおっとりとしたメイドさんが、今度は愛香を指差した。

「あー、総二きゅんの周りの女の子で一番おっｐ」

「────あ？」

　そしてトゥアールへの胸の評価と逆のことを愛香に言おうとしたようだが、最後まで口にすることはできなかった。

　愛香に正面から射い竦すくめられ、メイドさんはガタガタと震ふるえ始めた。

「うわお、人間離れした怖い顔ですねえ愛香さん。今の顔を写真に撮ってそのままなホラー映画のキービジュアルポスターにしたら、それだけで邦画の興収記録塗り替えるレベルで人寄せになりますよ」

「学習しないわねあんたも、ホラー映画に喩たとえられる度たびにあたしがこうして張り切っちゃうことぐらい、何度も身をもって体験してるでしょうに──」

「ぐあああああああああああ飽きたと言われつつシリーズを重ねてしまうホラー映画の業!!」

　アバンタイトルから出し惜しみをせず豪快にショッキングシーンをお見せすることでお馴な染じみの愛あい香かトゥアールのホラー映画シリーズは、今日も新作が封切られた。

だがメイドさんたちは、それを見てもあまり動じる様子はない。

まあ、慧え理り那なのお伴で一緒に登校していれば、愛香とトゥアールのこういうやり取りは何度も見ているだろうからな。俺たちの学校の生徒が、二人のじゃれ合い（校舎破壊レベル）を見慣れてしまったのと同じだろう。

「あんな調子じゃーねー。いくら可か愛わいくても、あの子たちはお嬢様とメイド長の敵じゃないわ!!」

メイドさんの一人が、自信満々に腰に手を当ててそう言う。敵って何だ……？

おっと、さらにツインテールの気配だ。

ドアを開けて、アイドル衣装のイースナが入ってきた。

「おはようござイースナ!!」

シュタッと右手を挙げてキッチンの桜さくら川がわ先生へ挨あい拶さつすると、リビングの俺たちの方へと歩いてくる。

「総そう二じ、部屋にいないと思ったらここにおったか。……おや、今日はやたらメイドおる」

リビングを埋め尽くすメイドさんたちを見て、軽く驚くイースナ。

「イースナさん、そのお衣装……これからお仕事ですの？」

「うむ、仕事前にちょっと時間ができたので、総二に逢あいに来たのじゃ。わらわってめっちゃ健けな気げ」

慧理那と歓談するイースナを見て、メイドさんたちが一様に驚く。

「ウッソ、アイドルの善いい沙すな闇あん子こちゃんじゃない……本物!?」

「どうして観み束つか君の家に!?」

「前にお話ししましたとおり、善沙闇子さんはわたくしの親友なの

です……」

　メイドさんたちに説明する慧理那は、どこか誇らしげだった。

「あれマジだったんですかお嬢様!?　私たちてっきり、子供がヒーロー番組のヒーローと友達だって言っちゃうノリで言ってるのかと……!!」

　慧理那が善沙闇子と友達だということは、お付きのメイドさんたちに信じてもらえていなかったようだが、無理もないか。

「え、で、その善沙闇子ちゃんがどうして、観束君のお家にフリーパスみたいに入って来てるの……!?」

「ん？　おお、慧え理り那なのメイドたちなら別に教えても構わんか。わらわ、総そう二じの彼女じゃぞ」

　メイドさんの一人に問われ、イースナはサムズアップで自分を示しながら、不敵な笑みを浮かべた。

「「「「「えええええええええええええええええええええええ!?」」」」」

　メイドさんたちの驚き声がきれいに重なる。

「ちょ、そ、それはヤバいよ……現役トップアイドルとお忍びで付き合ってるって、総二君って実はとんでもない大物なんじゃないの!?」

　後ろ髪をアップにしたメイドさんが、俺とイースナを交互に見る。

「そうじゃな――、めっちゃ大物じゃよなあ、ある意味わらわよりずっと有名人じゃもんなあ、総二は」

　悪戯いたずらっぽい笑みを俺に向けてくるイースナ。

　俺は冷や汗ダラダラだよ、うっかり口を滑らせないでくれよ……!?

「フフフ、わらわを正当に評価できるあたり、良いメイドたちじゃな。もっと驚いてよいぞ」

「あんた、ちょっと寄っただけなんでしょ、早く仕事行きなさいよ!!」

「おっぱぱ！　おぱいおぱぱぱ、おっぱーぱおっぱい!!」

　愛あい香かに続きトゥアールも何やらイースナに抗議しているが、さすがに愛香の攻撃で頭から腰まで天井に埋められた状態では何を言っているか認識できない。

「漫画だったら尻しりにフキダシの尻しつ尾ぽが向いとるじゃろうな、今のトゥアール」

　トゥアールを憐あわれんでいたイースナの目が、キッチンの方へ向けられた。

　つられて俺も見ると、いつの間にかキッチンに母さんがいた。愛香たちを見て満足げに頷うなずいている。

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ何この総そうちゃんのための王宮、めっちゃ眼福」

『ふ』がすげえ多いな、母さん……。

　お客さんが多いことが、そんなに嬉うれしいのかな？

「今日からこの家を、ツインテールパレスと名付けましょう！」

　唐突にそう宣言する母さん。まあ、そう呼ぶというのなら、俺に一切異論はないが……。

　何とも騒がしい朝だ。いつの間にか、遅刻ギリギリの時間になってしまっていた。

　もうすぐ二月も終わる。

　先日、アルティメギルという組織との対決に一つの区切りがつくであろう衝撃の宣戦布告を、最強のエレメリアンたちから受けたとは思えないほど──俺たちは、いつもと変わらぬ穏やかな時間を過ごしていた。

◇

　賑やかな朝から始まった、その日の放課後。

　俺たちは、今後の方針について会議をすることにした。

　ツインテール部部室に俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生が集合する。

「ごめんなあ、結構仕事長引いてもうた……」

　続いて、着ぐるみ越しのくぐもった声が聞こえてきた。

　仕事終わりのメガネドンが、善いい沙すな闇あん子こと一緒に転送ロッカーの中から姿を現したのだ。

「時間ちょうどのようじゃな。早速始めようぞ」

　アイドル衣装のまま長机に座り、イースナはふう、と一息つく。

　仕事がハードだったのか、ツインテールに少し疲れが見えるな。

　ともあれ、これでツインテイルズのメンバーが全員揃そろった。

　トゥアールは胸の谷間から指示棒を出して引き延ばすと、開始の合図のようにホワイトボードを軽く叩たたいた。さらに胸の谷間からフェルトペンを取り出して、〝終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー〟というワードをホワイトボードに書き込む。


終の零星

　スクリーン機能も搭載している部室のホワイトボードだが、今日はアナログな使い方をするようだ。

「さて。言うまでもなく今日の議題は、先日の終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーからの宣戦布告についてですが──」

　トゥアールはそこで言葉を止め、俺に視線を送ってくる。

「ああ」

　俺は意図を察して頷うなずく。

　そして制服のポケットから厚みのある音楽ＣＤのような形をした円盤を取り出し、長机の上に置いた。

　禍まが々まがしく黒光りするそれは、アルティメギル基地への転送ゲートディスクだ。渡されて以来、肌身離さず持ち歩いている。

「これを使えば、アルティメギル基地へ乗り込むことができる──」

　俺が改めてそう言うと、全員の視線がゲートディスクに集中する。

　アポロギルディから手渡されたこのディスクを使うことで、俺たちは敵基地への突入が可能となる。

　そしてその先で、アルティメギル首領が俺たちを待ち受けている。アポロギルディたちは確かにそう言こと伝づてをしてきた。

　このディスクは、アルティメギル首領への挑戦チケットとでもいうべきものなのだ。

　問題は、その挑戦を馬ば鹿か正直に受けてもいいのか──ということ。これから俺たちは、それを話し合うつもりだ。

「終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー……。神の一剣ゴー・デイア・ソードが最強の部隊と思っていたのに、さらにその上の部隊がいたなんて……驚きですわ」

「終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーがイースナさえ知らない部隊だってんなら、この先もまだあんな隠し球が出てくる覚悟はし

とくべきかもね」

　慧え理り那なが心配そうに言うと、愛あい香かも続く。

「さすがにそれはないと思いたいがのう……。たった四体の部隊にして、直属軍を超える首領の親衛隊。それ以上のものなど、想像もつかぬわ」

　イースナの声には不安が顕あらわれている。無理もない。

　首領直属幹部であるダークグラスパー時代のイースナからすれば、最強軍だった神の一剣ゴー・デイア・ソードでさえも、立場上は部下だった連中だ。

　しかし終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーは、組織の誰だれもその存在を知らなかった、秘蔵中の秘蔵。

　そんな奴やつらがガン首揃そろえて、俺たちに挑戦状を叩たたきつけてきたわけだからな。

「で、そやつらが『ウチ来ない？』と誘ってきおったわけじゃが。……とりあえず、皆の意思を聞いておくべきじゃろうな」

「そんなん考えるまでもないじゃん、とっとと基地に乗り込もうよ」

　真っ先に意見を出したのは、愛香だった。自分はそれ一択だとばかりに、涼しい表情でのたまう。

　愛あい香かはずっと前からアルティメギル基地に攻め込みたいと言っていたから、当然か。

「それもひとつの手ですね」

　意外なのは、一番慎重な意見を出すと思っていたトゥアールが、愛香の言葉にすぐに賛同したことだ。

「アポロギルディたちは正面切って宣戦布告をしたことで、私たちが警戒し、慎重になっていると読んでいるはず。つまり今すぐ乗り込めば、奇襲をかけることができるわけです」

　トゥアールがホワイトボードに①として書いた案。

　それは愛香の言った、「即時突入」だ。

「まさかあいつらも、ツインテイルズにここまで取り返しのつかない脳筋がいるとは思っていないでしょうから……一番取り返しがつかないのは胸ですが」

　トゥアールは大真ま面じ目めな顔で、持論の根拠を提示する。

「そうだ。せっかく挑戦状を受け取ったんだし、あたしたちはトゥアールを矢文用の矢にして基地まで飛ばそうよ、手紙に『今から行きます』って書いて」

「矢やめてぎゃあああああああああああああああああああ」

　トゥアールは矢の気持ちを瞬間理解したようで言葉にそれが顕あらわれていたが時すでに遅く、壁という名の的へ目掛けて射られた後だった。

　愛香は弓。トゥアールは矢。

　いつも通りのじゃれ合いを見て、慧え理り那なや桜さくら川がわ先生が微ほほ笑えむ。

　みんな緊張してるかと思ったけど、落ち着いているな。

　とはいえ、慧理那は表情を引き締めるのも早かった。

「わたくしは……すぐに乗り込むことは、避けるべきと考えますわ。敵が本拠地に招待してくる時は、万全の状態で待ち構えていることが常です。それでは、奇襲をしても通用しませんもの……」

　ヒーローもの好きの慧理那は、慎重派だ。

　もっとも、たとえヒーロー番組に当てはめなくても、奴やつらの申し出は露骨に怪しい。

　これは罠わなだろう。俺もそう思っている。

　だが、罠であることを差し引いても、アルティメギルのトップを倒す千せん載ざい一いち遇ぐうのチャンスでもあるのだ。

　だから俺たちは、悩んでいる。

「ほな、慧理那ちゃんの意見が、②やな」

　トゥアールが壁に刺さっているので、メガ・ネが一時的に代筆。

　ホワイトボードに書かれた案②は、「一時静観」だ。

「……ところで、尊みことさん」

　何とか壁から頭を引き抜いたトゥアールは、全員にお茶を淹いれて回った後で俺の真後ろに立って控えていた桜さくら川がわ先生に視線を向けた。

「おお、どうしたトゥアール」

　桜川先生は、何な故ぜか俺の肩を揉もみ始めたところだった。

「最近総そう二じ様へのボディタッチが多すぎですよ！　あなたも今や正式なツインテイルズメンバーなのですから、しっかり話を聞いてください!!」

「ちゃんと聞いてるぞ。そのうち、あいつらの本拠地に乗り込むんだろう？　いつ出発して、帰ってくるのはいつぐらいになるんだ。私は有給を取ったほうがいいか？」

　これまでの話を聞いていた上でなお、桜川先生の口調はどこかのんびりとしたものだった。

「旅行じゃないですよ……」

　肩を揉まれて上体を軽く揺らしながら、俺は誤解を正した。

「いいや、確かに旅行とも言える。──ただし、死出の旅になるやもしれぬがな」

　復路のない旅行。

　イースナは、この突入をそう称した。

「万全の罠わなや迎げい撃げき準備よりも、首領が待ち受けている

という事実の方がよほど恐ろしいからのう」

「うちとイースナちゃんは、首領はんの恐ろしさを身をもって体験しとるからなぁ……」

　首領にたった一撃でバラバラに破壊されたことのあるメガ・ネは、首領の話が出る度たびにいつも不安そうにしていた。

　だからイースナも不安を煽あおっているのではなく、本心からそう考えているのだろう。

「ひとたび基地に乗り込めば、いずれにしても決着が着くまでこの世界には帰って来れぬであろう。わらわもそのメイドと同じじゃ……アイドル活動を一時休業しようかと思っておる」

　イースナがそう打ち明けたことで、俺は少なからずショックを受けた。

「いずれにしてもって……あたし負ける気はないけど」

「もちろんわらわもそうじゃ！　しかし、万一のことは考えねばならぬ。善いい沙すな闇あん子ことメガネドンは、今や世界的なビッグコンテンツじゃ。連絡も無しにずっと仕事に穴を開けては、多くの関係者に迷惑をかける」

「お、大人ねイースナ……」

　それを聞いて、愛あい香かもツインテールに迷いが見え始めた。すでに社会的に大成功した立場を持つイースナが、それと天てん秤びんにかけなければならないほど、首領との戦いは苛か烈れつなものになると考えているのだから。

「けどさ、こっちが待ちに徹していつまで経たっても乗り込んで来ないってわかったら、痺しびれを切らして首領って奴やつの方から攻めてくる可能性もあるんじゃない？」

　愛あい香かは慧え理り那なの同意を求めるように、彼女を見ながら言った。

　なるほど、ありえるかもしれない。

「駆け引きですねえ……」

　腕組みをして考えこむトゥアール。

「敵の基地で戦うのは間違いなく、絶好のチャンスなんです。今まで、幹部エレメリアンとの戦いは周囲の被害を気にして人ひと気けのない場所へ移動することが必須でした。ましてそれが首領ともなれば、誇張でなく一撃ごとに街一つ消し飛んでいくような規模の戦いになるかもしれませんし……」

「確かに……そうですわね」

　慧理那も、トゥアールのその意見にはしっかりと頷うなずいた。

「しかし敵の基地で戦えるのなら、周囲の被害を気にする必要もありませんし、人間を守りながら戦う必要もありません」

　大規模な戦闘においては、守るべき人間が足枷かせになる──というのは、ドライな言い方ではあるが事実だ。

　トゥアールの言うとおり、やはり首領とはあいつらの基地で戦うべきだ。

　そう考えると、あっちが痺しびれを切らすのを待つのは悪あく手しゅかもな。

「イースナあんた、基地にある罠わなの位置とか、覚えてないの？」

　地下基地でトゥアールの迎げい撃げき装置を潰つぶして回った実績のある愛香が、そんなことを尋ねた。

「ぶっちゃけ基地そのものの迎撃能力はだいぶショボいぞ。わらわが抜けた後で増やしてなければ、罠など皆無じゃ。まあ、突入後の道案内はわらわに任せておけばよい」

　そりゃ、あいつらにとっての外敵……つまり人間からの攻撃なんて、本来は起こり得ないことなんだからな。迎撃装置なんて、わざわざ備えているはずがないか。

　そうして様々な意見が出て、ホワイトボードにも色々と書き加えられていったが……最終的には、最初に出た二つの案「即時突入」

と「一時静観」が競り合っているようだった。

　意見が出尽くして無言の時間が増えたのを見計らって、俺は結論を出すことにした。

「突入を先延ばしにし続けるつもりはないけど……もう少しだけ様子を見よう」

　皆の意見が割れた二案の折せつ衷ちゆう案だ。優柔不断といえばそれまでだが……。

　俺がこう思うのは、根拠がある。

「多分、焦じれて攻めてくるにしても、あっちから一度せっついてくると思うんだよ。いつまで待たせるんだ、ってな。そこがタイムリミットだと考えればいいんじゃないか？」

　エレメリアンは精神生命体だからか、皆自分の欲望に忠実で、好きなことへの堪こらえ性が足りない。今までも、作戦が思い通りにならないとあちら側から俺たちを急せかしてくることは何度もあった。

　それは終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーや首領という強者であっても、エレメリアンである以上は変わらないのではないか。

　攻めてくるより先に、何らかの要求をしてくるのは間違いないと思う。

「なるほど、その可能性は高いですね」

　トゥアールもしばし考え込んだ後、そう言って頷うなずいた。

「それにポセイドンギルディが言っていましたわ。自分たちはもうこの世界を侵略しないが、末端兵には好きにさせると。まだまだエレメリアンが侵攻してくるかもしれません」

「あー、それがあるか……。普通のエレメリアンは今までどおりやって来るかもってことね」

　慧え理り那ながその点を危き惧ぐすると、愛あい香かも眉まゆを顰ひそめた。

「渡されたゲートは、一度しか使えない一方通行の物とのこと。逐ちく次じ戦力を投入するのではなく、突入する時は私たち全員で揃そろってすることになります」

　トゥアールが神妙に語る。

「その隙すきに、この世界に末端のエレメリアンが攻めてこないか……確証が持てるまで、迂う闊かつにこの世界を離れることはできないな」

　俺は、今後の方針を皆と共有した。

「それに待つのは悪いことばかりじゃない。俺たちも、決戦への準備がしっかりとできるってことだからな」

　敵にも準備期間を与えることになるが、そもそも残る強敵は終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーと首領だけ。

　ならば俺たちも、万全の準備が必要だろう。

　気の重い話し合いが続いた反動か、その後はいつもどおりのツインテール部の賑やかな時間となった。

　トゥアールも愛香の手によって何度も景気よく宙を舞い、俺たちはそのじゃれ合いを見て微ほほ笑えましくなる。

　しかし俺たちは皆、失念していたのだ。

　首領と終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの他に、強敵がいることを。

　ツインテイルズと長きにわたる因縁があり、強者に成長した戦士が──まだ一体残っていることを。

◇

　空とも海とも大地とも知れぬいずこかに存在する、神秘と科学の

結晶。

　基地であり、移動母艦。そして、エレメリアンたちの暮らすコロニー。

　人間には見ることすら叶かなわない神殿……聖域というべき場所。

　アルティメギル秘密基地。

　その中にある大ホールの登壇台の前には、四体の大幹部エレメリアンが集結していた。

　アポロギルディ、ポセイドンギルディ、ゼウスギルディ、ハデスギルディ。

　彼ら神のエレメリアンこそが首領親衛部隊、終の零星フォー・ヴァリス・ジョーカー。

　残存部隊の暫ざん定てい隊長であるスワンギルディは凛り々りしく姿勢を正し、大幹部たちのすぐ横に控えている。

　四体の神が勢せい揃ぞろいした様は、壮観だった。

　本来であれば、この基地にいる一般兵には永久に見ることのできなかったはずの光景だ。

　今でこそ複数部隊の生き残りが混成した残存軍ではあるが、始まりはドラグギルディ部隊ただ一隊。隊長は多くの強者に認められているドラグギルディとはいえ、あくまでこの部隊は数あま多たある侵攻部隊の一つに過ぎなかった。

　それが今やとうとう、組織の頂点に君臨する幹部たちを迎えることになった。

　一般兵たちはもはや、この光景に現実感が湧わかないというのが本音だろう。

　彼らが、どんなことを言うのか。

　ホールに並んだ戦士たちは、固かた唾ずを呑のんでその時を待つ。

　すると。

「あははー、最初に言っとくね。情けない話なんだけどさ～、僕たち四体、それぞれツインテイルズとガチでやり合って負けたんだよね～」

　幼い子供のような背丈のアポロギルディは、見た目そのままに可か愛わいらしい声で潔いさぎよく敗北の報告をした。

「や、俺は別にテイルレッドたちに負けてねーし。俺の負けってほら、ナンパに失敗することを指すわけじゃん？」

「つまり負けているではないか」

　陽キャのポセイドンギルディの負け惜しみは、ハデスギルディの辛しん辣らつなツッコミによって封殺される。

「しかし、これまでツインテイルズと真剣勝負をした後、生き残っているエレメリアンはほぼ皆無な現状……さすがは終の零星フォー・ヴアリス・ジヨーカーの皆様です」

　老参謀スパロウギルディはアポロギルディたちをそう賞賛しながら、隣に立つスワンギルディへも視線を送った。

　彼が常に気にかけているスワンギルディもまた、ツインテイルズと真剣勝負をした後に生き残っている希け有うな存在だからだ。

「つーわけで僕ら、四体揃って、あらためてツインテイルズに宣戦布告してきたぞー。そんで、この基地へのゲートディスクを渡してきたから!!」

　アポロギルディは腰に手を当て、嬉うれしそうに報告する。

「おお……ということはつまり、テイルレッドがこの基地に遊びに来てくれるということでございますか！」

「うん！」

　無邪気な笑顔での首しゆ肯こうに、戦士たちはにわかにざわめき始める。

「ふむむ……ついにテイルレッドを我わが家に迎える日が来たの

か！」

「本気マジヤバよな……実にアガるわ!!」

「この一大事に、幼女が好みそうなお菓子の買い置きがないとは……不覚！　疾とく通販でお取り寄せをせねば!!」

「フフフ……この育てに育てた『いつでもテイルレッドたん』のレアテイルレッドの数々、本人に見てもらう時が来たようだな!!」

　上がるわ上がるわ、嬉うれしい悲鳴。

　中には陽キャのポセイドンギルディの影響が口調に表れている一般兵もいる。

　勝手にソシャゲにされた挙げ句、そのソシャゲの廃課金者に『君にこんなに貢いだよ』と見せつけられるであろうテイルレッドの心中、察するに余りある。

「喜びに水を差すようだが──私たちが基地に招待したのは、ツインテイルズだ。テイルレッドだけではないのだよ？」

　ハデスギルディが、浮かれる戦士たちを窘たしなめる。

「「「………………」」」

　ホール内のざわめきが、一瞬で収まった。

「おう、つまりあれよな、テイルブルーも来るということよ！」

　花嫁を愛するという女性的な属性でありながら口調が男っぽいゼウスギルディが、にやにやと嬉しそうに言った。

「……テイル、ブルー……？」

　思い出したくない名前を出され、戦士たちのＣＰＵの周波数が極限まで下がる。

　一体がわなわなと震ふるえだすと、それが水辺の波紋のように

次々と他の戦士たちへも伝でん播ぱしていく。

「テ……テイルブルーが……やって来る……！　うあああああああああああ!!」

「サガる――――――――！　クッソサガる――――――――っ!!」

「何な故ぜ世界にテイルブルーは生まれてしまったのだ!!」

　もはや哲学的な悲鳴を上げる者までいる始末。

　さすがにここまで騒ぎ出すのは想定外だったのか、ゼウスギルディは呆あきれ顔になる。

「フン、テイルブルーか。ワシの力でさえ巨乳にすること叶かなわなかった、呪のろわれし貧乳……まるで怨おん霊りよう扱いだな。あんな奴やつ、大したことなかろうよ」

　ゼウスギルディは戦闘員アルテイロイドに命令し、中央の大モニターに映像を映させた。

　画面いっぱいに広がったのは、ゼウスギルディの能力で巨乳にすることができず、ぬか喜びをさせられたテイルブルーが悪あつ鬼き羅ら刹せつの形ぎよう相そうになっている場面だった。

「助けてくれ……助けてくれ――――――――――!!」

「うぎゃ――――――――――す!!」

「お、俺の生命保険は……駄目だ、テイルブルー特約がない!!」

「コワイ……ヒンニュウコワイ……オレ、ニゲル……」

　モニターに映ったテイルブルーを目まの当たりにした瞬間。

　戦士たちは竦すくみ上がり、三々五々に散っていく。

　早くも死を覚悟し、生命保険の約やつ款かんを確認している者。

　恐怖のあまり、言語レベルが原始に戻った者までいる。

　あんなに楽しくテイルレッドのことを妄想していたというのに、何な故ぜ、こんな惨事に。

　楽しい海水浴に興じている最中、海面に大きな背びれを見かけた海水浴客たちもかくやという狼ろう狽ばいぶりだ。

　机にぶつかり、壁に突っ込み、他の戦士たちに激突し……。

「おふっ……」

「う～ん……」

　散々騒ぎ立てた後、次々に痙けい攣れんを起こし、倒れていく戦士たち。

　生まれたての子鹿が震ふるえながら立ち上がった直後に絶命していくかのような惨状だった。

「お前ら何でみんな、この世の終わりみたいな顔してるんだよ～」

　死し屍し累るい々るいな惨状を、陽気にけらけらと笑い飛ばすアポロギルディ。

　この世の終わりだからにほかならなかった。

「まー心配する必要はねーっしょ！　俺たち終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーが揃そろってるんだぜ、負けるなんてありえねーから!!」

　陽キャのポセイドンギルディが軽い口調で言うので、むしろ嫌なフラグが立ったようにさえ思えてくる。

　そもそもつい先ほど、一度ずつツインテイルズに負けたと宣言したばかりなのだが……。

「……皆さん……」

　怯おびえる戦士たちを目の当たりにし、スワンギルディは沈ちん鬱うつな表情を浮かべる。

　戦士たちがテイルブルー怖いテイルブルー怖いと狼狽うろたえるのは、この基地の名物。

　古参のスワンギルディは、誰だれよりも多くそれを見てきた一人だ。

　しかしこの基地は言わば、セーフティーゾーン。ここにいる限り、テイルブルーの魔手が伸びてくることはなかった。

　だが、そのシェルターは今、崩壊の時を迎えようとしている。

　隊長であるスワンギルディは──一つの決断を迫られていた。

　そんな中、ハデスギルディが一歩前に進み出た。

「勝手にこの基地を決戦の場に使われることを決められてしまったのだ、君たちが不満に思う気持ちもわかる」

　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの中で最も落ち着いた物腰の戦士である彼は、パニックに陥おちいった巨漢たちを、冷静に諭さとしていく。

「しかしこれは、首領様のご意志だ。首領様御自身が、ツインテイルズとの直じき々じきの謁えつ見けんを望まれているのだよ。そのためにまず、基地へ招待せよ─と仰おつしやられた。どうか理解して欲しい」

「ハデスギルディ殿……」

　ハデスギルディの物柔らかな声に、戦士たちも僅わずかながら冷静さを取り戻していく。

　彼もまたツインテイルズ全員をドン引きさせた手て練だれの変態なのだが、本性を隠すのが上う手まく、ぱっと見はこのように穏やかな紳士にしか見えない。

「お前たちがツインテイルズとず──っと戦ってくれてたから、首領様が興味持ったってわけさ。誇っていいことだぞ~、あの人いっつも退屈してて、楽しいこと探しがライフワークみたいなとこあるから!!」

　アポロギルディもそうフォローした。

　ツインテイルズとずっと戦っていた─。

　深読みすれば、長い間ツインテイルズに手も足も出なかった部隊

への遠回しな叱しつ責せきにもとれるが、アポロギルディは他者の努力は素直に賞賛する。本心で言っているのだろう。

「その代わりと言ってはなんだが、私たち終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーが今後の君たちの行動を制限することはない。これまでどおり、出撃するもよし。彼女たちがここへ来るまで、準備を整えるもよし。好きにしたまえ」

　ハデスギルディはそう言うと、終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーの他の三人に目線を移していった。他の面々も、異存はないようだ。

　終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーの挑戦を受けたツインテイルズはこれからどうすべきかを話し合っていたが、それはエレメリアンたちも同じだった。

　ツインテイルズが攻め入って来るまでに、この基地の迎げい撃げき態勢を万全のものとするか。

　それとも、最後に一花咲かせるべく、出撃するか。

　その決断を、残存軍の兵士たちに任せる。

　最高幹部が末端部隊に下す、破格の温情と言えた。

「まー、しばらくは様子見してると思うよ。ああも堂々と攻めて来いって言われたんだ、ツインテイルズだって逆に慎重になってる可能性が高いだろうからね～」

　部下たちの緊張をほぐすかのように、アポロギルディは言った。幼い外見、無邪気な振る舞いとは裏腹、彼女は非常に頭が切れる。相手の思考を読むのもお手のものだ。

「な、なるほど……確かに！」

「よほどの猪ちよ突とつ猛もう進しん馬ば鹿かがツインテイルズにいない限り、慎重になるのは当然でありますからな!!」

　ほっと胸を撫なで下ろす戦士たち。

　だが、彼らも想像だにしないだろう。

　そのよほどのことを即座に提案し、危ういところで仲間たちに制止されていたほど、テイルブルー・津つ辺べ愛あい香かは蛮族だということを。

「んじゃ、テイルレッドを丁重にもてなすために、モテ力高めちゃう~？」

　ポセイドンギルディの音頭で、戦士たちはわっと歓声を上げる。

　これまでもテイルレッドにモテるための講座をポセイドンギルディから受けていた戦士たちだが、もうすぐテイルレッドがここに来るかもしれないと思うと、俄が然ぜんやる気も出るというものだ。

「チッ……またモテ講座か。気持ちの悪い奴やつめ、ワシが監視しておかねばなるまいて」

　ゼウスギルディは仕方なくという雰囲気でポセイドンギルディに近寄る。彼女は何な故ぜか……何故か、悪態をつきながらポセイドンギルディにちょっかいを出すのだ。何故か。

　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーと一般兵。地位の違い関係なく、戦士たちは楽しげに語らう。

　その喧けん騒そうは最後の宴の始まりを予感させるようで、どこか物寂しさを感じさせた。

　空とも海とも大地とも知れぬいずこかに存在する、神秘と科学の結晶。

　基地であり、移動母艦。そして、エレメリアンたちの暮らすコロ

ニー。

　人間には見ることすら叶かなわない神殿……聖域というべき場所。

　アルティメギル秘密基地。

　それは長きにわたり、エレメリアンたちが観み束つか総そう二じたちの世界へ侵攻するための拠点たり続けた。

　最初にやって来たドラグギルディ部隊の移動母艦を核とし、増援部隊、首領直属部隊と次々に別部隊の母艦をドッキングさせ、その度たびに拡大し続けた。

　多くの部隊、多くの戦士の遺志を受け継いだ、アルティメギルという大組織の中でも唯一無二の弩級要よう塞さいなのだ。

　その大基地は今、初めて、侵攻される側になろうとしている。

　ツインテイルズとアルティメギル。

　双方の総力をぶつけ合う、最大の戦いの舞台として。

◇

　長めの会議が終わり、日が暮れ始める頃ころに俺たちは学校を後にした。

　イースナとメガ・ネは部室の転送ロッカーを使って自宅に帰るのだが、今日はトゥアールも気になることがあると言って、転送ロッカーで先に帰った。

　慧え理り那なや桜さくら川がわ先生とは通学路の途中で別れるので、少しの距離とはいえ今日は珍しく愛あい香かと二人だけでの下校となった。

　二人肩を並べて、通学路を歩く。

会議の結果が不満なのだろうか、愛香は黙りこくっている。

「さっきの会議のこと、気にしてるのか？　俺だってすぐ攻め込む重要性はわかってるぞ。だけど……」

「別にあたしが少数派意見だから、拗すねてるわけじゃないってば」

フォローしようとした俺を制し、愛香は溜ため息いきを一つ落とした。

「ただ……終わりが見えてきたら、いてもたってもいられなくて」

「ああ、わかるよ。早く戦いが終わって欲しいもんな」

「……でも、イースナがあんなふうに考えてるって知ったらさ……迷っちゃって」

愛香の憂ゆう鬱うつの意外な理由を知り、俺は不意に足を止めた。

愛香もそれに合わせて立ち止まり、暮れなずむ空を仰いだ。

「無理して背伸びしてるけど……あの子まだ、一三歳になったばっかでしょ。それが異国どころか異世界にやって来て、メガ・ネがいるにしても一人で頑張って、アイドルとして成功して……。その今を引き換えにしなきゃ乗り越えられない戦いかもしれないって、不安そうにされちゃったらさ──」

よく、国が違っても世界は空で繫つながっている……などと表現されることがあるが、イースナの故郷はこの空とさえ繫がっていない。

考え過ぎかもしれないが、今の愛香のようにふと空を見上げた時、イースナは不安に思うこともあるのかもしれない。

だからこそ俺は、トゥアールやイースナに孤独な思いをさせまいとしてきたつもりだ。

そしてツインテイルズ最年少であるイースナのことは、トゥアールはもちろんだが、愛香たちも姉のような思いで見守っているのだろう。

「あのね、そーじ」

　愛香は何か言いづらいことがあるようで、俺の方をしきりに見てきた。

「みんなには反対されると思ったから、あの場では言わなかったけどさ。何も、全員で基地に行く必要……ないよね。そうすれば、こっちの世界も守れるわけだし」

　なんとなく、俺は愛あい香かが何を言いたいのかわかるような気がした。

　俺も、会議では言わなかったが考えていたことがあるからだ。

「……例えば」

　だから俺は愛香の言葉を引き継ぎ、冗談めかして言った。

「基地には俺と愛香だけで行く──とか？」

　きょとんとした愛香だったが、やがて噴き出すと、

「……あはは！　それいいね、ってか自分一人で行くって言わないなんて、そーじも成長したじゃん!!」

　俺の背中を軽く叩たたいてきた。

　多分軽くのつもりだと思うが、なかなかの衝撃だ。

　もちろんこれは、例え話の一つだ。戦力を分散して勝てるほど、終の零星フォー・ヴアリス・ジョーカーは甘くはない。

「……あたしをパートナーに選んでるのも、ポイント高い」

　愛香なら「あたしをそんな危険な目に遭わせるのか!?」みたいに怒りはしないだろうと思ったが……むしろ喜ばれるとは。

「まあトゥアールは絶対行くって言うでしょ。色々吹っ切れたって言っても……あいつの仇かたきであるエレメリアンの親玉との戦い

なんだからさ」

　愛香は頭の後ろで手を組みながら、ゆっくりと歩き始めた。

　なんとなく、愛香の揺れるツインテールが、機嫌よさそうに感じた。

「てかそーじ、突入だ決戦だとかの話はお腹なかいっぱいだからさ、その後のこと考えない？　戦いが終わったら、どうするか」

　振り返り、にかっと笑う愛香。

　なるほど、確かにそっちも考えておきたいよな。

「まずは、自分のツインテールの探究かな……。でもアルティメギルとの戦いが終わったら、テイルレッドに変身することもそうそうなくなるしな……」

「変身することがなくなるはずないじゃない。そーじ、あたしが何度止めたって不必要にテイルレッドになってたでしょ」

　呆あきれた目で俺を見る愛香。

　不必要じゃないぞ。ツインテールを結ぶ練習とか、ツインテールが見たくてテイルレッドに私的に変身してるだけだぞ。

「前に全てが終わったらブレスをトゥアールに返すって言ってたけど、トゥアールにはもう必要なくなったんだし……そーじは、テイルレッドをやめられないわよ。あたしがとやかく言うことじゃないけどさ」

　俺が朝イチでレッドに変身したりする時、愛あい香かはいつも結構な勢いで止めようとしてくる気がするが……とりあえず黙っておこう。

　愛香の言うとおり。俺は少し前まで、戦いが終わったら俺のテイルブレスを……トゥアールのツインテール属性を、トゥアールに返そうと思っていた。

　けれどトゥアールはもう、俺に託したツインテール属性とは別のツインテール属性を自身に芽生えさせ始め、それを育はぐくんでいく決意をした。

　今さらブレスを返すのは、そんなトゥアールの決意に泥を塗るようなものだ。

「でもさ。戦いが終わったら、テイルレッドってどうなるのかな。なんにでも流行はやり廃すたりがあるみたいに……世界から忘れられていったら、やだな」

　確かに、愛香の言うとおりかも。

　エレメリアンが現れなくなれば、テイルレッドが人前に姿を現す理由もなくなる。

　寂しいけどテイルレッドは少しずつ、人々の記憶から消えていくのかもしれないな……。

「あー。何か結局戦いのこと考えちゃってるわね……。ビビってんのかな、あたし……」

　俺に背を向けたまま、愛香は再び空を振り仰いだ。

　そうか……愛香は、不安なんだ。

　冗談めかしてはいるが、これは愛香の本心だろう。最後の決戦が現実的になって、ナーバスになっているんだ。

　俺の前でぐらい、そんな強がりをしなくてもいいのに……って思う。

　そう言ったら、愛香は怒るかもしれないけれど。

「ねえ、そーじ」

　黄昏たそがれをツインテールにまとわせた愛香が、そのツインテールをたなびかせ、俺に振り返った。まるで、星ほし屑くずを振りまくかのように。

「――基地に突入する日が決まったら……最後の夜、空あけておいて。そーじのその時間、あたしにちょうだい」

　夕焼けのせいだろうか、愛香の顔がやけに紅あかく染まって見える。

「……？　うん……」

　俺はとりあえず、頷うなずいておいた。いつになるかわからないけど、多分他に予定が入ることなんてないだろう。

「あ、あはは……あたし、何言ってんだろ……」

　照れくさそうにツインテールの毛先をいじり始める愛香。

「……あの、ね。そーじ。ずっと前から……言おうと思ってたんだけど……」

　その時、俺と愛あい香かのトゥアルフォンが同時に鳴り響いた。

『トゥア――――――――――ル！　トゥア――――――――――ル!!』

　通話を繋つなぐと、悲しげなトゥアールの声が木霊こだまする。

　着信音かと思ったが、トゥアールの肉声だ。

「うっわびっくりした、何よこの古代言語の亜種は!?」

「多分トゥアールが、『うおーんうおーん』みたいに嘆いてるんだと思う……」

　俺は勘でそう言ったのだが、トゥアールに正解をもらった。

『さすがは総そう二じ様、私のことは何でもわかってくださるのですね！　まさか蛮族ごときに先を越されるとは、情けなくて嗚咽おえつも漏もれるというものです……!!』

「あんた、いつから聞いてたのよ！」

『エレメリアンが出現したから連絡しようとしただけです！　そしたら愛香さんがめっちゃあらかじめ練習してたみたいな芝居がかった仕草でくるって回転してたから―』

「練習なんてしてな……！　……え、何、エレメリアン？　こっちには全然アラートとか来てないけど」

確かに、今ならトゥアルフォンに搭載されている電子妖精エレクトフエアリー〝とぅあるん〟がエレメリアンの出現を知らせてくれるはずだよな。

『そうです！　エレメリアンが出たと、ネットで騒ぎになっています！　こちらでは反応が探知できませんでした……!!』

トゥアールが言うには、念のため「エレメリアン」などの特定のワードを監視しているＳＮＳからの情報で初めて、エレメリアンが今出現しているとわかったらしい。

気になるからすぐ基地に帰るってトゥアールが言ったのは、このことだったのか？

「つまり、今はまだ暴れてないってことか。たまにあるよな」

エンジェルギルディが同人誌を買いに人間界に通っていたのを探知できなかったように、トゥアールの基地のエレメリアン探知システムは、エレメリアンが人間を襲おそおうとするなどして属性力エレメーラを活性化させた状態でなければ、探知することはほぼできない。

こればっかりは、システムの限界だ。

『そういうわけで現場に急いでください、慧え理り那なさんとイースナにも連絡しました!!』

桜さくら川がわ先生は、今日は待機だそうだ。

アナザーテイルブルーのギアも変身回数が限られているかもしれないということで、得体の知れない敵が相手の時は初しよ手ては待機、それがトゥアールの方針だという。

俺は愛香と頷うなずき合うと、トゥアールのナビゲートで変身しても大丈夫な人目のない場所をサーチしてもらい、急いで向かった。

◇

　変身した俺とブルーは、転送ポイントでイエロー、ブラックと合流。

　一体どんな奴やつが待ち構えているのかと警戒していたが、トゥアールから一般市民がエレメリアンを目撃した場所が大学病院の前と聞いたところで、ある予感があった。

　ビルの屋上を飛び伝って現場に到着してみれば、やはりそこにいたのは俺が思ったとおりのエレメリアンだった。

「スワンギルディ……！」

　俺は重々しくその名を口にする。

　全身に無数の傷痕を刻んだ戦士。スワンギルディだ。

　大学病院のエントランスの前で、腕組みをして仁王立ちになっていた。

　俺とブルー、イエロー、ブラックは四人並んでスワンギルディの前に降り立った。

　何もせずただ立っていただけなのだろうか、患者や病院関係者が慌あわてて逃げ出している様子はない。

『おかしいです……スワンギルディはすでに戦闘態勢に入っているはずなのに、こちらで一向に反応を感知できません！』

　トゥアールの言うとおり、俺たちの目の前でスワンギルディは属性力エレメーラを立ち昇らせている。エレメリアンがこの状態になったら、基地ではっきりと反応をキャッチできるはずなのだ。

「お前、自分の身体からだに何か細工でもしているのか!?　反応を探知できないみたいだけど……」

　俺の質問に、律儀にもスワンギルディは答えた。

「私も認識を攪かく乱らんする装置を持っている。今後も属性力エレメーラを頼りに私を探知することはできぬぞ、ツインテイルズ」

　俺たちの認識攪乱装置イマジンチヤフのようなもの……唯ゆ乃のが渡したのか。唯乃は、親友のペガサスギルディの遺産というべき

発明品をいくつも所持していたからな。

　というか、それはかなりまずいぞ。

　おとなしくしてるどころか、こいつが人間の属性力エレメーラを奪おうとし始めても、今日みたいに誰だれかがネットに書き込みでもしない限り発見が遅れるってことじゃないのか……!?

「あんた、性懲こりもなく病院狙ねらって……」

　ブルーが早速怒りを露あらわにする。

　逃げ出すことさえできない人が大勢いる、病院という空間。看護服属性ナースを持つがゆえにそこをターゲットにするスワンギルディを、ブルーは特に敵視しているのだ。

「せっかく探知を逃のがれられるなら、おとなしく引きこもっておればいいものを。人間に発見されて通報されるとは、世話がないのう」

　隠密術には一家言あるのか、ブラックが辛しん辣らつに言い放つ。

「別に今日は、ナースが目当てで来たわけではない。無論、見たくないかと言われれば嘘うそになるがな。認識を攪乱した状態でお前たちが私を発見するまでどれほど時間がかかるか、試してみたのだ」

　スワンギルディはブルー、イエロー、ブラックに視線を投げ、落ち着いた口調で言った。

「私はテイルレッドと、二人だけで話がしたい。他の者たちは外して欲しいのだが」

「駄目よ」

「駄目か……」

　ブルーに即答され、しょんぼりするスワンギルディ。

　気を取り直して、俺たち全員に向き直った。

「近々お前たちツインテイルズが、我われらの基地へ乗り込んでくると聞いた。それは本当か」

「本当だ」

　俺は自分自身に発破をかける意味も込めて、はっきりとそう答えた。

　部隊で情報が共有されている。アポロギルディたちが、こいつらにちゃんと打ち明けたんだな。ツインテイルズが、基地に乗り込んでくるって。

「そうか──」

　スワンギルディの声に驚きはない。最初から、最高幹部であるアポロギルディたちが言ったことを疑ってはいないだろう。

　ただ、自分自身で俺に聞きたかっただけなのだ。

　だから俺は、この後こいつが何を言うのか見当がついていた。

　確信に近い予感があった。

「……決闘を申し込む、ツインテイルズ‼」

　それを聞いたブルーたちが思い思いに表情を変える中、俺は真顔でスワンギルディを見続けた。

　やはり、という思いしかなかった。

　スワンギルディはどうしようもなく一途で、不器用な奴やつだ。俺たちが基地に乗り込むとわかったら、こうして隊長としての責任を果たそうとするに決まっている。

「……ツインテイルズ……って、あたしたち全員と決闘するってこと？　レッドだけじゃなくて⁉」

「そうだ。テイルレッドと二人だけで話をすることを拒否された時点で、もうそれしかないと決意した」

　スワンギルディの言葉に迷いはない。

「何な故ぜ、あなた一人で？　仲間全員で力を合わせて戦おうとは思わないのですか？」

　イエローに問われ、スワンギルディは表情を硬くする。

「悪いが、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの方々を除けば、真っ向勝負でお前たちに勝てる戦士はもはや一人もいない。この私以外は」

　意外だった。こいつが、こんなに自信に溢あふれたことを言うなんて。

　隠しきれない動揺が、俺のツインテールに出てしまっているかもしれない。

「今の私は暫ざん定ていとはいえ、残存軍の隊長だ。私には基地と、仲間たちを守る義務がある！　だからお前たちが基地に来る前に、まずは私が相手になるというのだ!!」

　スワンギルディは拳こぶしを腰だめに構え、全身から闘気を噴き上がらせた。

「勝手な言い草ね。いつも人間の事情も考えず好き放題に侵攻してきてたのは、あんたたちの方でしょ。あたしたちの方から行ってやるってなった途端に被害者ヅラ？」

　ブルーは心底苛いら立だたしげにスワンギルディを見やる。

「あたしたちが、わざわざ決闘なんて受けてやる義理はないわね」

　そしてフォースリヴォンに触れてウェイブランスを出現させると、槍やりの穂先をスワンギルディの顔面に向けて構えた。

「あんたもおとなしく、基地で待ってなさい。そこで気が済むまで戦ってやるわよ。あんたたちも一度、侵略される側の恐怖を存分に味わうといいわ」

『つくづくこういう台詞せりふがサマになる女子高生ですね……』

　トゥアールが通信で唖あ然ぜんとしている。

「……いや……ブルー。義理ならあるぜ」

　ブルーには悪いが、俺は奴やつの希望を撥はね除のけるわけにはいかなかった。

「スワンギルディ、お前には何度も助けられた。だから俺には、お前の願いを聞く義務がある」

　ブルーが俺を見てくるが、少し呆あきれている程度だ。

　多分、俺はこう言うだろうと思っていたのだろう……すまない。

「その度たびに念を押したはずだ。私はお前たちを助けるのではなく、自分のためにやっただけだとな」

「結果的にそうなっただけだとしてもだ」

　俺がそう返すと、スワンギルディは闘気を収め、穏やかな顔で向き合った。

「だがそれでも、感謝するぞ、テイルレッド。……フッ、この言葉も、何度言ったかわからぬな」

「ああ。お前以外のエレメリアンとも……飽きるくらいこんなやりとりをしたよ」

　スワンギルディはいつしかエレメリアンという種としての本能、アルティメギルという組織の任務という枠を超え、自分の信念のために行動するようになっていった。

　まるであのフェニックスギルディ、結いわ翼ばね唯ゆ乃ののように。

　それは結果的に俺たちを助けることになった。特に、俺たちをエンジェルギルディの攻撃から護まもり、さらには

叱しつ咤た激げき励れいをしてトゥアールの心を

救う一翼を担ってくれたことは、敵味方という立場を超えて感謝している。

　そんなこいつが、一度流れた俺との決着を今度こそ着けたいと願うなら……俺は、ツインテールを逸そらしたくはない。

「フッ……。不思議な奴やつだ。それほど幼いというのに、お前には高潔な仁の心がある」

　スワンギルディは真まっ直すぐに俺を見つめ、言葉に熱を込めた。

「テイルレッド。私はお前のそんなところが、ずっと好きだった――」

　俺がぽかんとしている隙すきに、横を青、黄、黒の三色が残像を描いて抜けていった。

　ブルーが足払いをかけてスワンギルディを転ばし、イエロー、ブラックの三人で総攻撃を加えていく。

「黙って聞いてりゃ何マジな告白してんのよ!!」

「決闘の申し出をしながら告白するなど、女の子に失礼ですわ!!」

「バッチリとキメ声作りおって、さては前々から告白コクる練習しとったな貴様!!」

　ひたすらに槍やりで突かれ、銃で撃たれ、鎌かまで斬きられるスワンギルディ。

「あ゛――――――――っ!!」

地面に転がったまま身体からだを丸め、暴虐に耐えている。

結局こうなるんだよな……。

ブルーたちにタコ殴なぐりにされるスワンギルディを見ていられず、俺は完全に意識を逸そらしてしまっていた。

「はいはいはいはいもうおしまいにするわよ、二人とも下がって！　完全解放ブレイクレリーズ！　オーラピラーッ!!」

そのせいで、ブルーの行動に気づくのが遅れた。

ウェイブランスを完全解放ブレイクレリーズし、オーラピラーでスワンギルディを拘束するブルー。

「！　待てブルー！」

既視感溢あふれる光景に、俺は一歩遅れてブルーを制止した。

「エグゼキュ――ト！　ウェ――――――――イブッ!!」

しかし時すでに遅く、必殺の槍そう撃げきがスワンギルディに放たれた後だった。

「なあああああああああああああああ……!!」

だが、スワンギルディは狼狽うろたえることなく、青い円柱型の結界の中で静かに闘気を迸ほとばしらせ始めた。

「すッッッ!!」

そして、気合い一喝。

掌しよう底ていでオーラピラーを突き破り、迫り来るウェイブランスを突き出した右掌てのひらで止めるスワンギルディ。それだけでは終わらなかった。

スワンギルディとウェイブランスの間に小さな極彩色の穴が穿うがたれ、ウェイブランスがその中に吸い込まれていったのだ。

『これは……スワンギルディは自力で空間を……次元を突き破っています……!!』

トゥアールがスワンギルディの能力を解析し、通信してくる。

ウェイブランスは完全に空間に穿たれた穴の中へと消え去り、スワンギルディはオーラピラーを易やすす々やすと砕いて脱出した。

「テイルレッドよ。お前の本気の剣は、次元そのものをも斬裂せしめると聞いた。しかし今の私も、同じことができる」

スワンギルディは、エグゼキュートウェイブを完封した己の手の平を凝じっと見つめた。

「いつも一歩及ばぬ実力……常にあと僅わずか届かぬ、この手……！」

その右手を再び前に突き出すと、そのまま力強く握り締めた。

奴やつの目の前にいる、俺のツインテールを摑つかむかのように。

「その悔恨が積み重なり、私に力をもたらしたのだ。お陰でエンジェルギルディの死の攻撃からも生還することができた」

スワンギルディの揺るぎなき眼まな差ざしは、俺に今一度、かつての戦いを思い起こさせた。

最後にこいつと戦ったのは、イースナが俺たちの仲間になった時ぐらいだったか。

スワンギルディは、俺に一対一の決闘を申し込んだ。その決闘で俺は、ノーマルチェインのままあっさりこいつを倒しちまって拍子抜けしたのを覚えている。

俺はスワンギルディを見み逃のがそうとしたのだが、病院をつけ狙ねらうこいつの危険性を重く見たブルーに、不意打ちのような形でとどめを刺された。その時は何とか逃げ延びたが、スワンギルディにはブルーの必殺技・エグゼキュートウェイブの恐怖が深く刻み込まれたことだろう。

だが今、その必殺の槍やりを正面から打ち破ってみせることで、今までの自分とは違うと──この技はもう恐るるに足らないのだと証明した。

　ブルーへの、これ以上ないほどの意趣返しだ。

「ちょっと！　あたしの槍、返しなさいよ!!」

「トドメをブチ込んどいて、しれっとそんなこと言えるからやばいわ、こやつ」

　ブラックは呆あきれているが、ブルーは割りと本気で言っているっぽかった。

「フッ……。あの槍がどこへ行ったか、私にもわからぬ。次元を越え、別の世界に埋もれ、やがて地層の中から出土する日が来るかもしれぬ。その時原住民たちは想像するであろう、この槍を使うのは、どんないかつい野生児だったのかと……。テイルブルーよ、類人猿じみた想像図を描かれ、教科書に載るがいい!!」

　ブルーをビシリと指差すスワンギルディ。当然、ブルーはこめかみがビキビキしていらっしゃる。

　こいつ、煽あおりスキルも成長してやがるな……。けっこう真ま面じ目めな奴だったのに、先輩エレメリアンたちの悪影響を受けたか……？

「ふん。技一個破ったからなんだっての？　勝負はこれからよ!!」

「いいや、今日はここまでだ！」

　進化装備エヴォルブアームズ・エターナルパッドを取り出したブルーへ、スワンギルディは右手を勢いよく突き出した。それは先ほどのような防御姿勢ではなく、制止の合図だ。

「お前たちの長おさたるテイルレッドは、決闘を受じゅ諾だくした。テイルブルーよ、何を焦あせる？　私と正々堂々決闘するのが怖いのならば、お前だけは引っ込んでいればいい」

「！　誰だれがあんたなんか……!!」

　見え透いた挑発だが、こう言われればブルーも決闘を受けざるを得ない。

「安心しろ。この先、気配を消したまま人間から属性力エレメーラを奪うつもりはない。それは、私の誇りに関わるからな。しかし

──」

　その先は皆まで言わせるな、と言う目つきだ。

　俺たちが決闘を拒こばんだり、約束を反ほ故ごにしたらその限りではない、って言いたいわけか。

　スワンギルディは今日のことで、それが可能であることを俺たちに知らしめた。上う手まいこと考えやがったな。

「究極のツインテール。そして、ドラグギルディ様の生涯最高の好敵手、テイルレッドよ。今の私ならば……お前を失望はさせない。次に会う時、私の全力を見せよう……」

　俺たちに決闘を申し込んだ時点で、今日の目標は達成されたのだろう。

　スワンギルディは自身の背後に出現させた転送ゲートの中に、速すみやかに身体からだを踊らせたのだった。

　俺とブルー、イエロー、ブラックは複雑な思いでそれを見送った。

　トゥアールも、通信で小さく息をついたのがわかる。

「すごい自信ですわ……今までの彼とは何かが違います」

　イエローの言うとおりだ。自分の師であるドラグギルディを倒した俺へ、今の自分ならば負けないと豪語してのけるとは。

　新兵がゆえに謙虚だった今までのスワンギルディからは、考えられないほど大胆な発言だ。

　しかも奴やつは、自分の力にはさらにその先があると宣言した。

　絶え間なき成長を続けてきた戦士。俺のライバル、ドラグギルディの忘れ形見。

　こいつの存在を、俺たちは忘れていた。

　スワンギルディこそが、アルティメギル基地に乗り込む前の最後

の巨大な壁になりそうだな……。

第二章

受け継いだ戦士。

終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの宣戦布告だけでも頭が痛かったというのに、今度はスワンギルディが単独で決闘を申し込んできた。

やるべきことは多いが……ツインテイルズというヒーローであると同時に学生である俺たちには、もう一つやるべきことが迫っている。

放課後、ツインテール部の部室では俺と愛あい香か、トゥアールが長机に教科書とノートを広げていた。

「観み束つか君、期末試験の準備はいかがですか？」

生徒会の仕事を終え、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生もやって来る。

慧理那の言葉通り、もうすぐ三学期の期末試験だ。

この部室では、勉強会を開くことがたまにある。特に、今のように期末試験が近づいた時に多い。

「どうかな……赤点だけは取らないようにしないと。ツインテイルズの戦いは放課後によくあるからって、補習は免除にならないからな」

慧理那の質問には、曖あい昧まいに答える。少なくとも俺は、高得点を取れる自信は全く無い。

「秘密のヒーローのつらいところですわねっ」

上品に小首を傾かしげるのに合わせ、慧理那のツインテールが揺れる。無邪気なツインテールに、悩みが吹き飛ぶようだ。

「観束、ハーブティーだ。疲れが取れるぞ」

「ありがとうございます」

桜川先生にお茶を淹いれてもらい、俺は一息ついた。

「わからなおっぱいところがあったら何でも聞いておっぱいね総そう二じ様！　家庭教師スタイルに着替おぱいしたトゥアールちゃんが男の子が大好きな勉強をおっぱいしますおっぱい!!」

「勉強会してんのに偏差値低い修飾語使いまくってんじゃないわよ三桁けた!!」

　トゥアールと愛香も、勉強会の時は建物破壊レベルのじゃれ合いは控え、大人しいものだ。

　超天才科学者のトゥアールにとって高校のテストなんて、それこそ幼稚園のなぞなぞみたいなもんだろうし、愛香も何だかんだでいつもテストの順位は上の方にいる。

　慧理那はツインテイルズになりたての頃ころ、成績がガタ落ちして理事長に怒られていたが……今はしっかり学年上位の成績をキープしているらしい。

　イースナはこの世界では学校に行っていないが、発明品を結構作ったりしているから頭はいいだろうし……桜さくら川がわ先生は体育教師とはいえ、当然他の教科も普通に教えられるはずだ。

　ツインテイルズの中で、成績が心こころ許もとないのは俺だけか。

　ヒーローのつらいところだと慧え理り那なは言ってくれたが、他のメンバーが問題ない以上、それは全く言い訳にならないんだよな……。

『戦いが終わったら、どうする？』

　ハーブティーを飲んでいると、ふと、先日の愛あい香かの言葉が脳裏をよぎった。

　一年の俺たちは進路をまだ決める時期じゃないが、いくら陽よう月げつ学園が大学までエスカレーターだからって、成績が悪いままでいいってわけはないからな。

　次の期末で急には無理だけど……戦いが終わったら、俺ももっと気合い入れて勉強するか。

「どうしたのそーじ、考えごと？」

俺が考えごとをしていると、高確率で愛香に気づかれるのだが……そんなにわかりやすい顔をしているのかな？

「ああ、テスト勉強してたら進路のこととか考えちまって……。俺に合った職業って、何だろうな」

「わたくしも、様々な属性に触れる度たびに、職業のことを考えることはありますわ。とはいえ、わたくしは神しん堂どうの当主を継ぐと思いますが──」

慧理那の言うとおり、けっこう職業関係の属性にも触れたりするから、そういう時は進路のこととか考えちゃったりするんだよな。

「じゃあ俺は、ツインテールの研究職に進む──なんてのもいいかな」

「あ、うん、そ、そうだね……」

俺は割りとすんなりそう結論したのだが、愛香は何やら歯切れが悪いな。

せっかくツインテールへの理解が世界に深まったというのに、ツインテールに関する様々な研究が行われているということは、ニュースなどでも報じられない。

ツインテールのヒーローを卒業した後も、ツインテール研究の第一人者として社会に貢献できたら素敵だなって思う。

「まあ研究員ですか!?　いいですねえいいですねえ、地下基地だけじゃなく普通に研究所を建てましょう、ツインテール研究所です!!」

トゥアールが諸もろ手てを叩たたいて提案する。

ツインテール研究所……!?

何だその現実的かつ夢のある機関は。俺、めっちゃ勉強頑張っちゃうよ。

「ツインテール研究所か……いい響きだな……！」

「そうでしょうそうでしょう！　総そう二じ様のお隣の家を買収し

て、私たち二人の勤める研究所に改造しましょう!!」

「あたしん家ちじゃないそこ!!」

「うふふ。では、研究所完成の暁には、わたくしもお手伝いをさせてくださいな」

　慧え理り那なも賛同してくれて、俺はすっかりその気になってしまった。

　おぼろげでもこういう将来の目標が見えてくると、期末試験だってやる気が出てくるってもんだよな。

「桜さくら川がわ先生って、これからもメイドと学校の先生を両方続けるんですか？」

　愛あい香かにそう聞かれ、桜川先生は笑いながら首を振った。

「いや……教職も面白くはあるのだが、お嬢様のご卒業と合わせて私も辞することとなるだろう。私の本分はメイドだからな」

　桜川先生は元々慧理那の護衛の延長で陽よう月げつ学園高等部の教師となったのだから、そういうことになるのか。

　あ……つまり、俺たちが三年生になったら、慧理那と桜川先生とは学校で逢あえなくなるのか。少し寂しい感じがするな。

「そんな寂しそうな顔をするな観み束つか、私とは毎日顔を合わせるだろう。結婚するのだから」

　桜川先生は、俺を励ますように言った。

　ちなみにさっき淹いれてもらったハーブティーのカップがソーサーではなくコースターの上に置かれているのは、それが折り畳たたんだ婚こん姻いん届とどけだからなのだろうが、俺は気づかないふりをしていた。

「先代のメイド長は寿退社したが……私は結婚してもメイドを辞める気はないしな。妻でありメイドというわけだ」

「ちょっと桜川先生!!」

「黙ってれば何、気安くプロポーズしてるんですか！　っていうか何ですかそのいい笑顔は、最近女子力上がりすぎですよ尊みことさんのくせに!!」

　愛香とトゥアールが動きをシンクロさせて長机に両手をつき、桜川先生に詰め寄る。

「観束は私と結婚すると言ったんだ。プロポーズではなく、ただの確認だぞ」

　結婚属性ブライドの一件以降、桜川先生は俺と結婚するのは確定だと言っている。

　今までずっと婚姻届を渡されてきたんだから何てことないはずなのに、最近今までより強力な圧を感じるんだよなあ……。

「そういえば、恋れん香かさんって来年は大学部の三年だよな？　進路は決めてるって？」

　身近にいる唯一の大学生が、愛香の姉の恋香さんだ。こういう話題になったので、彼女の進路も気になる。

「まあ、色々考えてるみたいだけど。よく聞くのは、看護師とか薬剤師。一応、大学でも薬学部みたいだし」

　愛香はしれっと答えたが、俺はちょっと意外だった。

「へー、恋れん香かさんって薬学部だったのか」

　恋香さん、うちの喫茶店に来てたまに話したりするけど、全然聞いたことなかったな。

　愛あい香かがスワンギルディに特に当たりが強い理由も、これでまた一つわかった。肉親が医療の道に進む可能性があるんだ、なおさら病院を狙ねらう敵は許せないよな。

　そんな感じで、試験勉強の傍かたわら、俺たちは将来のことについて語り合った。

　何だろうな。

　普段、この部室で取り留とめのないことを喋しやべっていても、

将来についてなんてそうそう語る機会はなかったのに……最近、こういう話が増えてきた気がするな。

「なんじゃー将来の話か？　わらわはとりあえず一八まではアイドル続けるかのー。絶頂期に引退するプランじゃからなー」

　仕事終わりなのだろう、アイドル衣装のイースナが転送ロッカーから現れた。メガ・ネは、一緒ではないようだ。

　到着後すぐに聞こえた言葉の端はしから話題を察したのか、すぐ様自分の展望を語ってきた。

「あと五年も人気を維持できるつもりですか？　そのうち飽きられて、人々の記憶から忘れ去られるでしょうね」

　トゥアールはいつものように、イースナへ軽口を向ける。けれどそれは、先日テイルレッドのこの先について考え、寂しさを感じた俺にも少し刺さる言葉だった。

　そうだよな……いつまでも記憶に残るって、難しいことだよな。

「いやほら、わらわ若いから！　若いからめっちゃエネルギッシュじゃから！　誰だれかさんと」

「違いませーんそこまでですイースナ！」

　何の偶然か、トゥアールの言うとおり、まさに会話はそこまでだった。

　イースナも来たし、もう少しみんなで将来の話をしようかと思ったところで、

『エレメリアン出現です』

　長机の上に電子妖精エレクトフエアリー・とぅあるんが起動する。

　トゥアールの顔をしたデフォルメアバターが、エレメリアンの出現を俺たちに告げた。

「来て早々じゃな……とりあえずわらわは、今日も出撃するぞ」

「一応、反応は一般兵クラスです。別にあなたも一緒に行く必要はありませんよ、イースナ」

　気け怠だるそうに肩を回すイースナを見て、トゥアールがぶっきらぼうな口調で気遣う。

「いや、今日はそれ程疲れてはおらぬ。それにしばらくの間は、奴やつらの出方をしっかりと見極めておきたいのでな」

「私はどうすればいい？」

　イースナに続き桜さくら川がわ先生が、トゥアールに出撃の可否を尋ねる。

「相手が幹部級でない限り、できれば尊みことさんは変身回数を温存させてください」

「そうか、その判断はお前に任せる」

　桜さくら川がわ先生は、トゥアールと一緒に地下基地に移動することを選んだ。

　そういうわけで今日は、俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナの四人で出撃することになった。

◇

　トゥアールのナビゲートに従い、俺とブルー、イエロー、ブラックは現場へと急行する。

　やはり、メガ・ネは仕事で来れないそうだ。ちょくちょく、一人で残業していることが多くなってきた印象だ。

　善いい沙すな闇あん子こがアイドルを休業しなくていいように、裏で頑張っているのかもしれない。

　メガ・ネも戦っているんだ。一般兵ぐらい、何体来ようが俺たち

だけで倒してみせなきゃな……！

「来るかもしれないとは思ってたけど……メチャクチャ早いな」

　俺は出現タイミングを訝いぶかしむ。一般兵のエレメリアンが、スワンギルディのように決闘を申し込んでくるような奴やつでもない限り、こんなに早くやってくるとは思わなかった。

「エステショップ……美容関係のお店ですわよね。そこに現れたということは、痩身の属性でしょうか」

「美肌の属性なぞもありえるぞ。日焼け肌が好きだという奴もおったからのう」

「あたし、それ系の奴らが一番苦手なのよね……」

　出現した場所がエステショップだからか、現場に向かうまでの間、女子組は敵が何の属性なのか予想し合っていた。

　俺には見当もつかないな……。そういえば、テレビのＣＭでツインテール専門のエステ店ができたというのを見たことがある。

　エステでツインテールを磨こうとするのを阻はばむというのなら、断じて許せない!!

「おっ、何かガタイのいいのが見えたぞ」

　エステ店近くのビルの屋上に飛び移ったところで、ブラックの眼鏡めがねが敵影を捉えた。

　確かに、ビルの下に見えるエレメリアンは、なかなか恰かつ幅ぷくがいい。

　そのエレメリアンは、エステショップの前で逃げ惑う女性を捕まえようとしている。

　俺たちは、屋上から跳躍し、その場を目指した。

「無駄毛処理をすることはこの俺が許さん！　世の女性よ、無駄毛をガンガンに生やせい!!」

　野太い声で女性に訴えているエレメリアン。

　俺とブルー、イエロー、ブラックは力が抜けて空中でバランスを崩し、それぞれ地面に墜落してしまった。

「何してんだお前っ!!」

「むむっ……現れたかツインテイルズ!!」

　エレメリアンは、筋肉質な身体からだを駆動させて振り返る。

　特徴的なのは、顔をすっぽりと囲み、下は胸元まで伸びたたてがみ状のパーツだ。

　堂々とした雰囲気といい、百獣の王ライオンを想起させる。

「名乗らせてもらおう！　俺は、無駄毛属性ワーストヘアーのライオギルディ。体毛……無駄毛を愛する戦士だ!!」

「また頭痛くなるのが来たわ……」

　敵の名乗り上げを聞いて額ひたいを押さえるブルー。

「はん、こやつもツインテイルズが怖くて今まで出撃の機会を逸してきた雑ざ魚こじゃ、恐るるに足らぬわ」

　ブラックが吐はき捨てると、ライオギルディはすかさず反論した。

「おっと、それは違うぞ。薄着になる夏は皆、無駄毛処理に血道を上げる──だが、冬は多くの女性が無駄毛処理をついついおろそかにしてしまう季節！　であろう!?」

　ギャラリーの女性たちをぐるりと見渡し、したり顔で言うライオ

ギルディ。

　女性たちはひっ、と後あと退ずさる。

「ならばこそ俺は、今この時に罷まかり越こした！　冬という季節──俺は無駄毛を鋭く狙ねらう狩猟者ハンターと化すのだ!!」

　大おお仰ぎように構えを取り、高らかに主張するライオギルディ。

「冬眠してろっての」

「さふぁりっ!?」

　そんな演説を一いつ顧こだにせず、ブルーの強制冬眠キックが炸さく裂れつする。

「かなり前に戦った腋わき好きのエレメリアンも、似たようなことを言っていましたわ……」

「世の女性からすると問答無用でクソじゃな、こいつら」

　イエローとブラックも、思い思いの困惑の視線を送っている。

「痛だだ……な……何だこの殺気は!?　幼いみぎりより野生動物を血祭りにあげてきたかのような蛮性を感じる!?」

　さすがは百獣の王、危機察知能力に長たけているぜ。

　愛あい香かは童謡にできそうな勢いで、幼い頃ころにマサカリすら担かつがずにクマを完封している。

　まして今なら、変身しなくても地球上の大概の野生動物は倒せるからな。

　野生のライオンなんて、片方の手でスマホいじったままでも楽勝で倒せるだろう。

「ぐむむ、やはりとてつもなく怖いやつ、テイルブルー……。この悪魔が我われらの基地に乗り込んでくることだけは、何としても阻止しなければ!!」

　アポロギルディのやつ、やっぱり隊長のスワンギルディだけじゃ

なく、末端兵にも宣戦布告の件を伝えたのか。

　基地が戦いの舞台になるんだ、考えてみれば当然か……。むしろ、部下に対して誠実だとも言える。

　何も知らないまま突然戦いに巻き込まれるより、ずっといいからな。

　この怯おびえようじゃ、基地でも一般兵の奴やつらは相当ブルー怖いブルー怖いってパニックになったんだろうな。

「ふ～んむ……」

　しかし、誇りの高さも百獣の王。

　ライオギルディは、ただブルーに怯えているだけではなかった。

「な、何よ、じっと見てきて……！」

「フッ……テイルブルー。間近で見ればこれはまた、背せな毛げが濃そうな女よ」

　ブルーを讃するようにうんうんと頷うなずくライオギルディ。

「おっふ!!」

　ブルーはライオギルディの腹に殺意の濃いワンパンを決め、そしてそのままアッパーカットをする要領で首元を摑つかみ、ガンを飛ばした。

「あんたらっ……！　あたしになら、何言ってもいいって思ってんでしょ……!!」

　しかし可視化された怒気とは裏腹、ブルーは顔を真まっ赤かにして、少し涙目になっている。

　ライオギルディの言葉に、傷ついたのか……。

「うん……いや違う！　むしろ、俺はお前を褒ほめ称たたえているのだぞ!!」

　それが生態だから仕方ないんだろうけど、エレメリアンって言いたいこと我慢しないで言いすぎなんだよな……。

「違うからねレッド！　そんなことないからね!!」

　ブルーは、敵から怖いだの乱暴だのと言われるのはもう慣れているだろうが、デリケートなことに関する揶揄──エレメリアン的には褒めているらしいのだが──には非常に過敏に反応する。

　女の子なのだから、当然だろう。

　それなのに妙ちくりんな属性のやつに限ってブルーを讃美するのだから、本人はたまったものではないはずだ。

「ブルーは背中に毛は生えてないぞ。いつも見てるからわかる！」

　だから俺は、周りのギャラリーたちにも聞こえるような大声で、名誉の回復に努める。

「………………！　だ、駄目だってばレッド……いつも見てるとか、そういうこと言っちゃうとさ、深読みされちゃうじゃん……!!」

　ブルーは口角を上げ、くねくねと身をよじり始めた。

　元気になってくれればそれでいいのだが、深読み……？　何をだ……？

『ええい戦闘中に発情するんじゃありません！　ブルーはアンダースーツが背中丸出しなのですから、みんないつも見ていて当然でしょうが!!』

　俺の代わりにトゥアールが通信で補足する。

「胸と同じぐらい肝っ玉の小さい女じゃ。わらわを見よ、こんな下郎に何を言われようと常に落ち着き払い、決して取り乱しはせぬ」

　ブルーの百面相を見て、ブラックが苦笑する。

　くねくねしているからか、ブラックに胸のことを言われてもブルーは気づいていない。

　ライオギルディは今度はブラックを凝視すると、これまた賞賛の言葉を送る。

「テイルブラック、お前はちょっと眉まゆ毛が太いな。流行の細眉に叛はん逆ぎやくせしその姿勢、よいぞ。もっともっと太くするがよい」

「細眉とかいつの時代の流行はやりじゃああああああ！　今はこのぐらい普通の眉が好まれるんじゃボッケエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

　落ち着きを失い取り乱したブラックが、ライオギルディに蹴けりかかる。

「だが俺は、油断して眉がつながりかけている女性はとてもいいものだと思う!!」

「図ずう体たいの割りにいちいちツボが細かいのじゃ貴様は!!」

　ダッシュで逃げながら、なおも言い続けるライオギルディ。追いかけるブラック。

　ライオンって、競走はあんま得意じゃないんじゃなかったっけ……？

「あわわ、ブラックまで……こうなれば、わたくしが……！」

　イエローは仲間たちが冷静さを失っていくのを見て、自分はしっかりしなければと奮起。

　走るライオギルディに照準を合わせるように、ヴォルティックブラスターを構える。

「何を他ひ人と事ごとな。テイルイエローよ、お前は口調がお嬢様っぽいが、そういう者こそ無駄毛が似合うのだ！」

「なっ……!?」

　唐突に自分へ話の矛ほこ先を向けられ、イエローは構えた銃を落としそうになっていた。

　ぽい、って、世界有数の富豪の一人娘だぞ、この子……。

「フフ……想像してみるがいい。蝶ちようよ花よと愛めでられ育てられた深窓の令嬢が、テラスで紅茶を飲んでいる。服装は当然、白

いドレスであろうな。鳥たちは詩を奏かなで、花々は咲き誇る……フ……、絵に描いたような楽園がそこにある」

　イエローが動揺している隙すきに、ライオギルディは芝居がかった口調で説明を始める。

「しかしその令嬢がティーカップを持つ手に目を凝らすと……ウフフ、指毛が濃いのだ」

　途中で含み笑いをした後、ドヤ顔でこちらを「ん？」と窺うかがってくるライオギルディ。

「これだけ密にシチュエーションを語り聞かせれば、いくらお前たちでも無駄毛の良さがわかったであろう？」

「わかるか」

　後ろから近づいたブルーがライオギルディの肩を摑つかみ、恐ろしく低い声で全否定。拳こぶしを一いつ閃せんする。

　エクササイズじみたくねくねを終了したようだ。

「熱弁虚むなしくまた腹パンッ!?」

　説明調な呻うめき声を上げて苦く悶もんするライオギルディ。こいつ結構タフだな……。

『そうですよ、むしろ慧え理り那なさんは年齢の割りに色々なところの体毛が不足していてそれを気にしているところが可か愛わいいんじゃないですか！　と言ってやってください!!』

　トゥアールも通信でイエローを擁護……？　擁護だよな？　している。

　ヴァルキリアギルディと戦った時もこんな会話してなかったか!?

「口だけは達者な奴やつね……決戦が近いってのにあんた程度の奴に時間取られてらんないのよ。あたしが怖いってんなら丁ちよう度どいいわ、とっととケリつけてあげる」

　ブルーが、あらためて闘志を燃やす。

「怖くなどなああああああああああああいっ!!」

　ライオギルディは唐突に雄お叫たけびを上げた。

　俺たちは、思わず動きを止めてしまう。

「見ているか、同胞たちよ！　テイルブルーが本当の蛮族ならば、背せな毛げがどれだけぼーぼーに生えていても気にするはずがない！　こやつは、腕力がちょっと強いだけの小娘に過ぎんのだ!!」

　こいつ、もしかして……基地の仲間たちが中継で見ていることを見越して、こんなことを？

　さっきは冬だから来た、とか嘯うそぶいていたが……それにしたって今は春が近づいている。

　基地決戦の報を聞いたこいつは、仲間を奮ふるい立たせるために先陣を切って出撃してきたのではないだろうか……。

『ブルーのそのちょっと強い腕力が手に負えなさすぎて今まで多くの仲間が天に召されていったというのに、その激励の仕方でいいんですかね……』

　言ってやるな、トゥアール……。

　奴の男気を感じたからだろうか。ブルーは特に言い返すこともなく、無言でフォースリヴォンに触れ、武器を取り出そうとしたのだが……。

「あれ、ウェイブランスが出ない……!?」

　反応が無く、手の平を見つめる。

『ウェイブランスはメンテナンス中ですよ！　今までみたいにブッ壊されるだけならまだしも、時空の彼方かなたに消されたんですから、時間もかかります！』

「……はあ、まいっか、素手で」

　ブルーは毎度、武器がなきゃ素手でいいや、って速攻で切り替えられることができるのがやばい。

「いいえブルー！　ここはわたくしにお任せを!!」

　全身の装そう甲こうを脱衣パージするイエロー。

　…………。

　……あれ、武装を発射したわけじゃないよな。なんか脱げてるけど。

「うふふ」

　小さく微ほほ笑えむイエロー。何な故ぜこのタイミングで脱いだ!?

　ひゃあ、とギャラリーから声が上がる。せめて通常形態の露出度はそろそろ慣れてあげてくれないかなあ……。

「むむっ……見えている肌のどこにも、無駄毛が露つゆほども見当たらぬ！　よほどお手入れを欠かさない限り、自信たっぷりにその露出度にはなれまい!!」

「わたくしがお手入れを欠かさないのは、ツインテールだけですわ!!」

　よく言ったぜ、イエロー！

　その言葉だけで、何故脱いだのかという疑問があっさりと霧む散さんする。俺もイエローを援護しようと、ブレイザーブレイドを構える。

　ライオギルディはそんな俺をじっと見つめ、

「テイルレッドはな……その幼さでは目立った無駄毛などないであろうし……ま、今後に期待だな！　早く大人になって、もじゃっと生やすのだぞ!!」

　ウインクしてサムズアップしてきた。男の俺でさえこんだけ気持ち悪く感じるんだ、ブルーたちが耐えられないのはよくわかる。

　するとどこからともなく、戦闘員アルテイロイドがわらわらと押し寄せてきた。

「モケー」

「モケケー」

「ムダゲー」

　やっぱ普通に言葉喋しやべってるよな、あいつら。

　自分たちも「無駄毛のような存在なのではないか」という悲哀を感じさせるな……。

　迫るライオギルディを追い抜いて突進してくる戦闘員アルテイロイドは、もはや壁だ。

　拳こぶしを構えるブルーを一いち瞥べつしたブラックは、俺やイエローへも順繰り視線を送ってくる。

「はっ……もしや！　レッド、ここはフュージョニックバスターじゃ!!」

「？　わかった、属性玉エレメーラオーブ──三つ編み属性トライブライド!!」

　ブラックに請われ、俺は三つ編み属性トライブライドを発動する。

　脱ぎ散らかしたイエローの武装が合身巨大砲ユナイトウエポンへと合体。そして俺のブレイザーブレイドがその巨砲の上に合体するまでは、いつもどおりだったのだが……。

「あら!?」

　イエローが喜びの声を上げる。

　なんと、ブラックの手から離れたダークネスグレイブが、ブルーのランスの代わりに下部パーツとして合体してしまったのだ。

「やったー、狙ねらいどおりじゃー！　ブルーのウェイブランスが無い状態で発動したから、代わりにわらわのダークネスグレイブが合体したぞ！　別組み替え版、フュージョニックバスター２号の完成じゃ!!」

　どうやらブラックはこれを狙っていたらしい。

「わあ、やりましたわね、ブラック！」

　手を取り合って喜ぶイエローとブラック。

　その間にもモケーはモケモケと走ってくる。

　俺が真ん中に、左右にイエローとブラックが立って、三人でフュージョニックバスター２号を構えた。

『なるほど。合体に初回認証された武器ではないダークネスグレイブも、優先順位が上の武器がない場合は三つ編み属性トライブライドに選ばれるということですね。ただ──』

　トゥアールは何か言葉を続けかけたが、それは元気のいい声に遮さえぎられた。

「ふぁいあ────────────！　じゃ!!」

　左側に立つブラックが、拳こぶしを空に衝つき上げたのを合図に、俺はトリガーを引く。

　いつもの三色とは別の赤、黄、黒の螺ら旋せん波光が、唸うなりを上げて発射された。

　その渦うずは壁と化していた戦闘員アルテイロイドたちを吹き飛ばし、最後にはライオギルディを呑のみ込んでいく。

「ぐああああああああああああああああ、俺の戦いは無駄ではない、無駄毛ではないぞ！　戦士たちよ……後に続け────────────っ!!」

　勇ましき遺言とともに、ライオギルディは波光の中へと消えていった──。

「へー、こんだけ戦ってきても、まだ色々新しい発見があるもんねー」

　発射を終えたフュージョニックバスター２号を、興味深げに見つめるブルー。

　フュージョニックバスター２号はブレイザーブレイド、合身巨大砲ユナイトウエポン、ダークネスグレイブへと分裂し、それぞれの持ち主の元へと戻った。

　しかしダークネスグレイブはブラックが手にした瞬間、火花が飛び散り、巨大な刃やいばが半分砕けてしまった。

「ぐわ、ダークネスグレイブがブッ壊れてしもうた!!」

『システムに組み込まれていない武器を前準備もせず合体させてしまったんですから、負荷がかかって当然です！　まったく、あなたまでメンテの手間を増やして……！』

　ブラックが喜んでいるからか、トゥアールも注意する声が少し優しい。

「ですが、ついにブラックの武器もフュージョニックバスターに合体できましたわね！」

「長かったのう……こんな裏技、咄とつ嗟さのことでなければ思いつかんもんなあ」

　和わ気き藹あい々あいと語らいながら、ハイタッチをするイエローとブラック。

　俺は仲間たちを微ほほ笑えましく眺めながら、無駄毛属性ワーストヘアーの属性玉エレメーラオーブを拾い上げる。

　ライオギルディ。こいつは基地で未いまだ怯おびえる仲間たちに発破をかけるべく、こうしてやって来たんだ。

　背せな毛げとか指毛とか口走っていたけど……やはり誇り高き百獣の王だったんだな……。

「ありがと―――レッドちゃ――――ん！」

　ギャラリーに手を振られ、俺も笑顔で手を振り返す。

　ブルーは……無駄毛がどうとか言われたのが気になっているのだろう、一般人たちの方を向こうとしない。仕方がないな、という感じで大きく息を吐いている。

それを見て俺は、しばし思案に耽ふけるのだった。

◇

ライオギルディとの戦闘後、基地に移動した俺たちは、変身を解除。

俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナと、基地で戦いを見ていたトゥアールと桜さくら川がわ先生は、コンソールルームのテーブルに座り、一息つく。

「何か、変なことを口走る怪人だったなあ。いつものことだが……」

桜川先生は苦笑交じりに今日の戦いの感想を口にすると、人数分のお茶と茶菓子をテーブルに並べていく。

戦いの後はメインモニターにニュースを映して速報を確認するのが習慣のようになっているが、今日の愛香は特に入念に各チャンネルのニュースをチェックしていた。

『帰り際に手を振るテイルレッドちゃんの映像です。とてつもなく可か愛わいいですね』

それらのニュースの一つでは、壮年の男性キャスターが真ま面じ目めな口調でレッドの最新情報を伝えている。

「……よかった……あたしの無駄毛がどうとかは報道されてない……」

一通り確認を終え、ほっとする愛香。

「そりゃ元々テイルブルーの容姿への侮ぶ辱じよくのような報道はされませんからね、一線は守っていますよ。この世界の報道は平和的です」

「だったら普段から人のこと悪魔とか怪物みたいに言う報道もやめなさいよ……!!」

　トゥアールのフォローに、納得がいかない様子の愛香。

「わたくしは……いつもどおりですわね……」

　とほほと肩を落とす慧理那。まあ、今日も何な故ぜか意味もなく脱衣してたからな……。

　別チャンネルのニュースでは、男女のキャスターがフュージョニックバスター２号について触れている。

『大砲を持っているレッドたん、キュートですね……。』

『発射されたビームのようなものが、途中で曲がって空に向かって飛んでいますね。建物などに被害を与えないようにしようという、テイルレッドちゃんの気遣いなのでしょう。頭を撫なで撫でしてあげたいですね』

　おお、ちゃんとそういうとこも見てるんだな。フュージョニックバスターは俺たちの意思で威力の増減や追加効果、軌道の調整がしやすい、指向性のある光線なことが強みだからな。

「わ、私なんて、すっごく、スルーされてる……。許せない……。ふ、普段、善いい沙すな闇あん子このことは、あんなに騒いでる、くせに……」

　変身解除し、いつものジャージ姿になったイースナは、自分の扱いに不満なようだ。

　椅い子すの上に体育座りし、親指の爪つめを噛かんでモニターを睨にらんでいる。

　ブラックはギリギリ、フュージョニックバスター２号の解説映像で姿が映ったぐらいか。

　とはいえ、慧え理り那なもイースナも、世間での扱いは大分改善されている。

　特にイエローの脱衣に関しては、攻撃の前準備であるということが周知され始めているように感じるのだ。今日でいえば、装そう甲こうを脱いだ直後に俺が大砲を完成させたのがわかりやすかったのだろう。

……まあ、はあはあするメカニズムは未いまだに理解されてはいないと思うが……。

そうなると……。

俺は勢いよく立ち上がると、隣に座る愛あい香かに向き直り──

「愛香」

その華きや奢しやな肩を、両手でしっかりと摑つかんだ。

「ひゃっ……な、何、そーじ⁉」

ぼーっとモニターを見ていた愛香が、ビクリと身体からだを震ふるわせる。

「やっぱり俺──このままじゃ駄目だと思うんだ。愛香のこと」

「…………」

愛香はきょとんとし、じっと俺を見つめてきたが──

「えええええええええっ……！　そ、それって───」

ツインテールを逆立たせんばかりの勢いで立ち上がった。

「最後の戦いに臨のぞむ前に、はっきりさせておくべきだと思う」

俺は愛香の肩から手を離さず、なおも真しん摯しに訴えかける。

「……！　そ、そーじもそう思ってくれてたんだ……」

愛香の頰ほおが、見る見るうちに紅潮していく。嬉うれしそうに口くち許もとを緩めながら。

やはり、愛香もそうして欲しいと思っていたんだな。

俺は意を決して、思いの丈を打ち明けた。

「テイルブルーの、最後のイメージアップ作戦をしよう‼」

「……へ？」

　淀よどみなく言えたつもりだが、何な故ぜか愛あい香かに聞き返されてしまった。なので、俺は説明を加える。

「誰だれよりも勇敢に戦ってきたテイルブルーが……愛香が世間から誤解を受けたままじゃ、駄目なんだ。だから俺たちで今一度、テイルブルーの良さを世間に伝えていきたい!!」

「□□□□□□」

　愛香は目から光を失い、じっと俺を見てきた。

　何だ、愛香のツインテールがさまざまな感情をほとばしらせているように感じる……!?

「…………」

　真顔のまま、無言を貫き微動だにしなかったトゥアールだが……やがて身体からだを小さく震ふるわせ始め、

「ぶふぉっ」

　ついには咳せき込むように噴き出してしまった。

「何がおかしい貴様ああああああああああああああああああああ!!」

「頑張って真顔キープしてたのにひどあああああああああああああ!!」

　愛香は対面に座るトゥアールの席まで一足飛びで詰めると、蹴けりでトゥアールにラリアットをかます。

　しかしトゥアールはめげずに立ち上がり、開き直ったかのようににやけ顔になると、愛香の頬ほおを指でつつき始めた。

「うぷぷっ……ねえねえねえねえ愛香さん、何を想像してたんですか？　何を期待してたんですか？　原稿用紙七〇枚から一五〇枚くらいに物語調にまとめて説明してくださ～い」

「一行で十分よ」

「応募規定違反ッッ!!」

　意味不明な叫びを上げながら、天井へブッ飛んでいくトゥアール。

「まあ、とうとうトゥアールさんが全部埋まりましたわ!!」

　両手をそっと合わせ、たおやかな微ほほ笑えみを浮かべる慧え理り那な。

　そんな微笑ましく見守っていいものだろうか、女子高生が超合金製の天井に頭から垂直に突っ込んで、足首も見えなくなるほど埋まるのを。

「とにかく、このままじゃテイルブルーのことを誤解されたまま戦いが終わってしまうかもしれない。せめてイエローとかブラックぐらい穏やかな反応をされるようになってほしいんだ」

　天井のトゥアールにも聞こえるよう、気持ち声を大きくして、俺はそう提案する。

「喜んで協力しますわ！　ツインテイルズ全員揃そろって、世界中の皆様に愛されるヒーローになりたいですものね!!」

「ひ、貧乳さんがおとなしくすれば、すぐに解決すると、思うけど……」

　慧え理り那なとイースナも、協力してくれるようだ。

　イースナは、身も蓋ふたもないことを言っているが……。

「私も、津つ辺べの頑張りはもっと評価されるべきだと思うぞ」

　桜さくら川がわ先生が、教師らしいことを言ってくれるのが頼もしい。

「うふふ大丈夫？　トゥアールちゃん」

「うぐぐすみません未み春はる将軍……」

　コンソールルームのドアが開き、女幹部コスの母さんが入ってき

た。

　そしてトゥアールが、母さんの肩を借りて歩いている。

　…………あれ？

　俺は天井の穴と、トゥアールを交互に何度も見る。

　トゥアールのあのボロボロ具合だと、天井に突っ込んだまでは確かなはずだが……。

「そ、総そう二じ様……絶対無理です……今まで何回同じようなことをしようとして失敗してきたと思ってるんですか……私たちがお膳立てを整えても、すぐ手が出てしまうんですから……」

　息も絶え絶えに俺に訴えてくるトゥアール。

「よくわかんないけど、テイルブルーの印象を良くしたいんでしょ？　それなら、テイルレッドが頑張って呼びかけるのが一番じゃない？」

　人差し指を立てて陽気に提案する母さん。

　横にいる、ヌーの大移動に巻き込まれたかのような惨状のトゥアールとは対照的だ。

「そうだな……今まではテイルレッドがブルーをフォローしようとする度たびに曲解されて悪化したりしたから控えてたところもあるけど……これからは本気だ。本気でブルーの真実を世界に訴える」

「フ、フラグ……」

　イースナがぼそりと不吉なことを言うが、俺は気にしない。

「……作戦なんて意気込まなくていいってば。なるようになるって感じでさ、あたしは大丈夫だから」

　心中複雑そうな笑みを浮かべる愛あい香か。あまり乗り気ではなさそうだ。

　確かに、ちょっと大々的に宣言しすぎたか。愛香の重荷になってもいけないしな。

　とにかく、決戦の前に一つでも多くこういう心残りは解消しておきたい。

　あまり気負わず、それでも次の戦いからは、ブルーが一般人からどう見られているかを意識していこう。

　　　◇

『みんな、聞いてくれ！　ブルーはとても偉いんだ！　ツインテールがすごいし……それに、ツインテールがさらさらだ！　あと……ツインテールがめちゃくちゃ左右均等だし、ツイ』

『きゃ————レッドちゃん可か愛わいい～!!』

　エレメリアンとの戦闘の後で、ギャラリーに向かい演説をぶつ俺……テイルレッド。

　その演説が終わる前にレッドに殺到し、もみくちゃにする女性たち。

　地下基地のモニターでそんなニュース映像を見ていた俺は、がっくりと頭を垂れた。

　愛あい香か、トゥアールと慧え理り那な、この後さらに夜番組の仕事があるらしくアイドル衣装のままのイースナが思い思いの表情でその映像を見ていた。

「俺なりに語ご彙いを振り絞ってブルーの良さを訴えたつもりだったんだが……伝わってないみたいだな……」

　俺は自分の演説下手が悔くやしくなり、思わず拳こぶしを強く握ってしまう。

「あたしにはツインテールしか聞こえなかったんだけど、気のせいよね」

　愛香は何な故ぜか白目でモニターを見ているが、やはり俺のことを不ふ甲が斐いなく思っているのだろうか。あんなに勇み込んで宣言しておいて……くっ、すまない、愛香。

「まあブルーのイメージ改善の方は気長に待つけどさ。それより問題は、ここんとこのエレメリアンの数の異常さよ」

　愛香は苛いら立だたしげに指で机を叩たたく。

「毎日毎日現れやがって……どこが『基地で待つ』だ、あいつら!!」

　俺も愛香と同じ懸念を持っていた。ライオギルディが最期に仲間に向けて『俺に続け』と言った影響だろうか、この数日、毎日エレメリアンが出現しているのだ。

「エレメリアンもいよいよ、後がなくなってきたのだと感じますわね……」

　慧理那は、テンション高く俺に迫ってくるエレメリアンのニュース映像を見ながら、不安そうにこぼす。

　いや、毎日現れるだけならば、まだいい。

　昨日きのうなど、一度目の戦闘が終わった直後に、海外にもう一体エレメリアンが現れた。

　基地へ戻ろうとしていた俺たちは、血相を変えて二番目の現場に向かったのだ。

　この頻ひん度ど、次々現れる再生エレメリアンたちと連日戦っていた時を思い出すぜ。

「今後は、出撃ローテーションを細かくして対応しましょう。出現するのが一般兵なら、一度に一人の出撃でも十分なくらいです。特に総そう二じ様は、他の皆さんを心配して必ず出撃しようとなさりますからね」

　トゥアールがそう提案し、愛香も釘くぎを刺すように俺を見てくる。

「そうよ。さすがにそろそろあたしたちを信用してくれてもいいで

しょ、そーじ」

「もちろん、みんなの強さは信用してるんだけど……」

　今の俺は、ブルーのイメージを回復をさせたいという目標がある。できる限り、ブルーの戦闘にはついて行きたいんだが……。

「そうなるとやはり、こちらも頭数が必要じゃな。どうじゃろうトゥアール、ここはお前もテイルホワイトとして出撃してみては」

　言葉少なだったイースナが、親指で弾はじいた人差し指をトゥアールに向ける。

「だーかーらーテイルホワイトは何度も変身できないんですって！　あんな雑ざ魚こキャラども相手に、おいそれと変身できますか!!」

「テイルホワイトは世間でどんな反応をされるか、気になるじゃろう!?　わらわなんて初しよっ端ぱなでレッドのストーカーかつ筋肉おっさんを召喚する邪悪な魔道士扱いされて、そっからずーっとそのイメージのまんまじゃぞ!!」

　確かに、テイルホワイトだけが、未いまだに人前で戦闘をしていない。アナザーブルーは、目撃自体はされているが認知度は低いはずだ。

　イースナも別にホワイトが自分と同じように最初は散々な評価になって欲しいと望んでいるわけではないだろうが、あのかっこいい戦士が初見でどんな反応をされるのか、気になるのだろう。

「それに、わらわもトゥアールと一緒に戦いたいぞ！　いつもいつも貧乳ばーっかりひいきして、ずるいのじゃ……」

「くっ……あなたも甘え顔が上じよう手ずになりやがりましたね……！　別に愛あい香かさんなんて一切ひいきしてませんけど……!!」

「わたくしもですわ！　トゥアールさんともっと一緒に戦いたいですわ!!」

「慧え理り那なさんはいつもどおり甘え上手ですね、つい身体からだを許しそうになります……!!」

　イースナ、トゥアール、慧理那が微ほほ笑えましいやり取りをしている中、ニュース番組は次の報道に移っていた。

『さて、次は不思議なツインテールの映像です』

　俺は慌あわてず騒がず、淀よどみない所作でモニターに向き直る。

『海外で、ツインテールの地上絵が発見されたと話題を呼んでいます』

　キャスターが説明すると、映像が岩に囲まれた広大な荒れ地に切り替わる。

　そこには、人間の頭とツインテールを模した絵が大きく描かれていた。

　しかも、一面砂と岩しかないので縮尺が伝わりづらいが、とんでもないサイズだ。

　ニュースでは、直径数百メートルを超え、航空写真でなければ全ぜん貌ぼうを把は握あくできないとまで言っている。

「ツインテールの地上絵か。粋なものも現れるもんだな」

　俺は赤あか錆さび色の地平に大きく描かれたツインテールを見て、深々と頷うなずいてしまう。

「どこかの物好きが描いたんじゃろうか、このサイズなら普通の人間にはとんでもない労力じゃろうに」

「ですが、とてもよく描けていますわ！　上空からヘリコプターなどで指示をもらいながら作業を進めたのでしょうか？」



イースナや慧え理り那なが、地上絵完成への労力を讃たたえる。

「人為的なものじゃなかったりして。そーじのツインテール好きのせいで超常現象が起こり始めてるんじゃないの」

普段はむしろ超常現象否定派の愛あい香かだが、俺をからかうためか、今回はそんなふうに言う。

「……ツインテールの地上絵、ですか……」

トゥアールは映像を見ながら、何やら思案顔になっていた。

この時俺たちは、知しる由よしもなかったのだ。

それは、大いなる異変の序章に過ぎなかったということを。

◇

アルティメギル基地の居住区の廊下に、足音が響く。

スワンギルディは、基地の隅々を丹念に瞳ひとみに焼き付けるかのように、ゆっくりと歩みを進めている。

そんな彼の前に、スパロウギルディが現れた。

廊下の真ん中で仁王立ちしている彼は、スワンギルディの歩みを阻はばむかのようだった。

「──修行を終えたのか、スワンギルディ」

「終えたかと問われれば、まだまだ足りないと答えねばなりません。しかし今手にできる、最高の力を持ちえたと自負しております」

自分の修行に終わりはない。生涯高みを目指し続けたい。

しかし、今の立場がそれを許さない。

　スワンギルディは隊長──指導者であり、求道者ではいられないのだから。

「……決闘たたかうのか、ツインテイルズと」

　前置きも短く、スパロウギルディは躊躇ためらいがちにそう聞いた。

　黙りこくるスワンギルディに、スパロウギルディは畳たたみかけるように提案する。

「終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの皆様は、我われ々われに好きにしろと仰おつしやられた。それはつまり……基地を残していずこかへと逃げてもよいということなのではないのか」

　なおも沈黙を続けるスワンギルディ。

「無論、我々は断じてここを離れん。しかし、部隊に所属しながら幾度となく異世界を超えて来たお前だけならば、またぞろどこかに旅立っても今さら文句は言われまい……！」

　スワンギルディはツインテイルズとの最初の敗戦から独自行動を取り始め、それは幹部や首領たちに見み逃のがされるところとなった。

　アポロギルディも言っていたではないか。首領は自分の楽しみとなることを探していると。ひたぶるに己を高め続けることが目的ならば、部隊を抜けても裏切りとはみなされないのだ。

　しかしスワンギルディは、静かに首を振った。

「この戦場を生き延び、真なる戦いに臨のぞめ──それが、ホロウエレメリアンたちとの決戦の際にドラグギルディ様が私に託してくれた、最期の言葉です」

　そして、晴れやかな表情で語り始める。

「ツインテイルズとの戦いこそ、私の真なる戦い。それから逃げれば、私は自分も、敬愛するドラグギルディ様をも裏切ってしまうことになるのです。だから私は──己が信念のために戦います」

　ドラグギルディの名を出され、スパロウギルディの肩が震ふるえ

だす。

　見える。スワンギルディの隣に……ドラグギルディと、エロゲーの画面が映りしパソコンのモニターが確かに見える。

『一つだけ、頬ほおを赤らめた少女のサムネイル……このセーブデータは怪しいのう』

『お許しを！　どうかお許しをー!!』

『どうやら幼馴染おさななじみの部屋に遊びに来て、空気が変わったことですかさずセーブをしたのであろうな。これから二人で睦むつ事ごとを始めるのではないかと。だが、何事もなく終わり、次の日の日付ロゴが表示され、落胆──』

『ぐわあああああああああああああああああ』

　頭を抱かかえて崩れ落ちるスワンギルディの幻。

　霧む散さんした幻影の先に、今のスワンギルディが雄お々おしく立っている。

「フッ……ハハハハハハハ……!!」

　感極まり嗚咽おえつが漏もれそうになるのを隠すためか、声を上げて笑うスパロウギルディ。

「スパロウギルディ殿……？」

「いや、何……この基地で、ドラグギルディ様とお前が揃そろって話しておられた時のことをな……。年を取ったわ、同じことばかり思い出していかん」

　それでもなお抑えられぬ嗚咽が、スパロウギルディの全身を震ふるわせる。

「自分のパソコンのエロゲーを見られて失神していた小僧っ子が……こんなにも逞たくましく成長して……!!」

　スパロウギルディはその枯れ木のような細腕で、スワンギルディの傷痕だらけの腕をしっかりと抱き摑つかんだ。

「今のお前ならば、肌色ばかりのサムネイルを見られても、真顔でいられるであろう」

「ええ、むしろ微笑を以もつて遇することでしょう」

　若人のこれほどの晴れやかな顔を見せられて、どうして年寄りが行く手を阻はばめようか。

　スパロウギルディが手を離すと、スワンギルディは生き真ま面じ目めに腰を折り、頭を下げた。

「スパロウギルディ殿、お世話になりました。ご恩は決して忘れません」

「いいや、この年寄りが今日まで無事でいられたのは、若きお前の闘志に励まされてのこと……礼を言うのは私だ!!」

「それでは━御達者で!!」

　必ず帰る、などという言葉を残すことなく、スワンギルディは踵きびすを返す。

　スパロウギルディは去りゆくその背中を、いつまでも見続けていた。

　自分は元々弱く、年ばかりを重ねた半端者だった。武人肌のドラグギルディを隊長に据すえた部隊に、厄介払いのように放り込まれた。

　ドラグギルディが瑣さ事じに関わらなくて済むよう、ただひたすら実務をこなしているうち、参謀職が板についた。

　老参謀と言われて久しく、もはやまともな戦闘経験など時の彼方かなたに忘れ去ってしまった。

　今のスパロウギルディはただ、目まぐるしい戦局の流る転てんに身を任せることしかできない。

「……もし、お前を破ってツインテイルズが基地に来た、その時は

―」

　それでも、若き戦士の旅立ちを見送るうちに……老参謀の目は、往年の闘志を取り戻し始めていた。

「この私も戦士に戻る。だからお前は悔いなく戦え、スワンギルディ」

　静寂の支配する廊下に、か弱く、しかし確かに頼もしい一声が響いた。

キャラクター名鑑 044



DATA

身長：198㎝
体重：249㎏
属性力：結婚属性（ブライド）+？

終の零星の一体。女性型でありながら好戦的で、全身に攻撃発射パーツを備えている。首領を除けば、火力は全エレメリアンで最強。非常に独占欲が強く、標的と定めた者は敵であれ一人占めしたがる傾向にある。ポセイドンギルディ本人以外にはバレバレだが、彼のことが好き。しかし彼の多愛属性と対極の属性を持つため、どれほど想っていても本能的に拒んでしまう、悲しき運命を背負った戦士。

第三章　ツインテールの命令。

　津つ辺べ家のリビングで、ソファーに座った愛あい香かと恋れん香かが和なごやかに話をしていた。

「へえ、総そうくんが進路のことを……うふふ、まだ高校一年なのにちゃんとしてるのね」

　艶つややかなロングヘアーに抜群のスタイルを誇る恋香が、朗ほがらかな笑みを浮かべる。

「やっぱりまだ早いわよね……。まあ進路っていっても、ツインテールのことしか考えてなかったけどね、そーじ」

　その時の総そう二じの顔を思い出し、嬉うれしそうにソファーのクッションを抱き締める愛香。

　恋香はそれを見ながら、薄笑みを浮かべて目を細めた。

「あ、そういえば、最近ナース好きとかで病院に来たりするようなエレメリアンが世界のどこかをうろちょろしてるらしいから、お姉ちゃんも十分気をつけてね」

　愛香はさりげなく恋香に注意を促うながす。

　スワンギルディが次にいつやって来るにしろ、現れるのは病院関係の場所だろう。そうなると、恋香もその標的になる可能性がないとは言い切れない。

　何せ恋香は、過去に一度エレメリアンに狙ねらわれている。

　ツインテイルズになる前の慧え理り那なが最たる例だが、一度エレメリアンに目をつけられた人間がもう一度別のエレメリアンに狙われることは、決して少なくはないのだ。

　しかし、話題の振り方がいささか唐突過ぎたようだ。

「あら、そんなことテレビで報道してたっけ？」

　人差し指を顎あごに当て、不思議そうに首を傾かしげる恋香。

「あっ……ええと、ツインテイルズの情報に詳しい友達がい

て……」

　動揺しつつも、なんとか誤ご魔ま化かす愛香。

　幸い、恋香はそれ以上追及してはこなかった。

「愛香、最近総くんとはどう？　順調に進展してる？」

「うーん、まあ、そこそこ……」

　しかし、むしろこういう質問の方が困る。歯切れが悪くなってしまう愛香。

　総二にはバレンタインの本命チョコを渡せたが、その前にチョコの怪物・チョコレリアンと化した自分の姿を見られているので、そっちの印象が強く残っているかもしれないのが辛つらい。

「でも、大丈夫？　姉さん今朝も総くん家の喫茶店に行ったけど、神しん堂どうさんだけじゃなくて、そのメイドさんも総くんにべったりしているように見えたわよ。お嬢様にメイドさん、ちょっと暗いけど可か愛わいい眼鏡めがねの女の子、何よりあの、素敵な銀髪のトゥアールさん。どんどんライバル増えてるんじゃない？」

「うう……」

　あらためて言われると、ライバルたちは強力だ。

　特に最近は、今までは総そう二じを甘やかす存在だった尊みことが、少しずつ総二に甘えるようになってきた気がする。距離感が自然になってきているのだ。

　何よりトゥアールは━総二の方からキスをしてもらったし。

「ねえ愛あい香か、もっと積極的になってみてもいいんじゃない？」

「なろうとは、してるんだけど……失敗ばっかりで」

「例えば、ツインテールで目隠しして、総くんにキスしちゃうとか。総くんにとってみたらすごくロマンチックだと思うなあ」

　やはり、姉はさすがだ。自分や、自分の友人なら、積極的になれ

と言われてもこんな少女漫画なワンシーンなど思い描けもしないだろう。

「頑張って愛香。ライバルがいなかったら、あなたたちのペースで歩いて行けばいいと思うけど……そうもいかないでしょ？　早く総くんと恋人にならなきゃ。ね？」

「うん……」

　神妙に頷うなずく愛香を見て、恋れん香かが小さく吹き出した。

「なーんて。偉そうにアドバイスできる立場じゃないんだけれどね。お姉ちゃん、四月にはもう二十歳……。はあ、このまま男性経験もなく二十歳になるのかしら、くすん」

「だっ……！」

　生々しいことを言われ、愛香は言葉に詰まる。

「お姉ちゃんまだ、男の人とつき合ったことないのよ？　愛香と総くんが結ばれてから……って、決めてるから。自じ業ごう自じ得とくだけど」

　恋香は自分のきめ細やかなロングヘアーを両手で掬すくうと、指で輪を作って即席のツインテールにして見せた。

「だから愛香がいつまでもぼんやりしてると、また姉さんもツインテールにして、総くんを巡るライバルになっちゃおっかな～」

「わ、わかった……」

　恋香はこうして定期的に愛香をからかう。

　発破をかけているのもあるだろうが……一度だけ小さな姉妹喧げん嘩かをしたとき、恋香は……総二のことが好きだが、愛香のことも大切だから総二を諦あきらめる──と言った。

　姉の気持ちを無駄にしないためにも、総二との仲を進展させなければ。

「進路のこととか考え始めてるなら、知的な一面を見せたりすると、グッとくるかも。もちろん総くん相手だから、ツインテールを

大切にね」

「ありがと、お姉ちゃん。そうだね、うかうかしてらんないよね……」

　キスにまで持っていけるかはともかく……少女漫画な作戦、上等ではないか。

　知的な一面を見せるのも、なるほど、と思う。

　とにかく、何でも試してみるべきだ。

　拳こぶしを握り締め、愛あい香かはうん、と頷うなずいた。

　いじらしい妹を見つめながら、恋れん香かは薄く微ほほ笑えむのだった。

◇

「何だよ幸薄いのが好きな属性って……」

　地下基地に帰って来た俺は、コンソールルームに入るやぼやかずにはいられなかった。

「お疲れ、そーじ」

　中では愛香、トゥアールに慧え理り那な、イースナにメガ・ネ、桜さくら川がわ先生が待っていた。

　この数日はトゥアールの立てた作戦どおりにローテーション出撃で戦闘をこなしており、今日は俺の当番だった。

　そうして相対したのが、今日の敵だ。不幸な感じの子が好きだとか言っていた。

　人の趣味嗜し好こうにとやかく言うつもりはないが、他人の不幸を喜ぶというのはあまり好きじゃないな。そのくせ、結構強いやつ

だったし。

　愛香やイースナは雑ざ魚こという括くくりにしているようだが……残存軍は弱いから今まで出撃せずに残っていたわけじゃなく、色々な部隊の幹部の影響を受けているだけあって、全体的に強さが底上げされている感じがする。

「ですが総そう二じ様！　このトゥアールちゃんのように幸薄い子を救いたいという思いだと捉えれば、それはむしろ正義感に近い感情ではないでしょうか。そう、総二様のように」

「！　なるほど……幸薄い子を好きってのは、救いたいっていう心でもあるのか……」

　トゥアールの分析を聞き、俺は考えを改める。

　俺はツインテール以外の属性について、多角的に捉えることをついおろそかにしがちだ。だから、仲間たちの意見でその属性の本質を知ることが少なくない。

　属性の本質を知る、か。

　俺は以前進路の話題になった時、ツインテールの研究をしたいと思った。

　それは今も変わらないが……その研究にもう少し、別の要素を加えてみるのはどうだろう。

　まだ、漠然としか思い描けないけどな。

「しかし、単独での出撃が続くと、ブルーのイメージを回復するのは難しいな……」

　俺は椅い子すにもたれて深く息をついた。

「だから、そんな気にしなくていいってば。あたしは大丈夫だから」

「……あの、貧乳さん、今日はなんで伊だ達て眼鏡めがね、かけてるんですか……」

　イースナに指摘されて初めて気づいた。愛あい香かが、何な故ぜか眼鏡をかけている。

　眼鏡好きのイースナの声には、嬉うれしさが交じっている。

「期末試験が終わっても勉強に励まれているとは、さすが津つ辺べさんですわ！」

　慧え理り那なの言うとおり、愛香は机にノートやプリントを広げている。

　俺はというと期末試験の記憶を、ツインテールの彼方かなたへ忘れ去った。次、頑張ろう……。

「イメチェンよ。今日は、知的な愛香ちゃんで行こうと思って」

「んんぬぁ━━━にが愛香ちゃんですかあざといですね！　総そう二じ様、一人称で名前にちゃん付けする女なんてこの世でもっとも信用できない生き物の一つです、注意してください!!」

　それだと「私を信用しないでください」と言っていることにならないか、トゥアール……。

「いいからちょっとあんたの白衣貸しなさいよ、どーせ死ぬほどいっぱいスペア持ってるんでしょ？」

「あなたの死ぬほど小ちっぱいに合うサイズのスペアなんてただの一着も持ってませんよ!!」

「じゃあちょっとそれ脱いでよ」

「正気ですかこの人!?」

　愛香はどうしてか、トゥアールから白衣を借りようとしている。

　知的な感じでいこうと意気込んでいるからか、確かに愛香のツインテールも今日はどこか知的さを漂わせている。

「あのイースナさん、もしスペアの眼鏡があれば貸していただけませんか？」

　そんな愛香に感化されてか、慧理那も行動を起こす。

「うん、ちょっと待って……メガ・ネ」

「はいはい、この辺にあるでー」

　メガ・ネのお腹なかの異次元ボックスを開き、手を突っ込むイースナ。この辺といってもあのボックスの中は亜空間なので相当アバウトに言っているのだろうが、イースナは普通に目的のものを探し当てていた。

　慧理那はイースナから眼鏡を受け取ってかけると、自信たっぷりな笑みを浮かべる。

「ち、知的な慧理那ちゃん！　………………ですわ……ふぇぇ……」

　途中で恥ずかしくなったのか、手で頰ほおを押さえる慧理那。

「クッソ可か愛わいいですねえ慧理那さんは――――――――っ‼」

「ク、クソ可愛い……」

　異世界義姉妹が左右から慧理那に抱きつく。

「お嬢様……普段から知性溢あふれるお姿でいらっしゃいますが、今日は一段と……！」

　桜さくら川がわ先生も、友達に合わせておどけられるようになった慧理那を嬉しそうに見ている。

「ごめんなさい、この間観み束つか君も眼鏡めがねをかけていましたし……わたくしも、皆さんと同じことがしたくて」

　トゥアールとイースナにもみくちゃにされながら、慧え理り那なは真意を語る。

「……わたくし、皆さんともっと遊んでおきたいのです。もう旅行に行ったりする時間はありませんが、せめて、今のこの時間を大切にしたいのですわ」

　愛あい香かが慧理那からトゥアールを引っぺがした。

「会長がいいこと言ってんのにあんたはいつまでくっついてんの

よ!!」

「チャントキイテ――ル!!」

　言い訳と投げ飛ばされた悲鳴を併あわせ奏かなでながら、トゥアールが壁に突っ込む。

　心残りのないように、ということか。

　俺がテイルブルーの印象を良くしたいと思ったように、決戦が近づいた今、みんなもそれぞれやっておきたいことがあるのだろう。

　慧理那は、友達との時間を大切にしたい。

　彼女らしい願いだ。そしてそれは、俺たち全員の願いでもある。

「…………慧理那……」

　慧理那の言葉に感じ入ってか、どことなくイースナも消沈してしまっているな。

　トゥアールはそんなイースナの様子を敏感に感じ取ったようで、努めて明るい声を出した。

「最近、基地突入のこととか連日の戦いとか、そんなことばかりでよくありませんね！　ちょっとレクリエーションにでも興じて、気分転換しましょうか!!」

「何よあんた、機会を窺うかがってたみたいな唐突さで」

　愛香の突っ込みも聞かず、トゥアールは白衣のポケットから何やら取り出した。

　円筒に、何本かの棒のようなものが入っている。棒は、上端が少し覗のぞいて見えるぐらいだ。

「みんなで、ツインテール様ゲームをしましょう!!」

「ツインテール様ゲーム……!?」

　俺はその未知のワードに、知的好奇心を激しく刺激された。今日は知的な総そう二じくんでいきたくなってしまう。

「ルールはこうです！　まずこの場の人数分、七本のスティックを用意しました。そしてこのスティックは、先端に一から六の番号が書かれたもの、ツインテールのマークが描かれものとに分かれています」

　トゥアールは七本のスティックが説明どおりに数字かマークが描かれていることを俺たちに確認させると、それを円筒のケースの中に入れ直した。

　ケースに入ったスティックはほとんど隠れてしまっているので、覗いてみてもどれがどの印かは判別できない。

　ちなみにスティックの上の方はツインテール型に象かたどられている。

「そしてこのくじを全員で引いて、全員で『ツインテール様誰だれだ』とコール。見事ツインテール様を引き当てた人は、番号を選んでちょっとした指示を出し、指名された人はそれに従うという、健全で健康的なパーティーゲームです!!」

　説明を終えたトゥアールが人差し指を立ててウインクすると、それに連動するかのように愛あい香かが顔を顰しかめた。

「はぁ!?　それって王様ゲ……」

「あぁ――――いかさん!!」

　トゥアールは愛香の言葉を遮さえぎって肩を組み、コンソールルームの端はしの方へと連れて行く。

『王様ゲームなら難色を示すかもしれませんが、総そう二じ様はツインテールの挑戦には決して背を向けないお方です……いいですか、これはツインテール様ゲーム……愛香さんもいい思いをできる可能性のある、ツインテール様ゲームです。ＯＫ？』

『ルールが王様ゲームなら普通は男の子が得するやつでしょ!?』

『王様ゲーム程度で総二様がエッチな気分になるなら私は今も処女やってません！　これは私たちが総二様に合法的にエッチなことをするシステムなんですよ、ＯＫ!?』

『ＯＫだから引っ付くんじゃないわよ、乳が鬱うつ陶とうしいわ

ね……!!』

　そして、忙せわしなく俺の方を見ながら、小声で愛香と何やら話していた。

「ごめんそーじ、あたしの勘違いだった。ツインテール様ゲームね、よくあるよくある」

　振り返った愛香は、頬ほおをひくつかせながらこちらへと戻ってきた。

「…………闇やみ取引……」

　トゥアールを見て、ぼそりと呟つぶやくイースナ。

「何か言いましたかテイルブラック！　たとえ黒かろうと闇だろうと、揺るぎなき信念さえあればそれは正義なのです!!」

「何だかわかりませんがかっこいいですわ!!」

　慧え理り那なの言うとおり、何だかわからないがトゥアールが自信たっぷりに言うとかっこよく聞こえる。類義語を「勢いで誤ご魔ま化かす」、というかもしれないが。

「最初に注意しておきますが、このツインテール様ゲーム用スティック、その名も『そうじ棒』のセキュリティは完かん璧ぺきです。目印をつけられることを防ぐため、ダイヤモンドを上回る硬度であることは当然として、僅わずかな皮脂や汗に至るまで瞬時に分解。引き抜くまでは絶対にどれがどれかはわかりません！　皆様フェアにいきましょう」

　トゥアールは当てつけるかのように、愛香だけを見ながらそう説明した。おそらく、愛香が力尽くで目印にキズを刻むことなどを警戒しているかもしれない。

　いくら愛香でもそんなこ──

「ちっ」

　あれ、いま愛香舌打ちしなかったか。あれ……。

　っていうか、そうじ棒ってなんだ。いつもなら発明品には「トゥ

アール○○」のような名付け方をするのに、どうして今回に限って俺の名前を冠したんだろう……。

　愛あい香かと慧え理り那なはひとまず伊だ達て眼鏡めがねを外して知的スタイルを解除し、パーティーモードでゲームに臨のぞむ。イースナがちょい残念そうにしてるな。

　トゥアールがリモコンを操作すると、テーブルが床下に収納されていく。

　七人が適度な大きさの円を作れるぐらいの絨じゆう毯たんとクッションが敷かれ、俺たちはそこに座った。

　トゥアールが持つケースから全員思い思いにスティックを引き抜いていき、最後にトゥアールも残った一本を取る。いったん自分以外に見えないようにスティックに描かれた印を確認し、全員で向き合う。

「ツインテール様だーれだ」

　全員の声がきれいに重なり、ゲームが開始される。

　フフ……心の輝きまで含めれば、みんなツインテール様じゃないか。

　ゲームのこととはいえ、俺は思わず吹き出しそうになった。

「けど……様付けってのもなんかくすぐったいな……。やっぱ俺のツインテールは、呼び捨てが合ってる気がするぜ──」

「ほら変なゲーム始めた影響でそーじが明後日あさつての方を向いて変なこと言いだしたじゃない!!」

「つ、通常営業、です……」

　愛香やイースナに何やら言われている気がするが……俺は思考の最中だった。

「いやっほぉおおおおおおうツインテール様はトゥアールちゃーん!!」

　トゥアールがガッツポーズとともにスティックを掲げた。気のせいか、めっちゃ胸を揺らしている。

　スティックの下端には、確かにツインテールの印が描かれていた。

　いきなりツインテールを引き当てるとはさすがだな、トゥアール。

　俺も負けてはいられないぜ……！

「さて、ツインテール様であるところの私の命令相手ですが。ここはやはり……二番ですね」

　トゥアールはスティックを指で摘つまんでぷらぷらと揺らしながら、しきりに俺の方へ視線を送ってくる。

「この中で最強のツインテール属性を持つのは総そう二じ様です……つまり総二様は、数字の二を引き寄せる運命力が最も高いはず！　お名前の中にもありますし！　ならば二を選ぶのが一番総二様を指名できる確率が高くなるというわけです!!」

　色々分析しているみたいだけど、何な故ぜ俺をピンポイントで指名しようとする……!?

「二番がツインテール様のおっぱいを一分間揉も────む!!」

　テンション高く命令を口にするトゥアールだが、愛あい香かがすぐ様詰め寄っていた。

「馬ば鹿かなのあんた!?　最初は微ほほ笑えましい命令から始めて、少しずつ警戒心解いていくのが王様ゲームの必勝法でしょうが!!」

「エスカレートさせる気満々なんじゃないですかこの歩く性欲さんは！　いいからあなたは指を咥くわえてツインテール様のおっぱいがふにゃんぷよんぽにょんしているところを存分に拝はい謁えつなさい!!」

　トゥアールはもはや俺が二番だと確信しているらしく、こっちを見てにやけ顔を浮かべる。

「ふ、ふへへへへ、それじゃあ総そう二じ様……もとい二番の人、だーれですか！　総二様でしょうけど!!」

　すっ、と手が挙がる。

「うちや」

　名乗り上げたのは━━メガ・ネだった。

　膝ひざから崩れ落ち、金魚のように口をぱくぱくさせるトゥアール。

「あ、あはははは……メガ・ネさん、私の胸触っても楽しくないですよね？　ここはキャンセルということで━━」

「……だめ、ツインテール様の命令は、絶対……」

　イースナに釘くぎを刺され、トゥアールはがっくりと項うな垂だれる。メガ・ネはトゥアールへとがしょんがしょんと足音を立てて近づいていった。

「…………えと、じゃあ揉もむで、トゥアールはん」

　メガ・ネが申し訳なさそうに両手を突き出し、トゥアールもそれを了承した。

「はい……」

「やっぱりトゥアールはん、大きいなぁ……」

　メガ・ネがトゥアールの胸を触っている。何だろう、この光景。何だろう。

「私は何でこんな微笑ましくおっぱい揉まれてるんですかあ……」

「……イースナちゃんも、いつかこんなふうにばいんばいーんになるんかなあ……」

　しかしメガ・ネは、いつかイースナもこんなふうに成長すればいいなあというおかんの願いを滲にじませながら、手を動かしていた。

「く、くすぐった……あの、力加減が絶妙なんですけど……」

　ふにゃんぷよんぽにょんという擬音が聞こえてきそうなほど、トゥアールの胸が形を変えていく。

「トゥ、トゥアールさん……メガ・ネのテクで、反応……」

　イースナが言い終わる前に、ちょうど一分が経過。

「やめて────他の人の手でピクってなっちゃってるトゥアールちゃんを総二様に見せないで───っ!!」

　その瞬間、トゥアールは両手で顔を隠して床をゴロゴロと転がり始めた。

「トゥアールはリタイアしたみたいだから、六人で続きしよっか」

　愛あい香かが提案した刹せつ那な、トゥアールは凛り々りしい表情で円筒の中に戻されたスティックへと手を添えていた。

　俺たちもそれぞれスティックを摑つかみ、思い思いに引き抜く。

「ツインテール様だーれだ」

「あっ、わたくしですわ！」

　次のツインテール様は慧え理り那なか……負けてられないぜ！

「よーし、次こそは俺もツインテール様になるぞ！」

「何かそーじ、ツインテール様になることだけが目的になってない!?　あれ大丈夫!?」

「ゲームへの警戒心が無いのはいいことです。愛香さん、総そう二じ様のズボンを脱がすまでは共闘しませんか!?」

「あたしはそんなことしないわよ！　あんたもいい加減、健全にゲームを楽しみなさいよ!!」

「ペッ……自分の性欲に不誠実なままで最終決戦を迎えられると思っているんですか」

「なに名言っぽくアホなこと言ってんのよ!!」

　唾だ棄きしたトゥアールに摑みかかる愛香。

　それを微ほほ笑えましく見ながら、慧理那は指示を出した。

「命令は……ツインテイルズのメンバーの必殺技を、十二個言う！　ですわ！」

　なるほどー、そういう指示もありなわけか。無茶振りというわけでもないがそれなりに難しくもあるあたり、慧理那らしい絶妙な塩梅だ。

「お嬢様、私だったら、必殺技の名前を覚えていないのですが……」

「アナザーテイルブルーの必殺技名はわたくしと一緒に考えましたでしょう？　『ストライキングウェイブ』ですわ」

「そうでしたか？　すみません、武器を振り回していれば思い出すと思うのですが……」

「え、慧理那……番号も、言わなくちゃ」

　イースナに指摘され、慧理那は恥ずかしそうに肩を竦すくめる。

「あっ、忘れていましたわ……では、五番の方！」

「俺だ」

　じゃれ合っていた愛香とトゥアールが動きをピタリと止め、揃そろって俺の方を見てくる。

　何な故ぜか二人とも、鳩はとが豆鉄砲を食らったような顔をしていた。

　とりあえず俺は指示通り、必殺技を思い浮かべる。

「えーと、エグゼキュートウェイブ、ヴォルティックジャッジメント、カオシックインフィニット、ダークネスバニッシャー、エクストリームウェイブ、コズミックジャッジメント、セラフィックインフィニット、インフィニットバニッシャー……」

　そこまで言って指で数を確認し、

「シンフォニックスマッシュにスペリオルエクスプロード、トライ

アードビロウズ……あと…………バーニングフォースフィニッシュ」

　残り四つも一気に言い終えた。

　最後の技名は……テイルフェニックスのものだ。

「すごいですわ観み束つか君、テイルレッドの技名を使わずにクリアしてしまいましたわ!!」

　唯ゆ乃のの必殺技名を口にしたことで、あいつの安否を考えそうになってしまったが……慧え理り那なの喜びの声で我われに返る。

「俺も技名とか武器名とか覚えるの、結構得意だからさ」

　やっぱこれ、母さんの血だろうか。

「そうよ」

「□□□□□□!?」

　母さんの声が聞こえたような気がして、俺は壁を天井をと忙せわしなく見渡す。

　コンソールルームのどこにも母さんの姿はないし、他の誰だれも声を聞いた様子がない。一体何だったんだ、ちょいちょい神しん出しゆつ鬼き没ぼつなんだよな、母さん……。

　そもそも、仮にどこかにいたとしても、今のは心の中で考えただけなのだが……。

「どうして総そう二じ様の無駄遣いを……！　ここで総二様のズボンを脱衣パージさせてしまえば後が楽になったというのに……！　慧理那さんは脱衣の先駆者じゃないですか!!」

「いーえ会長はいい仕事したわ！　これでそーじは完全にツインテイルズノリになって警戒心薄れたもの……次の命令は警戒しなくなると思う……！」

「……トゥ、トゥアールさんは、ゲラゲラで済む感じ、ですけど……貧乳さんの方は、いちいちガチっぽくて、引きます……」

俺が母さんを捜しているうちに、トゥアールと愛あい香かは小声で言い合っている。そしてイースナがそれを見てちょっと呆あきれているようだった。

さっきから、俺の与あずかり知しらぬところで裏の意思が動いていないか……？

そして三巡目。次のツインテール様は──

「フッ、私か」

桜さくら川がわ先生だ。今のところ、一人ずつ順々にツインテール様だな。いいことだ。

「では、三番がツインテール様の名前を呼び捨てで呼ぶ」

「何ですかそれ、総二様への差し込みですか？」

「誰でも面白いだろう。お嬢様だといつも通りだがな」

俺たちは、あらためて自分の番号を確認する。

「三番……あ、俺だ」

これで二連続だ。もしかすると俺は、ツインテール様に……つまりツインテールに選ばれる運の方が強いのかもしれないな。

「そりゃそうか。俺はツインテールに導かれて、ここまで来たんだから──」

「ねえトゥアール、このゲーム本当に大丈夫なの!?　総そう二じが変なこと言いながら虚空見つめる率高くなってない!?」

「ま、まあレクリエーションですから、総二様が楽しければそれが一番です……それがエロに変わった時の私たちの興奮はすごそうですね」

さて。俺は、ツインテール様の命令を実行しなくてはならないのだが──

「みこ……いや、さすがに桜さくら川がわ先生ぐらい年上の人を呼び捨てにするのは……」

俺は思わず言い淀よどんだ。やっぱりちょっと抵抗がある。

「観み束つか。いいから呼べ。ツインテール様の命令だ」

「畏かしこまりました」

ツインテール様の命令とあらば、厳おごそかに傅かしずいてしまうのが俺だ。

意を決して、桜川先生と向き合う。

俺は覚悟を決めるため、わざと大きな咳せき払いを一つ。そして——

「………………尊みこと」

初めて、桜川先生の名前を呼び捨てにした。

桜川先生は最初、照れくさそうに明後日あさつての方を向いていたが、

「……な、なんかいいな。はは、何だろう、すごく嬉うれしい……おい、もう一度だ」

俺も今度は、照れを入れずに真しん摯しに言おうと努める。

「尊」

すると桜川先生は、潤うるんだ瞳ひとみで俺を見つめてきた。

「はい、あなた」

そして、そんなふうに俺を呼び返してくる。

これはなんか、すごく新鮮な感じだな……。

「何な故ぜそんなおいしい思いをしてるんですかこの年とし増まおああああああああああああ!!」

「うおっ、血涙を流して突っ込んでくるな!!」

さすがは桜川先生、獣けもののような鋭い跳躍で飛びかかってきたトゥアールを、合気術の要領で投げ飛ばす。愛あい香かがそれを

キャッチし、さらに勢いを乗せて壁に飛ばしていた。

「よーし、これでもう結婚したな、観束。女性を呼び捨てにしたんだからもう婚こん姻いん届とどけにサインをしなければならないぞ、法律でそう決まっている」

　桜川先生が渾こん身しんの一枚を俺に突きつけてきた。

「女の子呼び捨てにしただけで結婚なら、そーじはあたしたち全員と結婚してることになるじゃないですか!!」

　が、その婚姻届は愛香にインターセプトされた。

「あ、あたしと、結婚……してる……」

　奪い取った婚こん姻いん届とどけを、じっと見つめる愛あい香か。

「ツインテール様だーれだ」

　愛香が婚姻届とお見合いしている間に、次のゲームが始まってしまっていた。

「ちょっと、あたしまだ取ってないってば!!」

「ちゃんとあたしまだそうじ棒を握っていないと言いなさい、そうすればこのターンにも参加させてあげますよぼへ!!」

　トゥアールを麻マー雀ジヤンの点棒のようにその辺の机に投げつけると、愛香は残っている最後の一本を手に取った。

　全員がスティックを確認する。メガ・ネが嬉うれしさと困惑を併あわせた声で名乗り出た。

「あ、うちや。ええんかなあ、うちがツインテール様で……」

「ええんだぞ、メガ・ネ」

　遠えん慮りよがちに俯うつむくメガ・ネに、俺ははっきりと肯定する。

「じゃあ、一番が四番をぎゅーっとする～」

　メガ・ネがほのぼのとした口調で言うと、愛香とトゥアールがおおっと声を上げる。

「攻めるわね、メガ・ネ……」

「マジですか、ツインテール様の立場なのに他の人にいい思いを譲るなんて、女神ですかこの人!?」

「女神じゃなくて、メガ・ネ……」

　イースナは突っ込みつつ、にへらっと笑いながら自分のスティックを掲げた。

「わ、私、一番……」

「……。あたしが四番だったわ……」

　愛香もスティックを皆に示す。

　イースナと愛香は向き合い、互いにバツが悪そうな顔になった。

「わ～、イースナちゃんやなあ、よかったわぁ」

「いつもイースナさんのことを考えているメガ・ネさんだから、自然とイースナさんの番号を当ててしまうのですわね！」

　愛香とイースナの二人はぎこちない笑みを浮かべ、恐る恐るといった感じでどちらからともなく抱き締め合った。

　まるで各国の代表同士が、様々な思惑を腹に抱かかえながらもとりあえず笑顔でハグをするかのような光景だった。

「普段できないことをする、ツインテール様ゲームの醍だい醐ご味みですわ！」

　慧え理り那なは嬉しそうに二人を見守っているが、トゥアールは無言だった。

「どうしたトゥアール、何か不機嫌そうな顔をして」

「冗談でもそういうこと言うのやめていただけますか!?」

　桜さくら川がわ先生に指摘され、トゥアールは必死に否定する。

　二人のハグが終わり、次のターンへ。今度のツインテール様は、イースナだった。

「二番の人が、服を一枚……だと少ないか……十枚、脱ぐ……」

「デカいな――――――――ジャンプアップの幅!!」

　俺は思わず突っ込んでしまった。命令を途中で軌道修正するという高等テクニックを使い、イースナが無茶振りをしてくる。

「ほう、イースナにしてはなかなか使える命令を出すじゃないですか。いやー仕方ないですね、私も恥ずかしくはあるのですが、ツインテール様の命令は絶対ですから」

「ちょっと待ちなさいよ、あんた番号……三じゃない!!」

　トゥアールの言動を怪しんだ愛あい香かが、スティックを奪い取る。そこに書かれていたのは、確かに三番だった。

「いいじゃないですか漢字の三から棒を一本抜けば二ですよ!!」

　超理論で迎え撃つトゥアール。惜しむらくは、棒を一本抜く根拠が微み塵じんも無い。

「ええと、二番の方はどなたでしょう？」

「うちや」

　慧え理り那なが聞くと、またもメガ・ネが申し訳なさそうに手を挙げた。

「ごめんなあイースナちゃん、うち、脱ぐ服がないわ……」

　せっかくのイースナの命令を遂行できず、メガ・ネは落ち込んでいる。

「困った時はお互い様ですわメガ・ネさん。幸いわたくしは服を着ていますので、わたくしが代わりに脱ぎますわ」

「優しいな、慧理那………………ん？」

　慧理那の慈愛に心打たれていた俺だが、何かが引っかかった。

「じゃ、じゃあ慧理那、メガ・ネと代わってくれたから、三枚で、いいよ……」

「……三枚でいいんですの？」

　慧理那は何な故ぜか物足りなさげにそう言うと、ブレザーと靴下二枚までを脱いだ。

「ご立派です、お嬢様」

　誇らしげに慧理那を讃たたえる桜川先生。

「…………ありがと、慧理那」

　イースナはお礼を言いつつも、少し寂しげな表情を浮かべていた。何故だろうか。

「ツインテール様あたし!!」

　そして次のターンでは、愛香もツインテール様へ。このばらけ具合……いよいよ、全員でツインテール様を巡ってしのぎを削っていると見えるぜ。

「えーとね、一番背の高い番号の人が、ツインテール様をお姫様抱っこする!!」

「ちゃんと番号で言いなさい！　ルール違反ですよ!!」

「いーえあんたが最初に説明したルールには則のつとってるわ、番号自体は指名してんだから!!」

　トゥアールの物言いをものともせず、愛あい香かは俺の方を見てきた。

「ふふっ、この場で一番背が高い人というと──」

「うちや」

　メガ・ネがおずおずと手を挙げる。

「…………………………………そうだった……」

　愛香は低いトーンでそれを認めると、メガ・ネにお姫様抱っこを

された。

　パワフルだぜ、メガ・ネ。

　それを見るイースナは、どこか複雑そうな表情だ。イースナ、さっきから何を寂しそうにしているんだろう。気になるな。

　ゲームでメガ・ネが活躍していて、むしろ嬉うれしいはずなのに……。

　そして次のターンも、ツインテール様はメガ・ネだった。

「六番が、誰だれにも真ま似ねできない特技を見せる～」

「はい、わたくしですわね……。一人で手て錠じようを嵌はめることができますわ！」

　宣言するや、慧え理り那なはアイマスク、鎖のついた首輪をつけ、後ろ手に手錠を嵌めた上に足首までロープで縛り、床に寝転がった。

　いつもは犬じみた慧え理り那なが、陸に打ち上げられた魚のように、ピチピチと跳ねている。



　まさに特殊技能、特技。なんだ、この恐ろしすぎる重装備フルアーマーは。なぜこれを、慧理那一人で、しかも一瞬でできるんだ!?

「やりますね慧理那さん。私に当たれば、コンマ秒で全裸になる特技を見せていました……」

　ピチピチと跳ねる慧理那を尻しり目めに、次のツインテール様はトゥアール。

「五番がツインテール様に、今持っている大切な物を差し出す！　ふへへもし総そう二じ様なら」

「五番、私です……。とりあえず、総二さんのぱんつ、あげます……」

　イースナはジャージのポケットから俺のトランクスを出し、トゥアールに手渡した。

　めちゃくちゃ当たり前のように取り出すよな……。

　イースナはパンツ同士の交換をコミュニケーションと捉えており、未いまだにいつの間にか俺の机の上にイースナのパンツが置かれて困惑している。

「ちっ……またイースナですか……まあ、これはもらっておきます！」

　そして俺のトランクスは、トゥアールの白衣のポケットへ。俺の下着は、いつまで望まぬトラベルを続けるのだろうか……。

　イースナ、慧理那、桜さくら川がわ先生、愛あい香かと、ツインテール様が変遷していく。

　桜川先生が顔を真まっ赤かにしながらトゥアールの物真ま似ねをしたり、愛香が凄すさまじいキレの尻文字でツインテールと宙に書いたり。慧理那が未だにピチピチと跳ねていたり。

　笑いと悲鳴が絶えない空間で、イースナは俯うつむく時間が増えていった。

　そうしてゲームは進んでいき、ツインテール様でもその指名でも、メガ・ネがかなりのヘビーローテーションになっていた。

「…………おかしいですって……二時間経過ですよ、全然エッチなことになりません……エロビデオ見てて二時間経ってもエロいことが起きなかったら、見てる人ブチ切れますよ……」

「どういう例えよ……」

　憔しょう悴すいしきった表情のトゥアールに、憔悴しきった表情の愛香が何やら突っ込んでいる。

　この二人だけやたら疲れ果てて見えるんだけど、それだけこのゲームにのめり込んでいるんだろうか。

「じゃあ、そろそろ最後にするか？」

　愛香とトゥアールの疲れた様子を見て、俺はみんなにそう切り出した。

「てかやばいな。こんだけやって、俺一度もツインテール様になれてないぞ……」

　そりゃ女の子に比べればツインテール様とはいえないのかもしれないけど、俺も一度くらい、なあ……。

　俺たちは全員でスティックを引き抜いた。

　そして、コールをしようとした瞬間。

「──まだ、続けたい」

　それに先んじて、小さく、か細い声が聞こえた。どこか不安そうに震ふるえた声が。

「ほら総そう二じ様、イースナもこう言っていま…………イースナ……？」

　トゥアールも、途中で気づいたようだ。

　イースナが、肩を震わせていることに。

「……ずっと、続けたい」

　皆の視線がイースナに集中する。

「…………基地に、乗り込まなきゃ、駄目、ですか……」

　そしてイースナも、俺たちを一人一人、訴えるようにして見返してきた。

「ずっとみんなで、この世界で……現れるエレメリアンを、倒してるだけじゃ、駄目ですか」

　やがてその頰ほおを、一筋の涙が伝う。

「私は、このままがいい……。変わりたくない……」

　その言葉を聞いて、俺はようやく合が点てんがいった。

　……そういうことか。

　ターンが進むごとに、イースナが寂しそうにしていた理由は。

「進路が、ある……将来が、ある……。戦いが、終わったら……ツインテイルズが、なくなったら……私たち、離ればなれになる、かもしれない……」

　決戦を迎える前の余興。戦いを一時忘れるためのレクリエーション。

　そう銘打たれて始まったツインテール様ゲームは、しかし、終わりを迎えることで最後の戦いが近いことを否応なしに連想させてしまう。

　決してそうではない。まだこういうことをする機会はあるかもしれないが……イースナはそう思ってしまったんだ。

　彼女は前々から、戦いが終わった後どうなるかということを、度たび々たび俺たちに吐と露ろしてきた。そういう不安が、誰だれよりも強かったから。

　何より今日は、愛あい香かや慧え理り那なが眼鏡めがねをかけ、そしてすぐに外すという流れがあったことも影響しているだろう。

眼鏡のかけ外しは、イースナにとって出会いと別れの象徴なのだ。

「イースナさん。わたくしたちはいつまでも仲間ですわ。安心してください」

「……安心、でき、ない……。そんな保証、どこにもない……」

　親友の慧理那が諭さとしても、イースナの不安は消えない。

　別れへの不安。それは、誰もが経験することだ。

　そして、受け容いれなければならないことだ。

　けれど故郷を失い、ようやく家族を手に入れることができたイースナにとって、別れは必然のものとして享受できるものではない。

　トゥアールも、その気持ちは痛いほどわかるのだろう。イースナの肩に、そっと手を乗せて言った。

「私だって寂しいですよ。ツインテイルズの戦いが一段落すれば、愛あい香かさんの狂暴性も沈静化することでしょう。そうすれば、私が殴なぐられることもそうそうなくなります。煩わずらわしいと思っていましたが、いざ終わるとなると、ちょっぴり寂しくもある。けれどねイースナ、それが……生きるということなんです」

「いやあんたが変なことしたら引き続き殴るわよ」

「えっ」

　真顔で絶句するトゥアールを余よ所そに、イースナは涙をこぼし続ける。

　桜さくら川がわ先生は無言でイースナを見つめ、メガ・ネはかける言葉を探すように俯うつむいている。

　俺はふと、手にしたスティックの先に目を落とした。

　その印を見て、はっとする。

「そういえば、最後のターンはまだだったよな」

　俺は手にしたスティックを、みんなに見えるようにかざした。

「──ツインテール様は、俺だ」

　最後の最後で、俺がツインテール様を勝ち取った。それもなんか、らしいと思える。

　だから俺は、最初で最後のツインテール様としての命令を伝えることにした。

「一番──」

「待って、総そう二じさん……言わないで……」

「と、二番と三番と四番と五番と六番が──」

　イースナの制止に先んじて、俺はその先の言葉を紡つむぐ。

「ツインテール様と、ずっと一緒にいる」

　俺がそう言うと、その場の全員がはっと息を呑のんだ。

　この命令なら──イースナの願いを叶かなえられるはずだ。

　気取ったことを口にしている自覚はある。

　けどこの仲間たちには、どんなに照れくさいことでも本心を伝えられる。イースナの願いを叶えることは即ち、俺の、そしてこの場のみんなの願いでもあるのだから。

「保証がないってんなら、命令でそれを作ろう。ツインテール様の命令は、絶対だ」

　それこそ、言葉遊びかもしれない。

　レクリエーションに何ほどの強制力があるわけでもない。

　でも、こういう保証があったって、いいじゃないか。

「総二さん～っ……」

イースナが俺に抱きついてくる。俺は彼女の頭を、そっと撫なでた。

「ルール違反じゃない……」

当然だが、愛あい香かに呆あきれられてしまった。けど俺にだって、反論ぐらいはできる。

「番号一つしか選んじゃいけないってルールは、聞いてなかったぜ」

「そういえば、そうでしたね。私の説明ミスじゃあ仕方ありません」

トゥアールがからっとした笑顔でジャッジを下した。ゲームキットの提供者である彼女が言うのだから、間違いないだろう。

「むしろ、命令の無駄遣いをしたな。私は何も言われなくても、ずっとお前と一緒にいる。お前は子供だから、結婚という制度の重みを想像することがまだ難しいのかもしれないがな」

桜さくら川がわ先生が、腕組みをしながら何度も頷うなずく。どこか、俺を讃たたえるかのような声こわ音ねだった。

「ありがとうなあ総そう二じ君。イースナちゃん、こんな感じでいっつも寂しがり屋さんやけど……末永く、よろしくな」

「そりゃ、命令した側がそれを守れなきゃ、立場がないもんな」

ぺこりと頭を下げてくるメガ・ネに、俺ははっきりとそう返す。

「ってか、こういうこと無自覚で言うから恐ろしいのよ、こいつ……」

愛香が、苦笑しながら俺を見てくる。

そして──ツインテールを揺らし、何かを決心したように頷いていた。

ちょっとした遊びをしていても、様々な思いが交こう錯さくす

る。

　大きな戦いの前は、いつだってそうだった。それも、今回で最後になるのだろうか。

　アルティメギルのやつらは……今いま頃ごろ、どんな時間を過ごしているんだろうな……。

◇

　何なん人ぴとの来訪も拒こばむ、神秘の空間。

　マルチバース・キューブと呼ばれる、多次元宇宙を凝縮した底無しの迷宮。

　魔界にも喩たとえられるその場所の最奥に存在する──アルティメギル首領の間。

　そこへ、終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーの隊長・アポロギルディが、首領への定期報告へとやって来る。

　宣戦布告後のツインテイルズの動向を伝えるためだ。

「うっわ何これ……」

　しかし、辺りを見渡したアポロギルディは、幼女のような外見らしからぬ低い声で動揺を露あらわにした。

　これまでは宇宙空間を地上に下ろしたかのような、神秘的な星々の光に包まれていた空間が……さらなる渾こん沌とんに彩いろどられていたのだ。

　ところどころに剝むき出しで屹きつ立りつしている水晶。

　血管のようなおどろおどろしい模様が、床を這はいずり回っている。

　骸骨でもそこいらに置いて雰囲気を出したかったのかもしれないが、実際は巨大な四足動物の骨がその辺に転がっているため、博物

館のような雰囲気を醸かもし出していた。

　あえて大きさも並べ方も歪いびつにしたような十字架が、やたらと並んでいるのもきつい。

　おどろおどろしいダンジョンにしようとしたものの、気負いすぎて破は綻たんしてしまったデザインの典型例のような装飾だ。

　中央の玉ぎょく座ざとそれを取り巻く聖布ヴエールだけが、破滅的センスの侵食を免まぬがれていた。

「フッ……さすがよなアポロギルディ、この場に溢あふれる妖気を感じ取ったか」

「いやもうこれ、妖あやしい通り越して面白いよ……妖気じゃなくて陽気だよもう」

　全身から幼よう気きを発散させる小さな戦士が、忌き憚たんなき上申を炸さく裂れつさせる。

「首領様、もしかしてツインテイルズが来るからデコっちゃったの……？　まだ来ないみたいだよ？　っていうか、絶対デコる前の方がいいよ……」

「余は招待せよと伝え、そしてあ奴やつらはそれを受じゅ諾だくした。今はそれで十分だ。いつやって来るかは拘こう泥でいするに能あたわぬ」

　じゃあ何でこんな張り切ってデコった、と言いたいところだが、さすがは首領親衛隊、終のフオー・ヴア零星リス・ジヨーカーの隊長。アポロギルディは組織最強クラスのスルー力を全開し、首領に用件を伝えた。

「えーとね、今は基地に残ったコたちが続々と出撃してるよ～」

「好きにさせるがよい。テイルレッドを育てただけで、かの部隊の者たちは皆殊勲に値する」

「それと、スワンギルディがツインテイルズと決闘したいんだってさ。別にいいよね？」

「それも構わぬ。お前たちが目をかけた戦士ならばあるいは、それ

なりに善戦を見せるやもしれぬしな」

　アポロギルディは、首領の声が喜色に満ちていることを感じ取っていた。

　いつ以来だろうか。

　あまりにも強すぎるがゆえに感受性がどんどん薄れていき、些さ細さいな出来事を無理に楽しもうとしているようにさえしていたこの巨凶が──本心から、日々を楽しみに待っているのは。

「ところで。ツインテイルズたちが揃そろいでまとっている装そう甲こう……名を聞いたことはあるか？」

　ツインテイルズ……テイルレッドと一対一での真剣勝負を経たアポロギルディを見込んだのか、首領は気さくにそんなことを尋ねた。

「テイルギアっていうらしいよ。基地の資料でもそう記録されてたし、間違いないかな」

「フッ……なるほど、不死鳥もそのように言っていたやもしれぬ。心の力転じて空想のテイルと、ツインテールをかけてテイルギア、と……。よき名だ」

「ソッコーで看かん破ぱしちゃうんだ名付けの由来……つか、どーしてそんなこと聞くの？」

　アポロギルディが不思議がって質問すると、聖布ヴエールの奥のシルエットが不気味に揺らめく。

「何。部屋の飾り付けだけでは画が竜りよう点てん睛せいを欠く。やはり宴は、主催者もそれなりに身み支じ度たくを調えなくてはな──」

「いや絶対片付けたほういいよ、ここ」

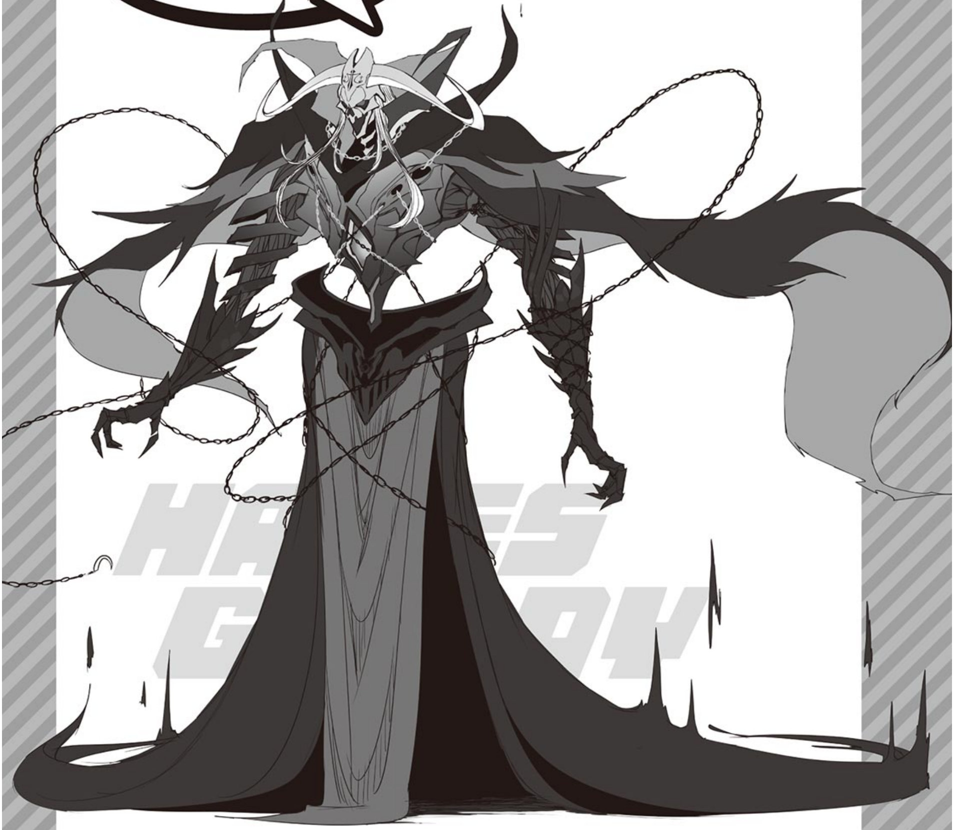
　この神域において。決戦という名の宴が、もうすぐ開催を迎える。

攻めるか、静観するか。

駆け引きの間に、主催者だけが着々と準備を整えていた。

キャラクター名鑑 045

ハデスギルディ



DATA

身長：295㎝

体重：271㎏

属性力：擬人化属性（パーソニフィ）+？

終の零星の一体。一見穏やかな紳士だが、相当な変態。擬人化を極めており、無機物を生命体のように相手に幻視させるほどの強大な妄想力を誇る。アルティメギルの中でも随一の幻術や幻覚攻撃の使い手。対峙した相手がどれほどの変態か「変態値」として数値化するのが癖。これまで出逢った中でもテイルレッドの変態値は突出して高く、それは彼の中で、ある疑惑を深めていく一因となった。

第四章

もう一つの宿命。

　連日のエレメリアン出現という負担増。さらに今日は午後の授業中に現れてしまったため、総そう二じたちの代わりに尊みことが出撃していた。

　アナザーブルーが相対するエレメリアンは、シュビルギルディ。

　靴じみた大きな顔と嘴くちばしを誇る戦士。ハシビロコウを思わせるエレメリアンだった。

　アナザーブルーは、シュビルギルディの属性を聞いて嫌そうな顔を浮かべる。

「なにい、熟女の属性だと!?　ならば貴様、アラサーの私のことが魅力的に見える厄介な敵ではないか……!!」

　思わず身構えるアナザーブルーに対し、シュビルギルディは気色ばむ。

「アラサーだから魅力的、だと!?　自惚うぬぼれるな、小娘！　俺がこの世でもっともイラっとするのは、高校生の娘と同じような容姿の母親を見て『熟女っていいな』などと知ったふうな口を利く輩やからだ!!」

「何？　どういうことだ」

「だから、貴様は我わが属性の眼鏡めがねに適かなうには若すぎると言っているのだ!!」

「ふ、ふうーん……そうか。若いか」

　アナザーブルーは明後日あさつての方を向き、所在なく自分のツインテールを指で擦こすっている。そして、小さく口角が上がる。

「何を嬉うれしそうにしている、それはそれとして貴様はアラサーであることは変わらないぞ!!」

　シュビルギルディは、余計なことを口走ってしまった。

「…………」

アナザーブルーは無言でフォースリヴォンに触れ、超重武器ウェイブメイスを手にする。

「おや、何をしているアラサー」

「これが完全解放ブレイクレリーズ、というらしい」

「え、あ、そうか」

不思議そうに見守るシュビルギルディに、自分が今変形させている武器のことを説明するアナザーブルー。

ウェイブメイスが完全解放ブレイクレリーズし、アナザーブルーの全身から水色の属性力エレメーラが立ち昇る。

「で、オーラピラー、というのが出るらしくてな」

「ほう、そうか……あれっ!?」

説明を受けるがまま耳を傾けていたシュビルギルディだが、オーラピラーを飛ばされ、水色の円柱型の結界に拘束バインドされる。

アナザーブルーは天高く跳躍。波の剛ごう棍こんウェイブメイスを、シュビルギルディの脳天に振り下ろした。

「ストライキングウェイブ――!!」

「ぐぅあああああああああああああああああいちいち説明に聞き入ってしまったばかりに!!」

ツインテール様ゲームの時の慧え理り那なとの約束通り、必殺技名を思い出したアナザーブルーは、剛ごう槌つい一いつ閃せん。

見事、勝利を収めるのだった。

◇

「お疲れ様でした、桜さくら川がわ先生」

放課後、ツインテール部の部室で、俺は桜川先生の勝利を労ねぎらっていた。

「何。ちょうど私の担当する授業がない時間だったし、お嬢様には他のメイドをお付けしたからな。それにあのぐらいの強さのエレメリアンなら、私でも倒せるさ」

それにしても、熟女……年輩の女性好きのエレメリアンとは。

確かロエルとリルナのお父さんがそうだったんだよな。属性力エレメーラの一斉奪取にあった時、熟女が熟女がと嘆いていたのを強烈に覚えている。

「フッ……さすがは尊みこと。素晴らしい活躍だったようですわね」

一方、高校生の娘と同じような容姿の母親である理事長は、手放しで桜川先生の戦いを賞賛する。たまたま部室にやってきたので、アナザーブルーの戦闘映像を見てもらったのだ。

「というか、私のことは尊と呼んでくれと言っているじゃないか、〝あなた〟」

桜川先生に拗すねるような目で見られ、俺はドキッとする。

理事長もそれを見て、うんうんと頷うなずいていた。

「ええい、尊さんはいつまでツインテール様ゲーム気分でいるんですか！　あなた呼びも、呼び捨ても終わりです!!」

トゥアールが抗議し、愛あい香かも何な故ぜか桜川先生へと牽けん制せいするような視線を送る。

いま部室にいるのは、この五人だ。イースナとメガ・ネが仕事で来ていないのはそう珍しくもないが、今日は慧理那も生徒会の仕事が山積みでこっちには顔を出せないらしい。

「卒業式が間近だからな。生徒会長であるお嬢様は、その準備などで仕事がかなり立て込んでおられる。だからトゥアール……日々の出撃ローテーション、もう少し私を増やせ」

「アナザーブルーの戦闘回数も節約しておきたいのは山々です

が……慧理那さんに負担をかけるわけにはいきませんからね。わかりました」

　トゥアールは桜川先生の要望を受理した。アナザーブルーも変身回数に限りがある可能性があるとはいえ、テイルホワイトほどのタイトさはないはず。

　何より、桜さくら川がわ先生は正式メンバーとなった今も以前のように「代打」での戦闘を望んでいる。誰だれかが戦えない時の出撃は、一番それに適かなった状況なのだ。

「あたしのローテももっと増やしてもいいからね、トゥアール」

「愛あい香かさんはむしろもう少し休むべきです、総そう二じ様の次に多く戦っているんですよ」

　俺は自分の出撃を一番多くすることを譲らなかったが、愛香もそれに負けじとかなりの頻ひん度どで戦っているからな。トゥアールが心配するのもわかる。

「婿むこ殿」

　ツインテイルズの戦闘について傍はたで聞いていてもよくわからないだろうが、桜川先生が慧え理り那なのことを気遣っているのは察したのだろう。

　理事長は、その楚そ々そとしたツインテールを揺らめかせながら、俺へと向き直った。

「慧理那と尊みことのことをよろしくお願いしますわ。今、あなた方がとても重要な局面を迎えていることは、慧理那の様子を見ていればわかりますが……それゆえに、あの子が不安にしているのもわかるのです」

「……やっぱり不安そうにしてますか、慧理那は」

　思いがけないところから慧理那の心情を知ってしまい、俺は複雑な気持ちになった。

「ええ。ツインテールが戸惑っていますわ。もっとも、さすがは慧理那。ツインテールの機微を見抜く婿殿に心配をかけまいと、必死に自分を律しているのもわかります」

　理事長が扇子で口くち許もとを隠しながら、俺を見つめる。

　理事長は慧理那のツインテールから、そこまで細やかな感情を察していたのか……。俺は、まだまだ未熟だ。

　俺ももっと、みんなのツインテールを見つめなければ──。

「そこで提案なのですが今晩また慧理那と尊を婿殿のお宅にお泊めいただけないでしょうかええそういう意味と思っていただいて結構ですわ無論わたくしが指南いたしますので」

「年とし増まが無理して句読点のない長台詞ぜりふを捲まくし立てるんじゃありません！　そんないやらしお泊まりは、このトゥアールちゃんが許しませんよ!!」

　トゥアールが食ってかかるが、理事長は優雅な微ほほ笑えみで鮮やかに躱かわす。

「おほほほほほこの程度の言葉に息継ぎが必要とはトゥアールさんこそ若さが足りないのではなくておほほほほほほほほほほほほほほほほほほほほほ？」

　何がそこまでクリティカルヒットしたのか、トゥアールは白目で膝ひざから崩れ落ちる。

　しかし……さすがは理事長。長台詞に高笑いを繫つなげても、息継ぎを必要としないとは。

　俺は、その秘訣が何なのかを黙想する。

「そうか……ツインテールで呼吸いきをすれば、途切れることなく喋しやべり続けることができるんじゃないか!?」

「いやいやいや、なに人体の構造超えたことしようとしてんのよそーじは!?　理事長も、娘の宿泊っていうか、自分も宿泊する気満々じゃないですか！　駄目ですからね!!」

　さすがは愛あい香か、俺、理事長にと連続で、ワンツーのパンチを放つ正確さで突っ込む。

「そこに気づかれるとは、さすがはわたくしがもっとも警か……もとい認めるツインテールの津つ辺べさん。確かにわたくしも泊まり

ますわ、ええ」

　愛香には句読点ありの台詞せりふで応おうじる理事長。え、泊まるんすか……!?

「奥様……どうかご心配をなさらず。私は必ずお嬢様をお守りいたします」

　桜さくら川がわ先生が恐縮しながら伝えると、理事長は柔和な微ほほ笑えみを浮かべる。

「……尊みこと、そう気負ってはいけませんよ。慧え理り那なとともに、婿むこ殿を頼りなさい。この方はツインテールであり、櫛くし……あなたたちのツインテールをしっかりと梳すいてくださいますわ。そうして憂うれいがなくなれば、あなたたちのツインテールも十全に輝くことでしょう」

　そして理事長は、慈愛に溢あふれた助言を伝えた。

　俺は自らもツインテールであり、他のみんなのツインテールを梳く櫛でもある。

　この至し言げんを心に刻み、戦いを乗り越えていこう──。

◇

「……お兄ちゃん。最近ロエルたち以外に、妹作ってないよね」

　久しぶりにロエルたち姉妹姫と夢通信が繫つながったかと思えば、開口一番ロエルが俺を詰問してきた。

　この夢空間に三人でこうして座って語り合うのも、ずいぶんと当たり前のようになってきたな。

「いや、家族は増えてないけど……」

　俺が否定しても、ロエルは納得がいかないらしく、俺の顔をじっと見つめてくる。

「でも、年下の女の子に甘えられ慣れてきてる感じがするんだもん。そういう子が周りにいるんでしょー!!」

「ああ、イースナのことかな。ほら、前に説明した俺たちの仲間」

　年下の子と言われて、すぐに思い至った。最近イースナは不安からかよく俺に甘えてくるから、きっとそのことを言っているのだろう。

　でも、そういうのって傍はたから見てわかるものなのか……!?

「お兄ちゃんの妹は、ロエルとリルナちゃんだけなんだから。他の女の子を甘やかした分は、ロエルたちをもっといい子いい子してくれなきゃ駄目なんだからねっ」

　ロエルが拗すねているのは、弟や妹ができて周囲にあまり構ってもらえなくなった子供のような感じなのかな。

「ボ、ボクはこんな奴やつの妹になった覚えはないけどね。それに、王家の掟おきてでボクたちが仕方がなくこいつと結婚したら、妹じゃなくて妻になっちゃうし」

　不機嫌そうに黙っていた妹のリルナは、俺の妹になると聞いてすぐに反論してきた。

「んもーリルナちゃんはすぐお兄ちゃんと結婚したがるんだから。今は妹の立場を楽しむ時期なのに～」

「結婚したがってないよう!!」

　ぶんぶんと腕を振り回すリルナ。その腕が、一瞬透けてしまって見えた。

　ロエルも咄とっ嗟さに自分の手の平を見つめる。

　そしてその手の平を、俺に向けてかざしてきた。手の平から、ロエルの顔が透けて見える。

「ああもう、やっぱり通信が不安定だよう。今日は、すぐに途切れちゃうかも……」

　ロエルは不安そうに、俺の左腕に抱きついてきた。

それを見たリルナは、姉と競うかのように俺の右腕にしがみつく。

「……もしかしたら、原因は──」

俺は夢通信が不安定な理由を推察する。

以前、姉妹から夢通信が不安定になってきていると聞かされた時、俺はアルティメギルの首領に原因があるのではないかと考えていた。ソーラも、首領の力が全異世界に影響を及ぼし始めているということを仄ほのめかしていたからだ。

首領が俺たちに挑戦状を叩たたきつけてきた今、その影響はさらに強まっていると考えられる。

完全に夢通信が切れてしまう前に、俺は姉妹へと今の俺たちの世界について説明することにした。

最強部隊の挑戦を受け、首領と戦うべくアルティメギル基地へ乗り込むということを。

当然、姉妹の驚きは相当なものだった。

「ええっ！　お兄ちゃん、アルティメギルの一番強いやつと戦うの!?」

「……ボクたちはたった一部隊にさえ手も足も出なかったのに……相変わらずキミはスケールが違うな……」

「だから、俺たちの戦いももうすぐ終わると思うんだ。そうすればトゥアールの戦艦で、またロエルたちの世界に遊びに行けるようになると思う」

そう提案することで、姉妹が華やいだ笑顔になるのを想像していた俺は、逆に悲しげに俯うつむくリルナを見て戸惑ってしまった。

「……あのさ。もし、その首領ってのを……たとえ、総そう二じが倒したとしてもだよ。総二の世界は……」

「リ～ルナちゃんっ」

ロエルが俺の腕を離れ、リルナへと抱きつく。まるで、リルナの

言葉を遮さえぎるかのように。

「そ、そうだね。やったじゃないか総二、キミの世界もこれで平和になるんだ!!」

　無理に笑顔を作っているようなのが気になるが、リルナは俺にそう言った。

「それよりリルナちゃん、いい機会だからお兄ちゃんにあれをお知らせしようよ!!」

「あっ……そうだね！」

　姉妹二人は互いを見やって頷うなずき合うと、

「実はボクたち、すごいことができるようになったんだ」

「えへへ～、二人でずうっと練習していたんだよっ」

「総そう二じの世界が平和になったら、総二に見せてあげるよ。きっと驚くぞ～」

　リルナはさっきとは違い、本心から笑っているようだ。それを見て俺も安心する。

　こんなふうに嬉うれしそうに焦じらしてくるなら、「それはどんなことだ？」なんて聞くのは野暮ってもんだよな。

「楽しみにしてるよ！」

　俺は二人の頭を撫なでながら、戦いへの決意を新たにする。

　二人の練習の成果を見るにはまず、決戦を乗り越えなくちゃな。

「じゃあお兄ちゃん、ロエルたちにちゅーして！」

　ロエルが唐突にそんなことを言ってきたので、俺は思わずたじろいでしまう。

「またちゅー!?」

　つい、トゥアールにキスをした時のことを思い出したのだ。

「…………………………また？」

　ロエルの声が凍度を増し、異様に低くなる。俺がぞっとして振り向くと、

「えへへっ……なぁに？　お兄ちゃん」

　満面の笑みで見つめ返してきた。気のせいか……。

「いやでも、どうして突然……」

　俺が座った姿勢のまま後あと退ずさると、ロエルはそれ以上に距離を詰め、俺に顔を近づけてきた。あと、地味にリルナもめっちゃ顔を近づけてきている。

「お兄ちゃん、遅れてるんだぁ。大きな戦いの前に男の子が女の子にキスしてあげるなんて、送り出す時の火打ち石みたいなものだよ。みーんなやってるよ！」

　みーんなやってるのか……!?

　ロエルたちの世界の独自の習慣……なんだろうけど、トゥアールも同じような理由で俺にキスをして欲しいって頼んできたしな。火打ち石を打つ側──送り出す女の子の方に男からキスをするのは、ちょっと謎なぞだが。

　しかし俺は、遅れているという言葉がことさらに響いた。

「そっか……そうなんだよな、結構悩んでるんだよ、俺、遅れてるみたいでさ……」

　周りの女の子がみんなこういう調子でキスに対してそこまで抵抗感を持っていないんだ、きっと俺が前時代的なだけなんだろう。

「お、落ち込むんじゃない！　仕方ないな……今回はボクたちの方からしてあげるよ。お手本代わりにね」

「わあ、リルナちゃんのそういう無意識に計算高いところ、超好き」

「姉様!?」

　ロエルは座ったままの俺に膝ひざ立ちで近づくと、その柔らかなサイドポニーを揺らして激励してくる。

「それじゃあお兄ちゃん、戦い、頑張ってね!!」

「キミなら首領とやらも楽勝だろうが、まあ、しっかりな」

「じゃあロエルから──」

　ロエルが顔を近づけてくる。

　しかしちょうど夢通信のタイムリミットが来てしまったようで、ロエルの顔は俺の顔を突き抜けていってしまった。

「え──────、嘘うそ、やだぁ、あと十秒でいいのに────っ！」

「いや姉様、ボクの分も入れてあと五分は必要だったよ……！」

「長いよリルナちゃん!?」

　ロエルたちの残念がる声が、夢空間に響きわたっていた──。



◇

「最近、エレメリアンめっちゃ出てくるなあ」

「何か、周期があるのかねえ。わらわら出てくるのは」

　その日の昼休み。クラスの男子たちが、エレメリアンについて話していた。

　テイルレッドのこと以外が話題になるのは、地味に珍しい。俺は愛あい香かたちと部室へ昼飯を食べに行く前に、彼らの話に耳を傾ける。

「それに、超常現象続きだしな。昨日きのうネットで話題になってたけど、ツインテールの心霊写真が次々に出てきてるらしくてさ、色んなアカウントで写真上がってるぜ」

「ツインテールの心霊写真だって!?」

　俺は思わず反応し、話題に交ざってしまう。

「お前ツインテールのことなら何でも食いついてくんのな!?」

　クラスの男子に驚かれる。だが、俺が興味を持ったとわかると詳しく説明してくれた。

「それだけじゃないぜ。ツインテール型の未確認飛行物体も目撃されてるんだってよ」

「俺はツインテールの謎火の玉ウイルオウイスプって聞いたけどな～」

　その後もネットを中心に出回っている様々なツインテール現象を、男子たちから聞いた。

　やけに、ツインテール絡みの怪奇現象が続いているな。ちょっと偶然とは思えないほどに。

「この間ツインテールの地上絵がバズったから、後追いで色々でっちあげてるっていう可能性もあるんじゃない？」

　いつの間にかトゥアールと一緒に俺の隣で話を聞いていた愛香が、そう言ってくる。

「え、津つ辺べさんツインテールの超常現象とか信じないタイプ？」

　珍しく、クラスの男子が愛香に話しかける。

「んー。ツインテール関係なく、超常現象とかはそこまで……」

　愛香は当たり障さわり無く返答する。

「そういう可能性もあるのかな……」

　俺は納得半分、腑ふに落ちないのが半分といったところだった。

　後追いで真ま似ねして目立つには、ツインテールの地上絵は大規模すぎる。あれと同じぐらいのインパクトを出すなんて、滅多なことではできないはずだ。

　何より俺は、ツインテールにロマンを求めたい。

　ツインテール超常現象が、現実のものであって欲しいのだ。

「……人為的なものなら、むしろその方がいいのですが……」

　トゥアールも何かが引っかかっているようで、思案顔になっている。

　そういえば、地上絵をニュースで見た時からトゥアールはこんな様子だったな。

「もしかして、エレメリアンがこういう超常現象を起こしてるのか？　あいつらいつも、ツインテールを奪うとか何とか言って、めっちゃツインテール好きなんだろうしな」

　クラスの男子の発言に、俺ははっとさせられる。エレメリアンはツインテールを奪う存在であり、ツインテールを創造する存在ではないのだが……普通の人は、そう考える。

　なまじ属性力エレメーラという存在についての知識がある俺では、なかなか出てこない発想だ。

「こんだけエレメリアンがしつこくちゃあ、レッドちゃんも大変だろうな」

　タブレットにテイルレッドの映像を表示し、愛いとおしげに眺める男子。

　平静を装え、平静を装うんだ、俺。

「レッドたんには頑張ってほしいけど……無理だけはしないで欲しいぜ」

「まったくだ。お前もそう思うだろ、観み束つか」

「あ、ああ」

　男子たちに話を振られ、俺は曖あい昧まいに頷うなずいた。

　みんな、いつもテイルレッドのことを応援してくれている。

　でもそれは、テイルレッドが可か愛わいいツインテールの女の子だからだ。

　その正体が、男の俺だって知ったら──。

　このクラスメイトたちだけじゃない。世界中の人々が、がっかりするだろう。

　ツインテールそのものにも失望してしまうかもしれない。

　俺はそんなことだけにはならないよう、注意に注意を重ねてここまでやってきた。

　幸いなのは、テイルレッドの正体を隠し通したまま、戦いを一段落させることができそうなことだ。

　あとはスワンギルディとの決闘と、アルティメギル基地での決戦だけだからな。

　しかし、これだけ色々と考えてくれているクラスメイトたちなら、テイルブルーのことも世間一般的な印象よりは良く捉えてくれているのではないだろうか。

「レッドもそうだけど……ブルーはどうかな。頑張ってるし、かっ

こいいよな」

　俺はさりげなく、テイルブルーのことを男子たちに聞いてみた。

「まあ……そこそこ」

　そこそこか……。無難かつ、当たり障さわりのない答えが返ってきた。

「…………」

　愛あい香かを窺うかがうと、やれやれといったふうに苦笑していた。世間のイメージ改善に、最初からあまり期待していないのだろうか。今までのことを考えれば、無理もないが。

「総そう二じ様、そろそろ部室に行きましょう！　お昼休みが終わっちゃいますよ!!」

　待っているのに飽きたのか、トゥアールが椅い子すに乗って、俺の頭に胸を乗せてきた。

　ものすごい重量感と、柔らかさを感じる。

　クラスの男子たちはそれを見て、おおおおおお……と感嘆の声を上げる。

　何事かと振り返った女子たちも、ほおおおおお……とそれに続く。

「そーじが珍しくクラスの男子と話してんのに茶々入れてんじゃないわよ――――っ!!」

「おっぱいを頭に乗せることが罪になるのは愛あい香か王国だけですおあああああああああああ!!」

　トゥアールの腰を両手で摑つかみ、思いっきりブン投げる愛香。

　ちょうど開いていたドアを抜けて、トゥアールは廊下の壁に突っ込む。大きく開いた壁の穴を、通りすがりのＤＩＹ研究会の面々がすかさず修しゅう繕ぜんし始めた。

　ＤＩＹ研究会の皆さん……今日もご苦労様です。

「ちょっと愛香、負けてらんないよ！　愛香も胸を観み束つか君の頭に………………あっ」

「あっ、て何よ!!」

　今度は女子に何やら話しかけられ、愛香が反論している。

　クラスの男子が、ああ、と思い出したように言う。

「そうだ、さっきの観束の話だけどさ。テイルブルーも、面倒見はいいと思うんだよな。凶暴だけど、何だかんだでレッドたんを助けてるのは伝わってくるし」

　今さっきトゥアールをカッ飛ばした愛香の様子を見て、テイルブルーのいいところを思い出すのはちょっと危うく思えるが、それでも俺は嬉うれしかった。

　俺があれこれ考えを巡らせなくても、少しずつブルーの良さはみんなに伝わっている。

　クラスメイトのおかげで、少しだけ安あん堵どすることができた。

◇

　放課後。クラスの男子たちが話していたことが気になり、俺はツインテール部の部室でネットを見ていた。

『ツインテール型のミステリーサークル現る』

『月にツインテール型の巨大クレーターが!?』

　センセーショナルなコピーとともに、次々と記事が出てくるではないか。

　愛香とトゥアール、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生はテレビを観ていた。夕方の報道バラエティで、やはり昨今のツインテール超常現象について触れられているようだ。

『Ｏｈ……ＴｗｉｎＴａｌｅ……』

「海外の反応」というテロップとともに、ツインテール超常現象を目まの当たりにした外国の人たちに街頭でインタビューをしている映像が流れている。

「もしかして、なのですが……。これは以前に観束君が仰おつしやっていた、『早く基地に来いと急せかしている』兆きざしなのではないでしょうか……」

　自信なさげに意見を出す慧理那。

「実はロエルとリルナから、世界と世界の繫がりが今まで以上に不安定になってきているって聞いたんだ。そこに来て、最近のツインテール超常現象だ。無関係には思えない」

　俺は慧え理り那なの推論を補強するように言葉を重ねた。

　ソーラも、首領の影響で全異世界に何かが起こり始めていると危き惧ぐしていたしな。

「慧理那さんや総そう二じ様の仰おつしやるとおりです。この数日、私も独自に世界の怪情報を調べてみました」

　トゥアールはホワイトボードをスクリーンモードにし、大陸が緑色の世界地図を表示した。

　そこに雨粒が落ちるかのような密度で、次々に赤い点が表示されていく。

「……え。まさか、この点、全部……？」

　ぎくりとしてスクリーンに見入る愛あい香か。

　数十どころか、数百は軽くありそうだ。

「そう、ツインテール超常現象の目撃情報です。明らかに虚偽とわかるソースは振るい落としましたが、それでもこれだけの数が、僅わずか数週間の間に目撃されています」

「これは、ちょっと多すぎるんじゃないか？　赤い点がない国が見当たらないぞ」

　桜さくら川がわ先生が言うとおり、ようやく赤点の表示が止まる頃ころには、もはや元の地図の緑色を探す方が難しいくらいの差になってしまっている。

「私も、にわかには信じられませんでした。あまりにも、ツインテール過ぎます」

　トゥアールが真剣な表情でそう言うと、愛香が頬ほおをひくつかせる。

「世界がまるでそーじの代名詞みたいなことになってるわね……」

　確かにな。ツインテール過ぎる──それは俺の専売特許だ。世界が何者かの手によって無理矢理にそうされているというのなら、当然止めなくてはならない。

『こ、このせか……世界のぉ、人間たちに告ぐっ！』

　全員の視線がホワイトボードに向いている間に、テレビから奇妙な声が聞こえた。

「スワンギルディ⁉」

　俺は思わず叫ぶ。声が裏返っているが、画面に映っているのはスワンギルディだった。

　あいつも全世界電波ジャックで演説をするまでに出世したのか……と、少ししんみりしてしまう。もちろん、見み逃のがせないことなんだけどな……。

『私は、今、この世界に来てるよ。いやいや違う、来ている！　だが、ツインテイルズにぃ発見されることは、ない。人間たちよ、私の出現を、見事、ツインテイルズにだな、伝えてみせるがよい……‼』

「めちゃくちゃテンパってますね、あいつ」

「彼は、ああいう演説が得意には見えませんでしたもの……」

　トゥアールと慧理那が、ある意味はらはらしながら画面を見ている。敵ながら気の毒になるぐらいの緊張ぶりだ。ティラノギルディですらここまでは緊張してなかったぞ。

「なんだあいつは、自分を宝探しの景品みたいにして。何が目的だ？」

　桜さくら川がわ先生の喩たとえは的を射ている。まさに宝探し。全人類に自分を探させる理由が、俺たちには見えない。

「とにかく皆さん、基地に移動しましょう。あそこまで大々的に宣言した以上、スワンギルディの目撃情報がネットに書かれるはずです。それを元に位置を特定します」

　トゥアールに促うながされ、俺たちは転送ロッカーから地下基地へと向かおうとした。

　すると愛あい香かのトゥアルフォンから着信音が鳴り響き、思わず全員で足を止める。

　愛香は画面に表示された名前を見て、ぎょっとしながら通話を始めた。

『ねえねえ愛香、いたのよ、さっきテレビに映ったエレメリアンが！』

　愛香のすぐ隣にいた俺の耳にも、うっすらと漏もれ聞こえてきた。恋れん香かさんの声だ。

　通話を終えた後、愛香もあらためて皆に情報を伝える。

「……お姉ちゃんから電話。エレメリアン……スワンギルディ見つけた、って……すっごい嬉うれしそうに……」

　まさか、恋香さんから通報を受けることになるとはな。

「えっ……恋香さんてエレメリアン見つけてうきうきになるようなキャラでしたっけ……？」

　何な故ぜか日頃ごろから恋香さんを警戒しているフシのあるトゥアールは、そう言った。

「あたしが余計なこと言っちゃったのよ。病院を狙ねらってるエレメリアンがいるから気をつけてって。そしたらお姉ちゃん逆に興味持っちゃったみたいで、ここのところ大学の授業には関係なく病院とか薬局とか巡ってるらしくて……」

　確かに恋香さんが野次馬根性を出すってのは、イメージと違うな。

　テイルレッドに対しても、世間ほどには興味があるようには見えなかったし。

「絶対！　絶対に今日スワンギルディを倒すわよ！　これ以上放っておけないわ!!」

　恋香さんがエレメリアンに興味を持ったことに責任を感じているのだろう。愛香は握った拳こぶしで宙を薙ないで、声を張った。

「イースナとメガ・ネさんとも連絡がつきました。今のスワンギルディは強敵です……尊みことさんも出撃して、サポートをお願いします」

「了解した」

　トゥアールを除いた全員で出撃することが決まり、俺たちは転送ロッカーから基地へと向かう。

　スワンギルディとの決闘の約束を果たす時がやって来たのだ。

◇

　イースナ、メガ・ネと基地で合流した俺たちは、すぐさま通報のあった場所へと出撃。

　到着した国立病院の駐車場は、見物客でごった返していた。

　俺たちを見て歓声を上げる人々。

　スワンギルディはまたもや、人々の属性力エレメーラ奪取をしよ

うともせずに仁王立ちしている。完全に決闘の準備万端ってところか。

　テレビで大々的に探索を煽あおった割りには、即座に見つけられてしまうとは……ネット全盛の今の時代の宝探しとは、こういうものなのかもしれないな。

「うおっ、テイルブルーが水色になってる!?」

「いや、ちゃんといつものテイルブルーもいるぜ。大人のテイルブルーが増えてるって噂、本当だったんだな……」

「それに、全然違うだろ……ほら、胸とか……」

　アナザーブルーを初めて見る人も多いみたいだな。

　胸を比較されたりして、ブルーも怒っているだろうな──と様子を窺うかがう。

「ああ……お姉ちゃんいる……」

　しかしどうやらブルーはそれどころではないようだった。

　ギャラリーを見やると、確かに人垣の後ろの方に恋れん香かさんの姿があった。

　これだけギャラリーがいては、今のスワンギルディと真剣勝負をするなど、とてもじゃないが無理だ。

　一刻も早く、こいつをもっと人ひと気けのない場所へ移動させないといけない。

「あの仮面少女は来ないのか。ドラグギルディ様と因縁浅からぬ相手、是非とも私の手で打倒したかったのだが」

「因縁が深いから来ないのよ。あんたごときじゃ、その因縁を引き継ぐことなんてできないわよ。テンパった演説してくれちゃってさ」

「探知できないとわざわざ教えておいたにもかかわらず、一向に私を探し出すことができないお前たちの不ふ甲が斐いなさに呆あきれてしまってな。慣れない演説をしてしまった」

　ブルーは姉が関わってしまった焦あせりで苛いら立だっているが、スワンギルディも動じることなく皮肉で返す。そして、俺にビシリと指を突きつけてきた。

「最後の戦いの号砲代わりだ……お前のナース服姿を見せてくれ……テイルレッド!!」

　言うが早いか、ぐるりのギャラリーたちの様子を確認するスワンギルディ。皆、期待に満ちた目をしている。彼らを味方につけるつもりか……。

　服飾系の属性を持つエレメリアンにはだいたいこういうこと言われるから、いつかはこいつも言ってくるだろうと思っていた。なので、俺は大して驚きはしない。

「何な故ぜあなた方は、レッドにお着替えを強制するのです！」

「黙れ、よく脱ぐくせに！」

　イエローの糾きゆう弾だんをシンプルに切って捨てるスワンギルディ。完全に居直ってやがる。

「……ブラック、よろしく」

　テイルギアを装着した状態で衣装替えをする能力を持つブラックに、俺は今回も着替えを頼む。

「マジか……お前はそれでよいのか、レッド!?　また敵に借りを返すと言うつもりか!?」

　俺が頷うなずくと、ブラックはわなわなと震ふるえだした。

「なんということじゃ……これまでこやつに受けた恩に対して、お礼が過剰すぎる！　レッドが……レッドが、導入部にあまりページ数を割けないエロマンガで重宝しそうな女になってしまった……!!」

「着替えを見せてやって、スワンギルディを早めにここからどかしたいんだ……！　俺だって好きでやるわけじゃないって!!」

　小声でブラックに嘆願する。今のスワンギルディとは、これだけ人が密集している場所で戦うのは厳しい。

「仕方ない……死出の餞はなむけじゃ、とくと刮かつ目もくせよ、スワンギルディ!!」

　ブラックが神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを押し上げると、レンズから光が照射されて俺の全身を包む。

　俺はピンク色のナース服となり、オプションなのか手には巨大なレプリカの注射器まで添えられた。

　めちゃくちゃスカートが短い……！　俺は反射的にスカートの裾すそを引っ張ってしまう。



地鳴りのような歓声が巻き起こる。

マジでこの周囲一帯だけ、局地的な地震が起きたのではないだろうか。

俺は恥ずかしさを感じながら、スワンギルディを睨にらむ。

「仲間にも散々注意されてるしな。これでもう、貸し借りはゼロだ。お前の決闘を受けた以上、こっちの要求にも従ってもらうぞ。場所を変えろ、スワンギルディ」

「んんんんんんん……その格好で言われては、従わざるを得ない……!!」

ナース服姿だと俺の言うこと聞いてくれんのかよ……。

スワンギルディが天高く跳躍し、俺とイエロー、ブラック、シルバー、アナザーブルーも後を追う。

最後にもう一度恋れん香かさんを見た後、ブルーは一人遅れて飛び立ったようだった。

病院から少しだけ離れたところにある山へ移動し、俺たちはスワンギルディとあらためて対たい峙じした。景観は最初にドラグギルディと戦った場所に似ている。

俺はブラックに頼んでナース服姿を解除し、元のテイルギアへと戻った。

めちゃくちゃ寂しそうな目で俺を見てくるスワンギルディ。

「これで世界には、ナース服の良さが存分に伝わったことだろう……テイルレッド、お前のおかげでな」

しかしスワンギルディは、無念以上の達成感を伝えてきた。

「他にもう、思い残すことはないか。スワンギルディ」

「いいや、まだある。テイルレッド……お前を超え、お前を倒すことこそが、私の一番の願いなのだから!!」

「悪いが、どんだけ借りがあってもその願いは叶かなえてやれないな!!」

　俺がフォースリヴォンに触れると同時に、仲間たちも武装を手にしていった。

　ブレイザーブレイド、ウェイブランス、ヴォルティックブラスター、ダークネスグレイブ、ウェイブメイス。シルバーは両指のバルカン砲を構える。

　臨戦態勢を取った六人のツインテイルズを前に、スワンギルディは微み塵じんも動揺を見せない。レイピアを手にし、フェンシングのような構えを取る。

「きえええいっ!!」

　先に動いたのは、スワンギルディだった。

　突き出されたレイピアを避けながら、俺たちは連携を取って攻撃を加えていく。

　誰だれかの攻撃を受け止めれば、そこへ別のメンバーの攻撃が迫る。

　慌あわててそれを躱かわした位置には、さらなる追撃が飛んできている。

「ぐううっ……！」

　人数差に押され、苦く悶もんの声を上げるスワンギルディ。

　今のところスワンギルディの旗色が悪いが……真の姿がまだあるという言葉がブラフでないのなら、俺たちも迂う闊かつに最強変身チエインエヴオルブして消しよう耗もうするわけにはいかない。

「はあっ！」

　スワンギルディが手の平を突き出すと、目の前の空間に極彩色の穴が出現。

　イエローとシルバーの撃ち放った銃弾が吸い込まれ、消えていく。

　しかし、その隙すきを突いてブルーとアナザーブルーが左右から挟撃し、スワンギルディはまともに攻撃を受けて倒れる。俺とブラックもブレイドとグレイブを一いつ閃せんし、さらに大きく吹き飛ばした。

「全員でかかって来いってぶち上げたのはあんたよ。今さら泣き言なんて言わないでよね」

　ランスを肩に担かつぎ、ブルーが突き放すように言う。

「当然だ！　今の私は、レッドのナース姿を見て気合い十分であることを忘れるな!!」

　スワンギルディは意気十全に立ち上がり、レイピアを構え直す。

『全員で必殺技を叩たたき込んでください……ただし、自爆を誘発したエンジェルギルディの前例もあります、念を入れて時間差で……!!』

　トゥアールも、今回はかなり慎重なオペレートをしてきている。

　それだけスワンギルディを脅きよう威いだと認識しているのだろう。

「……そうじゃな。こやつの成長速度は驚異的じゃ。このままではいずれ、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの奴やつらに並ぶまでになるやもしれぬ。倒すなら、今じゃ!!」

　ブラックの合図で、俺たちはそれぞれの武装を構えた。

「完全解放ブレイクレリーズ！」　「完全解放ブレイクレリーズ……！」　「完全解放ブレイクレリーズ!!」　「完全解放ブレイクレリーズッ」　「完全解放ブレイクレリーズ──」

　シルバーを除いた五人の武装が、順に完全解放ブレイクレリーズしていく。

「はぁ……はぁ……むううおおおおおお……!!」

　避けえぬ必倒を目まの当たりにしながら、スワンギルディは全身から膨大な闘気を立ち上らせていく。そしてその闘気を拡散放射し、俺たちの必殺技を発動の半ばで霧む散さんさせた。

　しかし奴にとってそれは攻撃でも防御でもなく、「産声」だった。

　灰に近い白色の光を全身にまとわせ、スワンギルディのシルエットが徐々に変化していく。

　その姿を見て、真っ先に声を上げたのはトゥアールだった。

『ペガサス、ギルディ……!?』

　通信が、やけに大きく響く。

『ペガサスギルディに、そっくりです……どうしてスワンギルディがその姿を!?』

　そして二度目は、確信に満ちた動揺とともに。

　そうだ……この姿は、トゥアールと精神が繋つながった時、彼女の記憶の世界で見た──かつてのアルティメギル最高科学者。

　そして、フェニックスギルディの親友。

　神々の世界の天を気け高だかく翔かける、翼を持った白馬……ペガサスのエレメリアンだ。

「ペガサスギルディの姿を借りることが、お前の最終闘体だっていうのか!!」

　俺が問うも、それには答えずにスワンギルディはブラックへと視線を向けた。

「……テイルブラック。あなたはご存じだろうが、エレメリアンは何万何億と生まれようとも、全く同じ形で生まれることはない」

「うむ。人間に瓜うり二ふたつのそっくりさんがいても全てが完かん璧ぺきに同一な存在があり得ないように、人間の記憶からあらゆる生物を活性体シルエットとして生まれるエレメリアンも、また同じ。精神生命体の神秘と言われておる」

　よくわからないが……ブラックは、進化したスワンギルディがペガサスギルディそのものの姿ではないということを補足しているのか？

「私はあくまで、彼かのお方の姿を最終闘体の起点とさせていただいただけだ。今の私に姿は無く、しかしあらゆる姿を持つという矛む盾じゅん存在──!!」

　スワンギルディは魂たましいをほとばしらせるように、進化を果たした自分の名を宣言した。

「我わが名は進化の化身！　ヴァイラ＝スワンギルディ……!!」

キャラクター名鑑 046

ヴァイラスワン ギルディ



DATA

身長：212㎝（可変）

体重：304kg（可変）

属性力：看護服属性（ナース）
＋その他無数の属性力

スワンギルディの最終闘体。「お前の背に白い翼が見えた」というフェニックスギルディの言葉が強烈に印象に残っていたためペガサスギルディの姿を起点としている。だが、その真価は一にして全、全にして一と、あらゆる姿を持つことにある。しかし、あまりにも多くの思いを受け継ぎすぎたことが、未だ成長過程の若き戦士に枷をもたらすことにもなった。残存混成軍の体現ともいうべき、無貌の戦士。

第五章

ただ、変態になりたかった。

　ヴァイラ……スワンギルディ。

　奴やつは少し間を空あけてそう名乗ったため、途中で言い直したのかと思った。

　しかしよく考えればそれは、ゴッドドラグギルディのように元の自分の名前にさらなる強化を冠した名前なのだろう。

　けど、ヴァイラって何だ……。

　ヴァイラ……ヴァイラス……。

　――病原菌……!?

『……最強の生物は何か。古来より様々な議論と研究がされてきましたが……その中で、根強い一つの結論があります』

　俺が奴の名前の意味に気づいて戸惑っているのを見て取ったのか、トゥアールが通信をしてきた。

『適応力、増殖力、そして進化力。全てが他の生物を圧倒する存在があるのですが―』

　トゥアールは躊躇ためらうように吐と息いきを落とすと、結論を伝える。

『それこそが細菌……病原菌。病原菌こそが、最強の生物だという見方ができるのです』

　だとしてもだ。そういう解説を受けたとしても……こと、こいつのことに関しては、納得ができない。

「よりにもよってお前は、病原菌を進化の証あかしとして選んだっていうのか……!!」

　俺はそう聞かずにはいられなかった。

　エレメリアンの最終闘体は、自分の成長の証。

　生まれ持った活性体シルエットと違い、進化には自分の意志が介在する余地があると聞いた。

　神話の神々……伝説の生物……いくらでも強さの象徴はあったはずだ!!

「お前はそれでいいのか！　自分の形を持たない……借り物が最後の姿で！　本当にそれを誇れるのか!!」

「誇れるとも」

　ヴァイラスワンギルディは俺に視線を合わせたまま、唐突に右腕を突き出した。

「うわああっ……！」

　俺の隣にいたアナザーブルーが衝撃波を浴び、地面に倒れる。

「アナザーブルー！」

「私は大丈夫だ……気をつけろ!!」

　攻撃を受けながらも俺を気遣うアナザーブルー。

「私もかつては白衣の天使──天の使いの姿に憧あこがれもあった。しかしマーメイドギルディがあのような姿とともに天使の名を冠した時、悟ったのだ。どんな姿であろうと、本人次第。逆に忌いみ嫌われるような存在であろうと、自分自身が誇りをもって臨のぞめばよいだけだとな」

　ヴァイラスワンギルディが、二つに、四つに、五つに分身する。

　早速、病原菌ヴアイラスの特性──増殖変異を！

　一人でも複数戦闘に対応できる……こいつが俺たち全員との決闘に自信たっぷりに応おうじた理由は、これか!!

「ツインテイルブレス！」

「エターナルパッド！」

「アブソリュートリング！」

「インフィニットコンバイン！」

　俺とブルー、イエロー、ブラックは最強変身チエインエヴオルブ

し、アナザーブルーとともに五体に増殖したヴァイラスワンギルディと対たい峙じする。

「元より私は、この世界にやって来てすぐ、お前たちに倒されるはずだった身。それがドラグギルディ様にお止めいただき……その後の部隊長、幹部……多くの方々に師事し、ここまで成長することができた」

　なおも語りを止やめないヴァイラスワンギルディ。

　底知れぬ気迫。こいつがこの戦いに懸けるものが、ありありと伝わってくる。

　最初に変化に気づいたのは、ブラックだった。

　等しくペガサスギルディの形をしていたヴァイラスワンギルディの増殖体たちが、俺の目の前にいる本体を除いて変身を始めたのだ。

「白いフェニックスギルディじゃと!?」

　ブラックの前には、全身が真っ白なフェニックスギルディが。

「こっちは白いクラーケギルディになった……！」

　ブルーの前には、クラーケギルディが。

「リヴァイアギルディですわ……!!」

　イエローの前には、白いリヴァイアギルディが。

「……？　何だこいつは」

　アナザーブルーの前には、白いタイガギルディが現れ、それぞれ戦闘態勢を取った。

　こいつ……方向性は違うが、全てのエレメリアンの力を結集して変身した、俺のエレメリアチェインに近い特性を持っている！

　指導を受けてきたエレメリアンたちの能力や姿を、自分のものとして使うことができる……それが今のスワンギルディの力か!!

「そうだ……何物にも変われるというこの姿こそ、我わが誇りなの

だ!!」

　まさに自分を誇るように、雄おゝおしく構えるヴァイラスワンギルディ。

　今のこいつはいわば、無む貌ぼうの戦士。

　あらゆる技と姿を内包した……残存混成軍そのものを体現したエレメリアンだ!!

「ひっ……!?」

　ブルーが息を呑のむのが聞こえ、俺はそちらに注意を払う。

　白いクラーケギルディが背中の触手を蠢うごめかせ、ブルーににじり寄っていた。

「きいやあああああああああああああああ触手うううううううううううううううううう!!」

　山中にブルーの悲鳴が木霊こだまする。

『いけません……ヴァイラスワンギルディはツインテイルズの特性を熟知しています！　普段は勇ましく腕っ節が強いくせに、触手にはめっぽう弱いという、ブルーのエロマンガ特性の弱点を巧みに突いてきているんです!!』

　白いクラーケギルディが切り離した触手は、ブルーの全身に絡みつこうと飛ひ翔しようする。ブルーは涙目になりながら逃げ回っていた。

「ちっ……世話の焼ける！　セラフィックインフィニット!!」

　白いフェニックスギルディの攻撃を躱かわしながら、ブラックは援護を試みる。

　神眼鏡ゴツドめがねから∞型の光輪が放たれ、筋肉質のおっさんたちが象かたどられていく。

「ゆけ、おっさんたちよ！　貧乳を救出するのじゃ!!」

　ブラックが実体化させたおっさんたちが、ブルーに襲おそいか

かっている触手を摑つかみ、動きを止めた。

　しかし触手たちはなにくそとばかりに反撃へと転じ、おっさんたちの身体からだに絡みつき始める。

　もともと全身がてかてか光っているおっさんたちが、触手と絡みあうことでさらに全身の光沢を増していく。

　地獄だ。地獄が顕けん現げんした。

「むむむ……真っ白で不気味な奴やつだ……！」

　アナザーブルーは、白いタイガギルディと戦っているが、さほどの強さではないようだ。

　アナザーブルーはウェイブメイスを振り回し、タイガギルディに攻撃の暇ひまを与えない。

「むう、やはりあまりお話ししたことのないタイガギルディ殿では、ああなってしまうか……。私の眷けん属ぞくがお借りする姿は、私との関わりの深さが戦闘力に直結するからな……」

　自分自身の力をまだ探り探りの状態なのか、ヴァイラスワンギルディは白いタイガギルディとアナザーブルーとの戦闘を一いち瞥べつしてそう独りごちた。

　増殖体が模倣するエレメリアンは、スワンギルディとの関わりの深さが戦闘力に直結するらしい。

　奴とほぼ関わりがなかったであろうタイガギルディだと、あまり力を引き出せないのか。

　一方イエローが相手をしている白いリヴァイアギルディは、奴やつが師の一人だったと話していたこともあり、オリジナルに勝るとも劣らない強さだ。

　伸縮自在の股こ間かんの槍やりで、イエローに激しい刺し突とつを繰り出していく。

「増殖体には意思は無いようですわ！　レッド、あなたが相手をなさっている、ベースのヴァイラスワンギルディを倒せば……!!」

白いリヴァイアギルディと戦いながら、イエローは俺に叫んだ。

「増殖してる方も消えるってことか！　わかった!!」

テイルカリバーを構え、ヴァイラスワンギルディと斬きり結ぶ。

俺たちはこれまで、分身や分裂をするエレメリアンと幾度か戦ってきた。そういう敵はイエローの言うとおり、本体を撃破するのが一番確実だ。

「おおおおおっ……はあ――――――――――っ!!」

ヴァイラスワンギルディの裂れつ帛ぱくの咆ほう哮こうが、剣にも勢いを込める。

細身の刀身でありながら全く撓しなる様子も見せず、奴のレイピアは光の刃やいばを形成してこちらに対抗してきた。

俺のブレイザーブレイドの完全解放ブレイクレリーズにそっくりだ。エレメリアンだけでなく、ツインテイルズの武器や技まで参考にしているのか……！

「アルティメギルには組織の財産と言うべき、数々の修行方法が存在する。その最上位に位置する五大修練を私は多くの師に伝えられ、そして乗り越えてきた――」

俺が剣をかち上げ距離を取ると、ヴァイラスワンギルディは誇るように語り始めた。

「五大修練の最後の試練の名は、ツインテール・ソ・ノモーノウ……。その本質は異なる二つの属性を等しく極めることで、超越した力を得ることにある」

最強戦士たちが……終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーが語った、奴らの強さの秘密と同じだ。

こいつは本当に僅わずか一年足らずで、エレメリアンの奥義にまで辿たどり着いてしまったのか。

「はああああああああああああっ!!」

ヴァイラスワンギルディは背中の羽を羽ばたかせ、無数の羽根型

の刃を放ってくる。

「飛べ、セイバ――――――――――ッ!!」

　俺は背中のブレイザーセイバーを射出し、これを迎げい撃げき。さらにヴァイラスワンギルディへと飛ひ翔しようさせる。

　ヴァイラスワンギルディは天高く跳躍してセイバーを躱かわすと、そのまま蹴けりの体勢を取って俺に突っ込んできた。

「さあ受けよ！　これが我わが師フェニックスギルディより賜たまわった、魂たましいの絶技！　ヴァイラ―スワンキ――――――――ック!!」

「テイルカリバー！　覚悟装塡レゾリユードモード!!」

　ヴァイラスワンギルディの蹴りを、防御形態に変形させたテイルカリバーで受け止める。

　まさに、オリジナルのフェニックスキックに生き写しの威力だ。

「随分と威勢が良くなったではないか、スワンギルディ！　わらわのメールにろくに返信もできずに半泣きだったのは、そう昔ではあるまい？　ん？」

　ブラックは白いフェニックスギルディの攻撃を捌さばきながら、ヴァイラスワンギルディを焚たき付けるように言い放つ。

「そう言うお前は、戦闘の最中さなかにメールの着信を確認する余裕も失ったようだな―テイルブラック!!」

　ブラックははっとして、携帯電話を取り出す。そしてその画面を見て、驚きよう愕がくした。

「……馬ば鹿かな！　レッドに蹴けりを放ちながら、わらわにメールを送っていたじゃと!?」

　ヴァイラスワンギルディは、してやったりな笑みを浮かべた。

「今の私は、お前のメール爆撃にたじろいでいた未熟者ではない！」

　こいつ、あの一瞬の攻防の中で、ブラックにメールを送信してやがったのか!?

「くっ……文字数限界に迫るクソ長ながが本文に、絵文字顔文字アスキーアートがこれでもかとちりばめられている……悔くやしいが、見事なメールじゃ！　成長したな、スワンギルディ!!」

「あなたには、随分と厳しくしごかれたからな……！　マジで……！」

　ブラックの賞嘆に、スワンギルディは淡々と返したが……その横顔はどこか、嬉うれしそうだった。お前とあなた、呼び方がぶれていることにも、隠しきれぬ喜びが表れている気がする。

　袂たもとを分かったとはいえ、多くの教えを受けたダークグラスパー──テイルブラックに認められたことが、誇らしいのだろう。

「ぬうっ……こちらのフェニックスギルディも、蹴りを……！」

　そうこうしているうちに、ブラックは白いフェニックスギルディに圧おされ始めた。

　おそらくフェニックスギルディは、スワンギルディが師事した中でもかなり重要なエレメリアンのはず。つまり、その強さもオリジナルのエレメリアン体に限りなく近いはずだ。

　すでにフェニックスギルディと対戦経験のあるブラックでなければ、もっと苦戦していただろう。

　それでも、増殖体がどれもドラグギルディに変化しないのは、スワンギルディの中でも特別中の特別の存在だからなのか。

　いつしか俺たちは繰り出す言葉を失っていき、ただ、断続的な爆裂音だけが山中を駆け抜けていった。

「はあ、はあ……」

　ヴァイラスワンギルディが苦しげに喘あえぐ。

　しかし、俺たちツインテイルズも全員、息を荒らげながらそれぞ

れの相手と対たい峙じしている。

　死闘だった。

　増殖体も自分の力で操っている以上、奴やつの体力も数倍消しょう耗もうが早いはずなのに。

　この驚異的な生命力もまた、病原菌ヴアイラスの特性か。

「や、やったぞ……私は、私はついに、ツインテイルズを追いつめているのだ……!!」

　何より、執念だ。他のエレメリアンたちと違い、世界侵略や属性力エレメーラ奪取が目的ではなく、ただひたすらに俺たちに勝つことだけを考えて鍛たん錬れんしてきたこいつは、この決闘において完全に精神が肉体を凌りよう駕がしている。

　俺が完全解放ブレイクレリーズで勝負に打って出ようとした、その時。不意に、視界が暗くなった。

「これはっ!?」

「何事か!?」

　俺とヴァイラスワンギルディが、ほぼ同時に驚きの声を上げた。

　上空に黒雲が立ち込め、雷が落ち始めた。

　──ツインテールだ。

　黒雲を貫いて、ツインテール型の稲妻が轟とどろいている。

『大変です、レッド！　世界中のツインテール超常現象が、一気に活性化し始めました！』

「何だって……!?」

『世界中の活火山が活動を始めて……ツインテール型の噴火が起こっています!!』

　悲鳴のようなトゥアールの通信。

　悪夢の具現。火山からツインテール型の大噴火が起き、地上に降

り注ぐ。

　活火山とやらはここからそう遠くない場所にもあったらしく、地平の先でツインテール型に噴火する火山が、確かに見えた。

　俺は何て甘かったんだ。

　俺たちが攻め入らなければ、アルティメギルの方から何らかのアクションを起こしてくるだろう、だって……？

　とんでもない。急せかすどころか、世界を破滅させかねない勢いだ！

「ここまで……ここまでするのか！　お前たちは!!」

　アナザーブルーが怒りを露あらわにして叫ぶ。

「待て……私はあんなものは知らない！　私の仲間たちもだ……！　私たちエレメリアンは、人間を殺生することが目的ではないのだぞ!!」

　俺と対たい峙じしている本体以外は、構わずにツインテイルズと戦い続けている。本体の動揺など、気にも留とめずに。

「……アルティメギル首領様が、お前たちを呼んでおられるのだな……。あの方も人間の殺生を好まれる方ではあるまい。〝楽しみに待つ〟……ただそれだけで、これほどの影響を世界に与えてしまうのだ……!!」

　ヴァイラスワンギルディは、やるせなさに拳こぶしを握り締めていた。

　天を覆おおっていた黒雲が、あっという間に消え去る。それと引き換えに、さらなる恐るべき破滅が、世界に降りかかろうとしていた。

『な……ち、地球にツインテール型の彗すい星せいが近づいています！　これほど接近するまで探知できなかったなんて……』

「ツインテールの彗星だと!?」

　俺は通信を聞いて思わず叫び、空の彼方かなたへ視線を飛ばす。

本当だ。ツインテールの形を維持している彗星──いわばテイル彗星が、空を覆っている。

あの完かん璧ぺきなツインテール型で、宇宙を飛んでくるなんて──重力も物理法則もガン無視だ。

まだ大気圏に突入してすらいないだろうに、すでに地表に震動をもたらすほどの威力。あれが地球に激突したら──まさに、世界の終しゆう焉えんだ。

「世界の破滅カタストロフが……ツインテールの形を持って現れ始めた……」

俺は、意識が胡う乱ろんになっていくのを感じていた。

今、世界中の人たちはツインテールに恐怖しているだろう。

俺たちが愛し、守ってきたツインテールが、破壊の象徴として上塗りされてしまう。

その絶望に身を焦がし、立っているのも覚おぼ束つかずによろめいた。

俺は壁に背中をぶつけ、はっとして振り返る。

「──しっかりして、レッド!!」

ブルーが、俺の肩を力強く支ささえていた。

「こんなことくらいで絶望してちゃ、首領なんて倒せやしないわよ!!」

「……ブルー……！」

俺の目に、ツインテールに、生気が戻っていくのを感じる。

「レッド！　あんたはみんなと一緒に、ヴァイラスワンギルディを！　あの石コロはあたしが何とかするから!!」

「隕いん石せきの破砕ならば、わたくしも一緒にまいりま──きゃあっ!!」

ブルーを援護しようとしたイエローは、白いリヴァイアギルディ

の槍やりに打たれてギアから火花を散らしていた。

　いや、リヴァイアギルディだけではない。

　増殖体はさらに分裂し、神の一剣ゴー・デイア・ソードのメデューサギルディまで真白い姿で現れ始めた。

　この戦士も、スワンギルディをかなりしごいた師だということだが──。

「イエロー。レッドをお願い……そいつがツインテールで悲しむ姿、見たくないの!!」

　ブルーは後ろ髪引かれつつも、一人戦場を離脱する。

「待て！　く、ううううううう……!!」

　ヴァイラスワンギルディは歯は噛がみし、ブルーに手を伸ばした。

　しかし奴やつも、世界滅亡を止めようとするブルーを阻止することまではしなかった。

　ブルーと戦っていた増殖体は、アナザーブルーを標的に変える。

　周りにどんどんエレメリアンが増え始めている……みんなの負担が大きくなる一方だ！

「わ、私はこの決闘に、これまでの全てを……これからの全てを懸けて臨のぞんだというのに！　テイルブルーもまた、超えるべき壁であったというのに！　壁が……壁が立ち去っていく！　うおおおおおおお!!」

　スワンギルディの慟どう哭こくが、虚むなしく空に響いた。

◇

　彗すい星せい迎げい撃げきのための最適なポジションまでの移動を考えていたブルーは、山から少し離れた時点でそんな微調整が通

じる相手ではないことをすぐに悟った。

　月や太陽を凌しのぐ、ツインテール型の天体が迫って来るという異様。

　ブルーは、超巨大ツインテール隕いん石せきの襲来を呆ぼう然ぜんと見つめていた。

　彗星を、流星と混同していたのだ。願いを捧げる夜空の光のように、見えたと思ったらすぐに消え果てる、儚はかないものなのだと。

「……何あれ。めちゃくちゃデカいんだけど……。安請け合いしちゃった……」

　しかしテイル彗星は、ツインテールの形をしているのが地上から目視できるほどに巨大で、じわじわと近づいてくる。近づいてくるのが、はっきりと知覚できてしまう。

　流れ星とは違い、何十何百の願いを捧げてもなお時間が余りあるほどに、ゆっくりと滅びを運んでくる。

『無茶ですブルー！　激突すれば地球が壊滅する大質量の彗星です、一人で事前策無しに迎撃できるレベルではありません!!』

「だったら、なおさら何とかしなきゃヤバいじゃない!?」

　レッドたちの方は、自分一人が抜けただけでも相当な負担になっているはず。今のスワンギルディは、それ程の強敵だ。

　せめてこれぐらい、自分一人で片付けなくてどうするか。

「──あんたならわかってくれるでしょ。レッドが悲しんでた……。だったらそれを救うのは……あいつを守るのは、あたしでありたいのよ！　世界を滅ぼそうとするツインテールなんて、あたしがブッ壊してやるわ!!」

『ブルー……』

　トゥアールもブルーの決意を汲んだのか、それ以上通信をしてくることはなかった。

　だが、テイルブルーが得意とするのは近接戦闘シヨートレンジ。徹底した肉弾戦。

　完全解放ブレイクレリーズしたウェイブランスエクシードでも、地上から成層圏までの投とう擲てきではとても威力を維持できない。

　どうすれば自分一人で、あの大質量を地上から撃墜できる。

　考えに考え抜いた末、ブルーの脳裏を一条の光が閃ひらめいた。

「……あった……」

　テイルブルーが持ち得る攻撃手段で、遠距離攻撃を可能とする飛び道具が一つだけある。

　しかもその技は属性玉エレメーラオーブの特性により、距離による威力の減衰がほとんど起こらないというのが最大の強み。まさに今の状況にうってつけの技だ。

　だがそれは、二度と使うまいと決めた禁断の技でもあった。

　──見た目が、絶望的すぎるからだ。

　しかし、迷っている暇ひまはない。

「──属性玉完全解放ブレイクエレメリーズ!!」

　エターナルチェインの最大の特性である属性玉エレメーラオーブの複数同時発動。まずはベースの唇属性リツプと涎属性スロバーを使用し、破壊力を集束させた一点突破の光線を撃ち放つ。

「～～～～～～～ッ……!!」

　口から──。

　ブルーが放つ大技は、かつて貴の三葉ノー・ブル・クラブの無数の部隊員を壊滅させた青白い光線。

　口から怪光線を放つという見た目は、戦闘において効率重視のブルーが唯一、二度と使うことを封印した呪のろわれし魔技まぎでもあった。

　目と、口と、ツインテールを青白く光らせ、迫り来る彗すい星せい目掛け光線を放つ。

　今、この地球という惑星の目に、自分の姿はどう映っているだろうか。

　蒼あおの閃せん光こうが天に伸び、雲に孔が穿うがたれて拡散する。

　雲を超え、空を超え。地球だいちと宇宙てんの狭はざ間まで、その光と星は出で逢あった。

「けふっ……!!」

　彗星と光線が激突した瞬間。あまりの衝撃に、思わず咳せき込むブルー。意識が空の彼方かなたに飛ばされそうなほどの衝撃がブルーを襲おそう。

　意識どころか、首から上が物理的に吹き飛びかねない超圧力。テイル彗星の推進力は、想像を絶していた。

　心身共に鍛きたえ、少女相応の細身でありながらプロレスラー真まっ青さおの強きよう靭じんな頸くびを誇る愛あい香かとはいえ、上面からの荷重が顔面のみに集中するこの体勢は分が悪すぎる。

　槍やりなどの武器による鍔つば迫ぜり合いとは違い、両手に全体重を載せるようにはいかないのだ。

「う、うう……！」

　この威力では簡単に押し切られる。ブルーは意を決し、属性玉エレメーラオーブの更なる加積発動を試みた。

　すでに発動している二つに加え、新たに四つの属性玉エレメーラオーブの追加を敢行。

（重なれ――――――――ッッッ!!）

　属性玉エレメーラオーブ六種同時発動で光線は径を増し、さらには螺ら旋せんをまとって威力を極大化させた。

　彗すい星せいはまだ、ビクともしていない。それどころかブルーは、踵かかとを地面にめり込ませて今にも膝ひざを折りそうになっている。

　ブルーの口から放たれた光線とテイル彗星が、熱烈な邂かい逅こうを続ける。

　これではまるで、キスではないか。

　愛あい香かも女の子だ。

　キスのシチュエーションにこだわりも憧あこがれもある。

　それが何な故ぜ、隕いん石せきとエアキスで押しくら饅まん頭じゅうをしているのか。今の自分を客観視すると悲しくなる。

　しかし──本当にキスをしたい相手を守りたいという願い。そして浮かんでは消えていく笑顔の思い出が、ブルーの双そう眸ぼうに強い光を灯ともした。

（これでブッ壊れなかったら……許さない……!!）

　ブルーが七個目に装そう塡てんした属性玉エレメーラオーブは、赤髪属性レツドヘアー。

（最後のっ──つ─────────────ッ!!）

　放たれ続ける螺旋光線はそれにより紅あかき灼しやく熱ねつをまとい、天を爆裂させて突き進む。

　テイル彗星の前面に小さなヒビが入り、それが一気に全体へと広がっていく。



　ついにテイル彗すい星せいは爆発四散し、ブルーの赤色光線は宇宙空間を突き抜けていった。

　大空に拡散するテイル彗星の破片。観測予定にはない、即興の流星群が展開される。

「はあ──────っ……はあ─────────っ……」

　息苦しさから解放され、へたり込むブルー。当然、息も激しく荒いものとなる。

『……よくやりました、ブルー。彗星の破片は大気圏で全て燃え尽きました。もう心配はいりません……あとはレッドたちに任せましょう！』

　今の自分の姿など、絶好の笑いの種だっただろうに。トゥアールは……自分の親友は、こういう時には茶化してこない奴やつなのだ。

　視線に気づき、ブルーは後ろを振り返る。

　さすがにかなり離れてはいたが……一般人が何人か、こちらを見ていた。

　最初に駆けつけた現場の病院から近いのだから、当然だ。皆、ひどく戸惑った様子なのがわかる。

「……やば、見られた……」

　誰だれかが動画を撮っていたかもしれない。あんな映像がテレビで流れたら、テイルブルーは今度こそ魔物扱いされ、今までイメージ回復を図ろうとしてくれていた総そう二じの努力が無駄になってしまう。

　だがブルーはギャラリーの中に、自分の姉を……恋れん香かの姿を見つけた。

　彼女も病院からここまで、様子を見にやって来たらしい。

　恋香はブルーと目が合うと、にっこりと微ほほ笑えみ──

「かっこよかったわよ、テイルブルー！」

　彼女らしからぬ声量で、声援を送ってきた。

「そうですよね、皆さん!?」

　そしてさらに、周りの一般人に語りかけた。ざわめきが広がっていく。

　恋香は皆の考えを歪ゆがめ、扇動したわけではない。むしろテイルブルーにどう言葉をかけるか迷っていたからこそ、一般人たちは声を、声援を繋つなげていく。

「おおっ……そうだ！　ここまで突き抜ければもう、かっこいいとしか言いようがないぜ!!」

「ありがとう、テイルブルー!!」

「あたしも大きくなったら口から光線吐くー!!」

　親御さんが頭を抱かかえるような将来を望む幼女がいたのが気になるが……声援を受けるというのは、悪い気分ではなかった。

「現金なヤツら。それが怪物がやったことでも、隕いん石せきブッ壊せば感謝もされるか……」

　皮肉をこぼしながらも、ブルーは満ち足りた表情だった。

　中途半端にいい格好をするより、限界以上に突き抜けてしまう。

　正しいことをし続ければ、いつかはきっと認められる。

　存外、イメージを回復させる方法というのは単純なのかもしれなかった。

　珍しくはしゃいで手を振っている姉に……自分の正体を知らぬ一般人に、ブルーは苦笑して手を振り返すのだった。

◇

『ブルーがテイル彗すい星せいを撃墜しました！　皆さん、安心して戦いを完かん遂すいしてください!!』

「すごすぎますわ、ブルー……!!」

「病原菌が最強とか言っとるが、もうあいつが生物界最強でいいじゃろ……!!」

　トゥアールの通信に、イエローとブラックが喜びと驚き半々の反応を示す。

　俺は思わず空を振り仰ぐ。確かにツインテールの隕いん石せきは、跡形もなく消し飛んでいた。

「ブルー……次は俺たちが約束を果たすぜ!!」

　そして俺と対たい峙じしている本体のヴァイラスワンギルディは、俺たちとは真逆に明らかに焦しよう燥そうを募つのらせ始めた。

「テイルブルー……不可能を可能にするツインテールというわけか!!」

　ヴァイラスワンギルディは空から視線を切ると、強化レイピアで俺に斬きりかかってきた。

「……やっぱりまだ、お前じゃ俺に勝てない。戦うのが早すぎたんだ!!」

　俺はその一撃をことに大きく弾はじき返し、テイルカリバーの切っ先をスワンギルディの眼前へ突きつけた。

「言うようになったな、テイルレッド！　勝負はまだまだこれからだ！」

「ドラグギルディも、ティラノギルディも、フェニックスギルディも……俺のライバルたちはみんな、戦っていてすごいって思った……そいつらに負けてたまるかって思って、俺のツインテールもどんどん強くなっていった！　けど──」

　その先を言うのが憚はばかられ、俺は唇くちびるを噛かむ。

「私には、それがないのか!?　私との戦いでは、ツインテールがわくわくしないのか!?」

　代わりにヴァイラスワンギルディが結論を口にしてしまう。

「確かにお前は強い……。戦闘力だけなら、俺が今まで戦ってきた戦士たちの中でも最大級だ。けど……それだけだ」

　俺の言葉を振り払うように、ヴァイラスワンギルディは我が武む者しゃ羅らに斬りかかってくる。

「いいや、私は負けない……今度こそ負けない！　それだけの修行をしてきたのだ!!」

　ツインテール超常現象の活性化で動揺していたヴァイラスワンギルディが、俺の言葉でさらに心を乱してしまっている。先ほどブラックに言い返していた気概からすれば、俺にも闘志を燃やして逆襲してくるかと思ったのだが……こいつのこの焦あせりは何だ!?

「うおおおおおお！」

　俺が剣を振るう度たび、白き天馬の身体からだに炎の斬ざん痕こんが刻まれていく。

　ヴァイラスワンギルディは悔くやしげに俺を睨にらみ、自分の足跡を言葉に託した。

「テイルレッドよ……お前は自分の秘しているエロゲーのプレイ状況を他人に見られたことがあるか！」

「ない!!」

「通販の中身を余さず一切合切他者に把は握あくされたことがあるか!!」

「ない……！」

「やることなすこと全て滑り、他者との語らいがまるで噛かみ合わぬ孤独に身を置いたことがあるか!!」

「……ない!!」

「自分の空想妄想をことごとく文章にしたため、他人に批評されたことはあるか!!」

「ないっ!!」

「では……自分をツインテールそのものと考え、心をツインテールとして極めようとしたことはあるか!!」

「────ある!!」

　最後の質問にだけは、撃ちつけ合う剣の威力よりもなおも烈はげしい語勢で答えた。

「……何な故ぜだ……お前はアルティメギル五大修練に照らし合わせれば、たった一つを極めたに過ぎない！　何故五つ全てを修めながら、私はお前の上を行くことができないのだ!!」

　そう言われても、俺は五つ目のそれを試練だ修練だなんて思っちゃいないからな。

　エロゲーはイースナと一緒にやったことがあるが、彼女は堂々としていたし。

「どうだ……それら全てを修めた私は、紛まごうことなき変態だろう!!」

　ヴァイラスワンギルディは、まるで自分に言い聞かせるかのような叫びを上げる。

　ティラノギルディが、戦いの中で自分の孤独を俺に打ち明けてきたように。

「俺には……別に、お前は普通の戦士にしか見えない」

　普通そう言われれば人間は安あん堵どするだろうが、エレメリアンは違う。

　その中でもスワンギルディは……生き真ま面じ目めすぎるんだ。

　変態であることこそが誉ほまれ。

　変態を貫くことこそが武ぶ勲くん。

アルティメギルという、あまりにも巨大な変態組織の中にあって……どこまでも根が生真面目なこいつは、どんどん追いつめられていったんだ。

「うっ……うおおおおおおおおおおおおおおお！」

ヴァイラスワンギルディは咆ほう哮こうすると、ペガサスギルディの姿から俺がこれまで戦ったエレメリアンたちへ、次々に姿を変えて襲おそいかかってくる。しかし、幹部でもない一般兵の姿を借りたところで、余計に不利になるだけだ。

その度たびにテイルカリバーで斬きって返され、それでも諦あきらめずに向かってくる。

「教えてくれ……どうすればお前のようになれる……どうすれば、皆の期待に応こたえられる戦士になれるのだ……!!」

よろめきながら、俺に斬りかかってくるヴァイラスワンギルディ。それは攻撃というより、もはや縋すがりついてくるかのようだった。

だから俺はテイルカリバーを地面に突き立て、右の拳こぶしを強く握り込んだ。

「っの…………馬ば鹿か野郎――――――ッ!!」

「ぐはああっ!!」

その拳を、ヴァイラスワンギルディの頰ほおに渾こん身しんの力で叩たたき込む。

「お前は馬鹿だ……師匠をたくさん持って、自分で考えずに何でも簡単に聞く癖くせがついちまってるじゃねーか！　今のパンチは……ドラグギルディの代わりだ！　あいつが横で聞いていたら、きっとこうしただろうぜ!!」

「ド、ドラグギルディ様が……!?」

恩師の名を聞き、ヴァイラスワンギルディの目の焦点が定まる。

「それにフェニックスギルディも怒るはずだぞ。自分の親友の姿を借りて、情けないことを口にするなって！　お前の成長を楽しみに

していた奴やつらも、お前のそんな姿が見たかったわけじゃあないはずだ……!!」

「ううっ……!!」

「どうするも何もあるかよ！　俺たちは、ツインテイルズもエレメリアンも同じだ！　大好きなものがあって、そのために心を燃やして強くなるんじゃねーか！　それ以外にあるか!!」

「──そ、それは……!!」

　震ふるえる自分の手の平を見つめるヴァイラスワンギルディ。

「ティラノギルディもアポロギルディも、悩みを抱かかえてやがった……俺はお前らのお母さんじゃねえぞ！　悩みを聞いてやるぐらいはするけどな、あとは自分で乗り越えやがれ!!」

『敵には乗り越えてもらわない方が得なんですけどね……。レッドは本当にもう……』

　トゥアールが通信越しに苦笑している。

　けどスワンギルディも、経験不足が祟たたって脆もろさを露呈してしまっただけで、努力だけは誰だれよりもしてきた奴だ。そんな奴の弱みにつけ込んで有利を手にするなんて、俺にはできない。

「好きなもんをどれだけ好きって思えるかが、俺たちの強さだろうが！　変態かどうかなんて、その結果のうちの一つに過ぎねえ！　なのにどうしてお前は、変態であることだけを求めようとしやがる!!」

　俺はテイルカリバーを地面に突き立てたまま、徒と手しゅ空くう拳けんでヴァイラスワンギルディを後退させていく。

「いいから黙って、好きなもんを誇りやがれ────────────────ッ!!」

「うぐあああっ……!!」

　最後に鉄拳一発。とうとう、ヴァイラスワンギルディは大地を転がる。

　そして大の字に倒れ、空を見つめた。黒雲が消え、テイル彗すい星せいが滅び──青さを取り戻した、雄大な空を。

「……お前の言うとおり、聞き癖ぐせがついてしまっていたようだな……。目が覚めたよ」

　再び立ち上がったその時──もう、若武者の目に曇りはなかった。

「私では、お前のライバルたりえないのかもしれない。記憶の片隅に留とどまることもなく、この戦いが終わったら忘れ去られる存在なのかもしれない」

　トゥアールも苦笑するわけだ。俺は何回、こいつらのお悩み相談を買って出ているんだか。

　イエローとブラック、アナザーブルーの戦いを順に見やりながら、ヴァイラスワンギルディは再びレイピアを手にする。

「あらためて、テイルレッドよ。お前の胸を借りたいが……構わぬか！」

「ああ……いくらでも貸してやる!!」

『いやそんな羨うらやましいこと駄目ですよレッド!?　むしろ帰ったら私に貸してください!!』

　トゥアールの通信が遅れて聞こえてくるほどの高速で、ヴァイラスワンギルディは俺に猛襲する。その剣けん閃せんは、もはやさっきまでの奴やつとは別人だった。



　増殖体など関係なく、ヴァイラスワンギルディの後ろに多くのエレメリアンの姿が見える。

　こいつが師と仰ぎ、こいつに思いを託した、たくさんのエレメリアンたちが。

「テイルレッドがいるという天国であり、テイルブルーがいるという地獄……本当に歯応ごたえのある世界だ」

　こいつはかつて、俺が憎いと言った。俺のツインテールを真まっ直すぐに見れないと。

　だが今、こいつの目はしっかりと俺のツインテールを見つめている。

「私たちは誰だれ一人後悔してはいない。テイルブルーの言う通り、侵略者の勝手な言い分だが……それでもあえて言おう」

　世界がカタストロフの前兆に見舞われていなければ。

　戦闘中に動揺を誘う出来事さえなければ……こいつは、もっと俺たちを追いつめていたかもしれない。

　しかし結果論だが、その動揺を乗り越えたことで、この戦いの間にさらに強くなったのかもしれない。

「私たちはこの世界にやって来て、本当によかった」

　ただ一つ、言えることは……次の一撃が、決着となる。奴やつの雄お々おしい貌かおが、それを物語っていた。

「さあ、決着をつけよう!!」

　ヴァイラスワンギルディはレイピアに属性力エレメーラを集中し、光の刃やいばをさらに巨大化させた。

　それはやはり、俺の完全解放ブレイクレリーズにそっくりな技。俺を倒すために磨いた、剣の極致だった。

「完全解放ブレイクレリーズ！　テイルカリバー究極装填アルテイメツトモード!!」

　同時に放たれる、次元を斬きり裂さく斬ざん撃げき。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

　魂たましいの叫びとともに、剣を振り下ろすヴァイラスワンギルディ。

「これがドラグギルディを倒した！　ファイナルブレイザーだ──────っ!!」

　黄金の光波剣と白い光波剣が、互いの中間で激突する。

　奇くしくも宿敵との二度目の決戦──ゴッドドラグギルディとの技の撃ち合いと同じ構図になる。

　そして、その結末も。

「ぐわあああああああああああああああああああああ!!」

　叫びと、ヴァイラスワンギルディの身体からだが、光の中に呑のみ込まれていった。

◇

「……強いな、お前は……。心、技、体……全てにおいて私の負けだ。完敗だ……」

　ヴァイラスワンギルディから元のスワンギルディの姿に戻り、地面に倒れ伏す。

　俺もスワンギルディの傍そばに立ち、ノーマルチェインへと戻った。

「俺だって、まだまだ未熟だけど……ツインテールへの愛だけは絶対に揺るがない。それが、今のお前と俺との差だ。これだけは自信を持って言える……俺のツインテールは、最高だ」

「なるほど。自分は最高だと他人に認めてもらえなくば自信がなかった私と、胸を張ってそう言えるお前……この決着は必然だった

か……」

　スワンギルディは、清すが々すがしい表情で自じ嘲ちようした。

「また、負けた……。私は本当に、負けてばかりだ……」

「お前、最後の試練とやらは明らかに修めきれてなかっただろう」

　アポロギルディたちと戦った俺だからわかる。こいつは二つの属性を等しく極めることはできていなかった。だから、小手先の技に頼ってしまったのだ。

「言っただろう。私は、基地と仲間たちを守りたかった。自分に自信が持てなくとも、お前たちに挑むべきは今だったのだ」

　そうだったな。万全の準備ができていなくても戦わなければいけないのは、俺たちも同じだ。

　今日、突然世界のカタストロフを目まの当たりにしたように。

「いつもテイルレッドの映像を見て、馬ば鹿かのように騒ぐ。幸せな時間だった。自分たちが侵略者であることを、忘れてしまいそうになるほどに――」

「スワンギルディ……」

　スワンギルディの身体からだに、変化が起こり始めた。

「私は未熟者なのでな、色々お叱しかりを受けもしたが……そのどれもが、温かい厳しさだった」

　今までのエレメリアンの、どの消滅とも違う。

　爆発するでもなく、粒子となって果てるでもなく……ただ、周囲の空間に同化するように消えていく。

「聞いているか？　テイルレッド……。どうせ、ツインテールのことで頭がいっぱいなのであろう」

「聞いてるよ。ツインテールのことで頭がいっぱいなのは、そのとおりだけどな」

　スワンギルディは俺の答えに苦笑すると、

「……私は、力を出し尽くした。少し、入院が必要なようだ……」

　その声もまた、少しずつぶれ始めた。すでに、首から下は全て透過してしまっている。

「もし、退院することができたら……また、戦おう。テイルレッド……」

　別れの言葉も、少し師の……ドラグギルディのそれを彷ほう彿ふつとさせる。

「誰だれも巻き込まないって誓うなら──」

　だったら俺の言葉も、その時と同じだ。

「お前がツインテールを愛する限り、いつでも相手になってやる。ゆっくり療養しろ……」

　スワンギルディは微ほほ笑えみを口くち許もとに湛たたえ、空間に溶け込むように姿を消していった。

　退却でも、消滅でもない。

　奴やつがどうなったのかは、誰だれにもわからない。

　けれど最期は、怒ど濤とうの人生の全てを振り絞り、満足をしたように見えた。

　自分は忘れ去られる存在かも、なんて──悲しいこと言うんじゃねえよ。

　お前みたいにしつこい奴、忘れたくったって忘れられるわけないだろ？

　俺も、テイルレッドが世界から忘れられるかも──なんて弱音を吐

いたけど、もう迷わない。俺のツインテールがこの世界に生きた証あかしを、しっかりと刻むよ。

　だから……またな。スワンギルディ。

「やりましたわね、レッド……」

　イエロー、ブラック、アナザーブルーがやって来た。

　増殖体との戦闘で、皆かなり疲ひ弊へいしているようだ。

「……ここまで世界に影響が出始めた以上、覚悟を決めなきゃいけないな」

　それでも俺は、そんなみんなに厳しい決断を伝えなければならなかった。

「明日、アルティメギル基地に突入しようと思う。みんな……今日のうちに、準備を整えておいてくれ」

属性玉 －設定資料－ 07

19 邪険属性（クルール）

持ち主 カクタスギルディ

まるで存在を無視するかのように、物質を感知させなくすることができる属性玉。人物にも、武器にも使用可能。微弱な認識攪乱の一種のため、探知に全力を注がれるとすぐに気づかれてしまうが、戦闘中に罠として使用することが容易のため、使用頻度は多い。

20 匂い属性（フレグランス）

持ち主 ラフレシアギルディ

全身の強化をもたらす属性玉だが、本来その効果は気合いを入れる程度の些細なもの。ただしその気合いが常人離れしているテイルブルーと極限まで相性が良く、属性玉多数同時発動の際には切り札の一つとして組み込むことが多い。生身の愛香の危機を救ったこともある、不思議な属性玉でもある。

21 被虐属性（マゾヒスティック）

持ち主 マンドラゴラギルディ

防御特化の身体強化をもたらし、使用者の耐久力を高める。本来なら属性玉の同時使用で有用な能力だが、他の属性玉と反発しやすく、包容力のある使用者でなければ使いこなすのは難しい。イエローでも苦労したようだが、アナザーブルーはしっかりと扱えていた。

第六章

突入、アルティメギル基地。

もっとも大きなカタストロフである、テイル彗すい星せいの崩壊が引き金となったのかは定かではないが──総そう二じたちの世界のツインテール超常現象は、一時的に収まった。

しかし明日にでも再び火山が噴火し、隕いん石せきが墜ちてこないとも限らない。

総二は仲間たちに基地突入の意思を伝え……皆も、これを了承した。

最後の夜。

愛あい香かはトゥアルフォンを使って、総二にこれから二人で逢あいたいとメッセージを送った。

突入前に時間を取って欲しいという、前々からの希望通りに。

自宅の玄関を出た愛香は、隣の総二の家の様子を窺うかがう。

今やすっかり客によりセルフ運営が板についた喫茶店「アドレシェンツァ」も、夜にはちゃんと灯ひを落としている。

二階にある総二の部屋の窓からは、灯りが漏もれている。

愛香は総二が降りて来るまで、自分の家の前で待つことにした。

「……総二様の今日のこの時間は、大変なプラチナチケットだと思うんですけど。愛香さんが独占するつもりですか」

声に反応して横を向くと、いつの間にかトゥアールが立っていた。

憮然とした表情で腕組みをし、電柱に背をもたれている。

人の気配にはかなり敏感な自分にも察知させることなく接近するのだから、トゥアールは侮あなどれない。

「お願いトゥアール……今日だけは、あたしに時間をちょうだい。じゃないとあたし……後悔で、明日ちゃんと戦えない……」

愛香は直向きな眼まな差ざしでトゥアールを説得する。

「それはみんな同じですよ。みんな不安で、みんな総二様と一緒にいたい。そしてみんな──思いを遂げたいんです」

「わかってる。わかってるよ。だけど……」

「じゃあ、約束してください」

　トゥアールにそう前置きされ、愛香は小さく頷うなずく。

「総二様の童貞だけは、私に残しておくと。それで──許してあげちゃいますっ☆」

　トゥアールは持ち得る限りのキュートさをウインクに託したが、愛香にはまるで効果がなかった。それどころか、貫ぬき手てを鳩尾みぞおちに決められ、「ぐぼあ」と呻うめく。

「何度同じこと言えば気が済むのよあんたは！」

「それが私の悲願なんですから何度でもいつまでも言いますよ!!」

　愛あい香かは大きく溜ため息いきをつき、総そう二じの部屋を見上げた。

「ホント、全然変わらないんだから……。あんた、この家に初めて来た日、未み春はるおばさんになんて言われたか覚えてる？」

「童貞食いたくてムラムラしてる節操無しの女の目をしてる──でしょう？　最高の褒ほめ言葉です。もっとも私はちゃんと、『総二様の童貞』と補足しましたが……」

　多少の皮肉を込めて言ったつもりだが、トゥアールはむしろ嬉うれしそうにそう返した。

　苦笑する愛香の前で、トゥアールは不意に真剣な表情になった。

　折しも吹いた夜風が、髪の毛を優しくなびかせる。

　月明かりに銀髪が照らされて煌きらめき、まるで女神のよう。

「愛香さん。私──今も、総二様の童貞食べたいです。ムラムラしてます……」

　愛香チョップが脳天に炸さく裂れつし、地面を転がる銀髪の女神。

「切ない表情で馬ば鹿かすぎること言ってんじゃないわよ！　ＴＰＯ弁わきまえろっての!!」

「ＴＩＭＥもＰＬＡＣＥもＯＣＣＡＳＩＯＮも全て弁えた上で総二様を押し倒したいっつってんですよわからない人ですねえ!!」

　近所迷惑も考えずに夜の歩道で騒ぐ二人。

　もっとも、いくら総二の部屋が防音改造されているとはいっても、それ以外の部屋での騒ぎが筒抜けな以上、この二人の仲良しぶりはご近所様にも周知の事実なのだろう。

　一つ気がかりだとすれば、総二のことを小さい頃ころから知っているご近所の皆様に、女の子二人で「総二の童貞食いたい」「食わせるか」と喧けん嘩かしているのを聞かれているかも知れないことだが。

「わかりました！　私はお馬鹿でいやらしくて結構です！　愛香さんはそういうことしないんでしょうから！　私は愛香さんとプラトニックな時間を過ごして帰ってきた総二様とあらためて逢あい引きさせていただきます!!」

「いや、それは……その……何か起こるかどうかはあたしもわからないし、そーじもそれを望んでたら……」

　愛香は指をつつき合わせ、もじもじしながらトゥアールを見る。

「セックスしたいならはっきりそう言ったらどうです女め々めしいですねえ!!」

「ストレートに言うなアホオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「あ゙————背骨が真まっ直すぐになるうううううううううう!!」

　はっきり口にするトゥアールに関節技を仕掛ける愛香。

「だいたい、女が女め々めしくて何が悪いのよ……!!」

「明日は私も戦うんです！　体力を消しよう耗もうさせないでください!!」

　背中合わせになって地面にへたり込み、息を荒らげる二人。

　ふと見上げると、二階の総そう二じの部屋の明かりが消えたところだった。

「……さあ、総二様が来ますよ」

　白衣のお尻しりを手で払って立ち上がると、トゥアールは喫茶店横の勝手口を見やった。

「うん……」

　トゥアールに促うながされ、愛あい香かも立ち上がる。

　勝手口から、窮屈そうにもぞもぞと出てくるシルエット。

「遅くなってごめん、愛香」

　総二の両脇わきには──慧え理り那なとイースナが引っ付いていた。

　あんぐりとする愛香とトゥアールを余よ所そに、総二は申し訳なさそうに笑う。

「慧理那とイースナもついていきたいって言って譲らなくてさ。みんなでお喋しやべりでもして過ごそうか？」

愛香は白目になり、口角を吊つり上げる。

「い」

「い？」

口籠ごもる愛香に、聞き返す総二。

「いいわけあるかああああああああああああテイルオン!!」

テイルブルーに変身した愛香は、総二を小脇に抱かかえると、髪紐属性リボンを発動。

フォースリヴォンから翼を出現させ、その場から飛び立って行ってしまった。

「観み束つか君が攫さらわれましたわ――っ!?」

慧理那の叫びが夜空に吸い込まれていく。

「い、いいの……？　トゥアールさん……」

イースナがトゥアールの白衣の裾すそを引っ張る。

「よくはありませんよ……」

トゥアールは溜ため息いきをつき、青い残光を見送った。

◇

俺が愛香に連れてこられたのは、今日スワンギルディと戦いを繰り広げた山だった。

着地し、テイルブルーから変身解除すると、恨めしげな目で俺を見てくる愛香。

「どうしたんだ愛香、突然こんなことして」

「結いわ翼ばね唯ゆ乃のの真ま似ねしただけよ！　あたしとの時間

作れっつったんだから、ちょっとでも二人っきりになりなさいっての!!」

「ごめん……」

　そういえば、唯ゆ乃のがよくやる手だな、これ。

　突然どこかわからない場所に連れてきて、そっから自分とデートしろって言うか決闘しろって言うかの二択なんだけど。

　冷たい夜風が、愛あい香かのツインテールをなびかせる。

　俺たちは二人同時に、夜空を見上げた。

　その雄大な美しさに、愛香も気性を鎮めていく。

「……綺き麗れい。たった数時間前まで地球が滅亡する瀬戸際だったなんて、信じられないくらい」

「確かにここは、夜空の星が一層はっきりと見えるな」

　無数の星々が、競うように瞬またたいている。満天の星空だ。

「ツインテールの彗すい星せいが落ちてくるなんて……来るとこまで来た感じ」

「悪かったな。あの時は、取り乱しちまって」

「あんなん取り乱したうちに入んないでしょ。最近そーじにばっかり負担かけてたから、今日はあたしが頑張った……それだけ」

「でも、大丈夫か。また属性玉エレメーラオーブ七つ同時発動したんだろ。前は何日も筋肉痛が取れなかったって……」

「ヴァルキリアギルディの時よりは負荷の少ない属性玉エレメーラオーブだったから……って、もー！　戦いのことはいいの!!」

　強引に話題を終わらせる愛香。

　しかし、そこからしばらくの間、俺たちは無言だった。

「うん。いや、あたしも……何を話すか、全然考えてないんだけどさ」

　結局、愛香はバツが悪そうにそうこぼした。

「あっ……ツインテール座だ」

　俺は夜空にツインテール型の星列を見つけ、思わず指を差した。

「ないでしょそんなの!?」

「いや、前に俺が名付けたんだよ。見えるだろ？」

「えぇ……どこ……？」

　俺の指差す先をしっかりと見ようとしてか、愛香がどんどん近づいてくる。

　やがて肩が触れ合い、振り向いたお互いの視線が巡り逢あう。

「あっ……」

　愛香が慌あわてて飛び退のいた。

　何だよ、もう少しでツインテール座の位置を教えてやれたのに……？

「っ……」

　愛あい香かのツインテールが震ふるえる。小さく自分の身体からだを抱き締めていた。

　もう春も近いが、夜はまだ冷える。

　俺は自分のコートを脱ぐと、愛香の肩にかけてやった。

　ツインテールを掬すくい、コートの外に出す。ツインテールもコートで温めてあげるべきかそうしないべきかは、判断に迷うところだ。

「ありがと」

　コートの襟えりを立て、そっと顔を寄せる愛香。

「そーじの匂いがする……」

　そんなことを言われると、無性に恥ずかしくなる。

「俺、そんなに汗かいたかな……!?」

「違うってば。……そういうずれたとこ、昔っから全然変わらないよね……」

　愛香はスカートを手で押さえ、地面に腰を下ろした。俺もそれに倣ならい、隣に座る。

　そういえば今日の愛香、スカートなんだな。制服以外でスカートって、結構珍しいかも。

「……でも、一番変わらないのは……優しいところ。そーじは昔からずっと、優しかった。あたしみたいながさつな女にも、さ」

「俺だって昔は、愛香の胸いじってただろ」

「そうだっけ……？　あたしの悪口なんて、他にいくらでも言えたでしょ」

「愛香にやり返したくても、胸いじるくらいしかできなかったんだよ。他が完かん璧ぺきだから」

　愛香はコートの襟に顔を埋うずめ、俺に手の平を突き出してきた。

「待って……あたしの胸いじるとか連呼しないで！」

「本当のことじゃないか……？」

　コートの襟元から目だけを覗のぞかせ、俺の方を見てくる愛香。

「最近、全然言わなくなったじゃん、胸のこと」

「そりゃ、愛香が胸のことそんなに気にしてたなんて……ツインテイルズになるまで知らなかったし」

「ツインテイルズにならなかったら……何も変わらなかったかもしれないね、あたしたち」

　愛香は夜空を見上げ、思い出を懐なつかしむかのように言った。

　そして何かを決心するように深く目を閉じ──やがて、静かに振り返った。

　その細指がツインテールのリボンにかけられ、音もなく引き抜く。

　愛香は左右両方とも、ツインテールを解ほどいてしまった。

「ああああああああああああ愛香!?」

「だから何で世界の終わりみたいな顔してんのよ、違うから!!」

　確かに俺は今、テイル彗すい星せいで地球が滅亡の危機に瀕した時よりも絶望的な顔をしていたかもしれない。

「……ツインテール、結んでよ。どのぐらい上達したか、また見てあげるから」

　愛あい香かは俺にリボンを差し出してくる。

「ああ、そういうことか……!!」

　俺はほっと胸を撫なで下ろした。

　決戦の前に、ツインテールを結ぶ技量の卒業試験をするってことか。

　愛香は、俺の一番のツインテール師匠だ。

　愛香に認めてもらえるなら、これ以上の景気づけはない。

「じゃあ……」

　俺は愛香の後ろに回り、髪に手を伸ばす。

「結ぶのは、前から」

　牽けん制せいするように、愛香が言ってきた。

「前から!?　厳しいな……」

　後ろからの方がやりやすいし、何より見られていると緊張するんだが。これも試験の一環ってことか。

愛香の前に立ち、愛香にじっと見られながら、髪の毛を手に取る。

そこから何分かかっただろう……やっとのことで、左右のツインテールを結び終えた。

しかし愛香は一房手に取ってーいち瞥べつすると、

「もっと速く」

すぐに、ツインテールを解ほどいてしまった。

「わ、わかった」

さすがにもたつきすぎたか。納得の駄目出しだ。

しかし、その次も──

「もっと丁てい寧ねいに」

「わかった……」

今度は左右のバランスが悪い。緊張するな……リラックスしないと。

そう思っても、愛香と向き合ってツインテールを結んでいると、どうしても肩肘ひじを張ってしまう。だから俺は、ツインテールに神経を集中することにした。

愛香の吐と息いきを感じる。もしかしたら、俺の吐息も交じっているかもしれない。

ツインテールを結ぶことに夢中になっていたせいか、いつしか俺は愛香に自分の身体からだを密着させていた。厚着をしていても互いの体温が感じられるほどに、身体を寄せ合う。

愛香の顔が近い。濡ぬれた瞳ひとみが、俺をじっと見つめている。

「どうだ」

「まだまだ。あたしが満足するまで」

「わかった。何度だって結んでやるよ」

　今の俺なら、絶対に愛あい香かを満足させてやれるはずだ。

　結んで、解ほどいて。

　結んで、解いて。

　何度繰り返しただろうか。愛香の髪の毛に、負担がかかっていないだろうか。

　そう思いながら、また愛香の髪の毛を掬すくった時──俺の手の甲に、雫しずくが落ちた。

　雨……？　違う。

「……っ……」

「……愛香……」

　愛香が──涙を流していた。

　涙は止とめ処どなく頬ほおを伝い、肩が揺れる。

「なんで、こんなので嬉うれしいのかな……」

　愛香は声を震ふるわせながら、髪にかけられていた俺の手を握る。

「全然、大したことしてもらってないのに……。子供のお遊びみたいなことしてるのに！」

　そして、溢あふれる感情を一気に弾はじけさせた。

「あたし今、すっごく幸せだよぉ……!!」

　自分の腕で涙を拭き始めた愛香。

「……こんなことで幸せだってんなら、いつでも結んでやるよ。愛

香のツインテール」

　その腕を摑つかみ、俺は自分の指で愛香の目め許もとをそっと拭ぬぐった。

「……ずっとだよ。ずっと……。あたしが満足するまで。何十年でも……」

「その代わり、俺が結ぶのはたまに、な。やっぱり愛香は、愛香が結んだツインテールが一番いいよ」

　最後の結びは会心の出来だけど、それでも普段の愛香が自分で結んだツインテールに比べると、ちょっと物足りない。

「俺はこれからも、愛香が結んだツインテールが見たいんだ」

「うん。わかった──」

　コートを地面に落とし、愛香がもたれかかってくる。

「……そーじっ……!!」

　そして──少しだけ背伸びをして。

　自分の唇くちびるを、俺の唇に触れ合わせた。

　熱い溜ため息いきが、頬をくすぐる。

　いったん唇を離した愛香は、濡ぬれた瞳ひとみで俺を見つめる。そしてもう一度、今度はより強く押しつけてきた。

　唇くちびるを奪う、という表現があるが……まさに、為なす術すべも無く奪われるかのようだ。

　力が抜けた俺は思わず後ろによろめきそうになったが──愛あい香かは俺の腕を摑つかみ、身体からだそのもので口付け合うように抱き寄せる。



　絶対に逃げられないな、などと見当違いな感想が、不意に脳裏をよぎった。

　柔らかな体温が、吐と息いきが、交じり合う。どちらのものかわからなくなるほどに長い時間、触れ合っていたと思う。

　あるいは、ほんの一瞬をそう感じていたのかもしれない。

　ようやくのことで身体を離した愛香は、何かを待つようにちらちらと俺を見てきた。

「な、何か言いなさいよ!!」

「……あ、うん……」

　何を言っていいかわからない。正直、すごく混乱している。

　けどこれって……多分、ロエルとリルナが言ったとおりなんだよな。

　決戦の前とかには、キスをして送り出すのが普通だって。それで恥ずかしがったりするのは、遅れてるって。

　じゃあ、ここで俺が照れたりすると、愛香に悪いよな……。

「──ありがとう」

　だから俺は、精一杯の感謝の気持ちを伝えた。

「え、ありがとうなの!?」

　愛あい香かは口くち許もとを手で押さえながら、大おお仰ぎょうに仰のけ反ぞった。

「何この爽さわやかな顔……こいつ……完全にキス慣れしちゃってんじゃん！　ああもう、あたしが一番遅れてるから、めっちゃ頑張ったのに……!!」

　背後の草むらが震ふるえ、愛香が即座に振り返る。

　まさかクマなんてことはないだろうが……多分出てきても、愛香は撃退するつもりだろう。

「……げ」

　低く呻うめく愛香。

　草むらの中から慧え理り那なが、イースナが、そしてトゥアールが出てきた。

「慧理那……イースナ……トゥアール……!?」

　俺が思わず名前を呼ぶと、恐縮して肩を竦すくめる慧理那。

「す、すみません、観み束つか君……津つ辺べさん……」

　俺と愛香の元へ、躊躇ためらいがちに歩み寄ってくる。

「……どうせみんな来ると思ってたから……だいぶ先走っちゃったのに……」

　大きく息をついて額ひたいを押さえる愛香。

　しかしイースナはにへらっと笑うと、

「ホ、ホントは、もっと早く来てた……。私と、慧理那が、出ていこうと、したら……トゥアールさんが、『もう少し待ってあげて』って……」

「あ――――――――――言ってなあ――――――――いそんなこと私は言ってなあ―――――――――――い!!」

　イースナを後ろから抱き締めるようにして、両手で口を塞ふさぐトゥアール。

　そのまま回転し始め、イースナも楽しそうだ。

「勘違いしないでください！　今まで愛香さんを力で追いつめようとしても効果がなかったから、優しさで懐柔するプランに軌道修正しただけです!!」

　トゥアールは愛香が何か言う前に、言葉の散弾で制圧を試みた。

「そ、そうです！　今の私こそがアンチアイカシステム一八号！　その名も〝アイカニヤサシクスールトゥアールチャン〟です!!」

「……確かに、今まででで一番効いたわ。相変わらずネーミングセンス最悪だけど」

　愛香に苦笑され、顔を真まっ赤かにしてそっぽを向くトゥアール。

　慧理那は愛香を横目で見ながら、両手で頬ほおを押さえて恥ずかしそうにする。

「す、素敵でしたわ津辺さん……あんなに情熱的に、唇くちびるを奪って……わたくし、この寒空でも服がいらないくらい、昂たかぶってしまいましたわ……」

「言わないで――っ！　雰囲気に流されたのよ！　ツインテール座のせいよ!!」

　……？　よくわからないけど、愛あい香かにもツインテール座が見えたのかな。

　あと、「いらないくらい」と例え話で言ったはずなのに、慧え理り那なの服がすでに目に見えていくつか足りない。

「津つ辺べさん。わたくしたち、どうしても……」

　しゅんとする慧理那に皆まで言わせず、愛香は苦笑した。

「いいわよ、あたしだってみんなの気持ちも考えないで、一人で突っ走ったんだから。……みんな、不安だもんね……」

　トゥアールは、愛香、そして慧理那とイースナへと歩み寄り、四人で並び立った。

「これで四人とも総そう二じ様とちゅーして、互角です！　後は決戦の後で……そうでしょう？」

「……そうね。今日、勇気を出してよかったわ。まだまだ思いは伝え足りないけど……今は、これで十分」

　愛香に慈愛に満ちた微ほほ笑えみを向けた後、トゥアールは俺へ

と野獣じみた眼光を注いできた。

「さっ、約束です。愛香さんたちはお家に直帰してください、私はツインテール座の下で……つまり野外で悲願を成就します」

　トゥアールが凄すさまじい全身の撥ばね条ねを発揮して空高く跳躍し、俺に飛びかかってくる。

「お前がツインテール座になれ――――――――――――――!!」

「すたああああああああああああああ!!」

　そしてトゥアールは愛香の蹴けりがカウンターで決まり、夜空の彼方かなたへ飛んでいくのだった。

　敵の基地への突入を明日に控えた、最後の夜。

　俺たちはどこまでも、いつもの俺たちだった。

◇

　決戦の日の朝を迎えた。

　俺と愛香、トゥアール、慧理那、イースナ、桜さくら川がわ先生とメガ・ネは、基地のコンソールルームで突入の時刻を待っている。

　時間は八時前――出撃まで、あと数分。

「未み春はる将軍……この基地を頼みます。超次元に存在するアルティメギル基地は、私の衛星でモニターすることができません。おそらく、私たちの通信もこの基地には届かないと思います」

「わかったわ。とにかく……みんな、危なくなったら撤退して。世界のことより、まず自分の身体からだのことを一番に考えて」

　今日の母さんは、女幹部コスではない。

「ヒーローにこんなことを言うのは烏お滸こがましいかも知れないけど……それが親の思いよ」

　それはきっと……観み束つか総そう二じの母親として、俺たちを送り出すために。

　今まではエレメリアンの襲来を懸念して迂う闊かつに動けなかったが、あれ程の大規模なツインテール超常現象が次にいつ起こるともしれない以上、一刻の猶ゆう予よもならない。

　今日、エレメリアンが一体でもこの世界に侵攻してくる前に、俺たちが基地に乗り込んで壊滅させる。それしか方法はないと結論したのだ。そのための、早朝の出撃だ。

　俺は感傷に耽ふけるように、コンソールルームを見渡した。

　俺の家にトゥアールが初めてやって来た日。

　彼女はたった一晩で、この巨大な地下基地を造り上げてしまった。

　そして俺たちはその後の長き戦いで、いつもこの基地に助けられてきた。

　トゥアールが衛星を通じて戦場をモニターし、俺たちに的確なオペレートをしてくれなかったら、ツインテイルズはここまで戦ってこれなかったかもしれない。

　俺たちはこれからこの基地の庇ひ護ご下を離れ、敵の基地へと突入する。

『八時、一分前をお知らせします』

　とぅあるんがテーブルの上に浮かび、設定した出撃時刻を知らせてくる。

　俺は瞑めいして深呼吸し。

「――――行こう、みんな！」

並び立った仲間たちへと、号令をかけた。

それぞれのテイルブレスと神眼鏡ゴツドめがねを構え、俺たちは一斉に叫んだ。

「テイルオン!!」

観束総二が。

「テイルオン!!」

津つ辺べ愛あい香かが。

「テイルオン!!」

神しん堂どう慧え理り那なが。

「テイルオン!!」

トゥアールが。

「グラスオン!!」

イースナが。

「テイルオン!!」

桜さくら川がわ尊みこと先生が。

それぞれの変身デバイスが放つ六色の光が絡みあい、弾はじける。

変身が完了した六人のツインテイルズに、メガ・ネが……テイルシルバーが並び、七人のツインテイルズが結集する。

母さんは俺たち全員を嘱しよく目もくすると、一度だけ、深く頷うなずいた。

ブラックは少し考えこむと、

「そろそろあれじゃな、同時変身の時はわらわもテイルオンに合わせようかのう」

　メンバーが二人増えたことで疎外感を感じるようになったのか、そんなことを提案した。

「あんたそれでいいの、眼鏡属性グラスなのに」

「わらわは眼鏡属性グラスを持ったツインテイルズじゃ。誇りと愛が揺るがなければ、何も問題なぞないわ!!」

　胸を張ってブルーに答えるブラック。

　もう、こうやって意を決して全員で同時変身することはないかもしれないけど……その時は、一緒にテイルオンって言おうな。

「ゲートはすぐに消失するはずですが、万が一のことを考えて、隔壁で遮断します。未み春はる将軍……」

　トゥアールが懸念しているのは、ゲートを繋つなげた瞬間、エレメリアンがこちらの基地に侵入してこないかということ。

　だからいつも現場への転送ゲートを展開している区画を何重もの隔壁で閉鎖し、物理的に遮断するというのだ。

「ええ。頑張って、みんな!!」

　母さんに見送られ、俺たちはコンソールルームを飛び出した。

　転送ブロックにやって来ると、トゥアールが俺に合図を送ってきた。

「お願いします、レッド!!」

　俺は肌身離さず持ち続けていたディスクを取り出した。事前にイースナから使い方は聞いている。

　属性力エレメーラを込め、宙に投げる──すると、俺たちが普段使っているのとそっくりな転送ゲートが形成された。

「行くぞみんな！　決戦だっ!!」

　先陣を切って俺レツドが。ブルーが。イエローが、ブラックが、

シルバーが。

　アナザーブルーが。そして、ホワイトが。

　俺たちは、ゲートの中へと飛び込んでゆく。

　この世界を侵攻し続けたアルティメギルの基地へと突入し、全てに決着をつけるために。

◇

　ゲートを抜ける直前、時空の狭はざ間まで、俺たちはアルティメギル基地の全ぜん貌ぼうを見た。

　ツインテールの形にも似た、悪の居城。エレメリアンたちの本拠地に相応ふさわしい見た目だなと、俺は場違いにも感心してしまった。

　床から少し上の位置にゲートが繋つながり、俺たちは次々に着地していく。

　全員が抜けた瞬間、転送ゲートは、あっさりと消え去った。

　これで俺たちは──決着をつけるまで、元の世界には帰れない。

「……ここが、アルティメギル基地……」

　俺は慎重に、辺りを見渡した。

「……何か、想像してたより普通のとこなんだけど」

　ブルーもつい、そんな感想が出てしまったようだ。外から見たほどには、内部は異質な感じはしない。

「わたくし、生物の体内のようなグロテスクな見た目を想像していましたが……人間の世界にある普通の建物と変わりがありませんわ」

　イエローの言うとおり、少しばかり雰囲気を感じる程度の、ごく普通の建物のようだ。

「敵を褒ほめるべきではありませんが……掃除が行き届いていますね」

　メイド目線で、基地の感想を口にするアナザーブルー。

　ここは、トゥアールの地下基地と同じだ。材質こそ超金属や未知の素材で溢あふれているが……見た目はオーソドックスなビルの中のようなんだ。

「いや……何も変わっておらぬ。ここは、間違いなくアルティメギル基地じゃ」

　ブラックが、感慨深げに視線を移ろわせる。

「せやね。なんや、懐なつかしいなあ……」

　メガ・ネも、つい感傷に浸ひたっていた。

「ブラック。まず、この基地の簡単な構造を教えてください」

　ホワイトは早速、基地内部の分析を始めているようだった。

「この基地も、ツインテイルズの地下基地とだいたい造りは同じじゃ。まずこの入り口から始まり……長い廊下を抜け、大ホールへと辿たどり着く。そこまでにある部屋は、全て無視して問題ない」

　イースナが指差すが、廊下は入り口のここから突き当たりが見えないほど真まっ直すぐ延々と伸びていた。

「大ホールを抜けてその先にある居住区を過ぎると、一番奥に巨大な格納庫がある。やはりツインテイルズの地下基地と同じでな、転送ゲートを使う時など、別世界に向かう場合は大抵そこを起点に使っていた。そしてわらわが首領の間へ向かう時は……必ずその格納庫から道が繋がったのじゃ」

　つまり、首領の間へ向かうためには、まずこの基地の最奥にある格納庫へ向かえばいいってわけだ。

「了解しました。私がマッピングをしていきますが、別れ道などは

全てあなたに指示してもらいます。道案内は頼みますよ、ブラック！」

「うむ、任せておけ！」

　ホワイトに請われ、ブラックはしっかりと頷うなずく。

　俺たちはブラックの案内に従い、全員で走りだした。

　長い長い廊下を進むと、ようやくの突き当たりで道が左右に分かれていた。

「おい、早速うじゃうじゃ来たぞ！」

　アナザーブルーがＴ字路の左を指差す。

「「「「「モケ――――――――――」」」」」

　戦闘員アルテイロイドの大群が、廊下の先から怒ど濤とうのように押し寄せてきた。

「反対側からもですわ！」

　イエローが示した右側からも、全く同じ規模の大群が。

　行儀よく床を走ってくる奴やつらは、まだいい方だ。蟻ありの子一匹通れないほど廊下に敷き詰められた戦闘員アルテイロイドたちが、それでもなお向かおうとしてくるせいで、あぶれた奴らはイモリか何かのように壁を這はってまで向かってくる。

　戦闘員アルテイロイドたちはいつも呑のん気きで愛あい嬌きようすら感じさせ、ともすれば戦場のマスコットといえる存在だった。それが今は、黒い肉の壁となって、俺たちを食い止めようと立ちはだかってきている。

　この先の戦いの苛か烈れつさを感じさせるには十分な、厳しい幕開けだった。

「ここはわたくしが──！　属性玉エレメーラオーブ、文学属性ブツク!!」

　イエローは文学属性ブツクの効果で眼前にバイザー型のスクリーンを展開して標的をロックすると、背中の二門の陽電子砲を左右に立ち上げる。

　そして、Ｔ字の廊下それぞれの戦闘員アルテイロイド目掛け撃ち放った。

「モケー」

「モケケケー」

　唸うなりを上げる光線に呑のみ込まれ、爆散していく戦闘員アルテイロイドたち。

　僅わずかに撃ちもらした分は、同じく左右に両手を突き出したメガ・ネが、指のバルカン砲を斉射して撃墜していく。

　戦闘員アルテイロイドの大群を一掃し、一段落した瞬間。

『オニ――――――――チャン……オニ――――――――チャン……』

「何よこの媚こび媚びの声は!?」

「ああ、外敵侵入の警報じゃ……多分基地の警備担当の趣味なんじゃろう」

　ブルーがぎょっとするのもわかる。まあ俺たちツインテイルズも、ちょっと前まで「おっぱい」とかがエレメリアン出現アラートだったから、人のことは言えないが……。

　戦闘員アルテイロイドの撃破によって俺たちの存在は完全に基地内に知れ渡り、今度は左右の廊下からエレメリアンたちが続々と姿を現し始めた。

「おお……テイルレッドだ！」

「ほ、本物だ……あわわわわ!!」

　俺を視認した瞬間、露骨に動揺し始めるエレメリアンたち。

　いつまでも出撃しないで、最後まで残ってた連中だもんな……悪いが、本番に弱そうだ。

「現れたな、ツインテイルズ！　むおおおおおおおおおおおおおお!!」

　そんな中でも、雄お叫たけびを上げて突進してくるエレメリアンたちがいた。

「見ていたぞ……スワンギルディの最後の戦い!!」

　そうか……こいつらはスワンギルディの仇かたき討ちで一致団結してるってわけか。前言撤回だ。一筋縄じゃいかなそうだな……！

「俺のリクエストにもお着替えしてくれえええええい！　動物パジャマ、ぶかぶかサイズだ!!」

「いや、ここは俺の園児服しかあるまい!!」

「チアリーダー衣装に決まっておろう！　無論、両手にはポンポンをな!!」

　……ってこいつら、単に自分の好きな服に着替えて欲しいだけじゃねーか!!

　むくつけき巨漢たちが、それぞれ手に子供用の服を摘つまんで押し寄せてくる。

　突入してまだ間もないってのに、早速目め眩まいがしてきたぞ。

「くそっ……俺が、頼まれれば何にでも着替えると思ってやがるな！」

「最近のあんたの行動からすれば、自じ業ごう自じ得とくでしょうが！」

　呆あきれつつも、ブルーは俺をかばうように前に出る。

「レッドに近づくんじゃないわよ、変態ども!!」

「うわあああああああああああああテイルブルーだああああああ!!」

　かと思えば、ブルーの姿を見て急ブレーキをかける。

「ひるむな！　テイルブルーを倒して、レッドにお着替えをしてもらうのだ！」

　鳥のような姿のエレメリアンが、ごついリボルバー式の拳銃じみた武器を取り出し、構える。

　そしてブルー目掛け、トリガーを引いた。

「…………」

　ブルーの胸に当たった銃弾は、快音を響かせて弾はじかれ、廊下の壁に突き刺さった。

　五発……六発。全ての弾丸を撃ってなお、焦あせりからかトリガーを引き続けていたエレメリアンは……絶望的な顔をして銃を見つめた。まるでモンスターパニック映画のやられ役だ。

「くっ……もはやこれまで……」

　鳥のエレメリアンはこめかみに銃口を押し当て、ぎゅっと目を瞑つむる。

「いやもう弾入ってないでしょ!!」

「ぐぼう!!」

　ブルーが即座に間合いを詰め、鳥のエレメリアンをブン殴なぐる。

　跳弾と同じく壁に突き刺さり、爆散する鳥のエレメリアン。

　後ろにいたエレメリアンたちは、その光景を見て萎い縮しゆくしているようだ。

　その隙すきに、ホワイトがツインテイルズ全員に指示を飛ばす。

「基地でのオペレートができない以上、テイルギアを介しての通信機能だけが生命線です！　いいですか皆さん、この先分散しても、何かあったらすぐに連絡を！　私が、常に全員のギアの反応をモニターします!!」

　ホワイトは司令塔を買って出た。俺たちは全員、一斉に頷うなずく。

「私のテイルギアは、エネルギー配分が極めてピーキーです。申し訳ありませんが、積極的に戦闘に参加できません。幹部戦士に出くわすまでの戦いは全て、皆さんにお任せします！」

「よし、ならば露つゆ払いは私がしてやる。お前には世話になってばかりだったからな、トゥアール」

「ホ・ワ・イ・ト！　もう敵地なんですから、呼びかける時はパーソナルカラーで！　そろそろ慣れてください、アナザーブルー!!」

「フッ、了解した、ホワイト!!」

　アナザーブルーはフォースリヴォンに触れ、超重武器を手に取った。

「ウェイブメイス――!!」

　轟ごう音おんを響かせて先端が床に突き刺さるウェイブメイス。

「と、年とし増まのテイルブルー……!?」

　その迫力に、エレメリアンたちが再びひるむ。

「本家のテイルブルーが怖い奴やつら。私ならば大丈夫だろう？　かかってくるがいい!!」

　エレメリアンと戦闘を開始するアナザーブルー。

「今のうちに……こっちが大ホールじゃ！　皆、わらわに続け！」

　基地の構造を熟知しているブラックに道案内を任せ、俺たちは左側に進む。

　殿しんがりでは、アナザーブルーが反対側からやって来るエレメリアンを押し止めていた。

「現れたか、ツインテイルズ……」

大ホールが近づいた時、数体のエレメリアンが俺たちの行く手を阻はばむ。

そして、いそいそとひな壇のような物を設置し始めた。

三段あるそのひな壇に上っては並び、上っては並びできれいに整列。

まるで、合唱コンクールに参加した学生のようだ。

「テイルレッドの歌……我われらアルティメギル一同、心をこめて、歌います!!」

野太い声で、俺の歓迎ソングが展開される。

テイルレッド可か愛わいい。テイルレッド大好き。

ストレートな歌詞が、俺の精神をえぐる。

背後で断続的に聞こえてくる、アナザーブルーの戦闘による爆発音が、合いの手のようだ。

同じく精神を侵食されていたブルーだが、頬ほおを両の平手で叩たたいて気合いで正気を取り戻すと、ひな壇に整列していたエレメリアンたちを殴なぐり始めた。

「何、 厳おごそかな雰囲気で萌えソング歌ってんのよ――――――――――っ!!」

「ぐわあああああああああああああテイルレッド賛歌は国歌!!」

「むしろテイルレッド賛歌を国歌にしていない貴様たちの世界に軽く引くわ!!」

ブルーの鉄拳でぶっ飛ばされていくエレメリアンたち。

「俺のことを歌うなら……もっと歌詞にツインテールを入れろ!!」

どうしてもその点が納得いかず、俺はエレメリアンにアドバイスをした。

「ぬうう……熱き駄目出し！　プロデューサーとしても一流か、テイルレッドよ!!」

　詩のブラッシュアップは地獄でやっていろとばかりに、そのエレメリアンもブルーに蹴け散らされていく。

　俺たちは聖歌隊ゾーンを突破し、先を急いだ。

「やはりエレメリアンどもは、相当ブルーを恐れていますね。基地に乗り込まれたことで萎い縮しゆくして、力を発揮できていない様子です。この分なら、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーや首領に辿たどり着くまで、かなり力を温存できそうです」

　ホワイトは、敵が力を発揮しきれていないと分析する。確かに俺たちは、できる限り力を温存して進まないといけないからな。

　次々現れる一般兵エレメリアンたちを蹴散らして廊下を進み、やがて大きな扉の前に辿り着く。重厚な扉を見ながら、俺は呟つぶやいた。

「ここが大ホールか……」

「私たちが地下基地のコンソールルームで戦闘の会議をするように、エレメリアンたちが世界侵攻の作戦を立てる場所……というわけですね」

　ホワイトの顔つきが険しくなる。

　俺は扉に手を添えた。かなりの重さを想像して力いっぱい押したのだが、それはまるで回転扉のようにスムーズに開いた。

　円形に広がった大学の講堂……なんて喩たとえは場違いかもしれないが、ホール内はそんな見た目をしていた。

　無数のエレメリアンたちが席についており、俺たちが踏み入った瞬間に立ち上がる。

　ブルーが登壇台のような場所に歩み寄った瞬間、一体のエレメリアンが席から跳躍、轟ごう音おんを立ててブルーの前に着地した。

「我わが名は鎖骨属性クラビクルのライノセラギルディ。お前たちによって倒されたビートルギルディ様の、不肖の弟子だ」

「……！　ビートルギルディの……」

　ビートルギルディと因縁のあるイエローが、はっと反応する。

「この登壇台が何かわかるか」

　サイのようなエレメリアンは、ブルーの歩みを止めるように立ちはだかる。

「多くの名将が、ここで気け高だかく雄おゝおしく演説をなされたのだ」

　ライノセラギルディは両の拳こぶしを握り締め、筋肉をパンプアップさせる。

「そしてその度たび、俺たち一般兵は奮ふるい立った……！　その場を土足で汚けがすのは許さんぞ！　テイルブル――――――――ッ!!」

「……あんたたちの思い出を踏みにじるつもりはないけどね。その気高く雄々しい演説ってのは……あたしたちの世界を侵略するためのものだったんでしょ」

　ブルーはウェイブランスを構え、ライノセラギルディへと疾しつ駆くした。

「だったらあたしはそれを否定する……あたしの大切な人たちを守るためにっ!!」

「うわああああああああああああ……!!」

　闘志虚むなしく、一撃で致命の斬ざん痕こんを刻まれるライノセラギルディ。

「……間近で話せば……何だ、男同士の話ができる傑けつ人じんだったのではないか……。ククク、貴様を話の通じぬ凶きよう獣じゆうと思い込み、恐れていたのは……このライノセラギルディ、一生の不覚。もっと早く……出撃するのであった……!!」

「誰だれが男よ!?　傑人よ!?」

「ナイス鎖骨……。そ、その鎖骨に、珠たまの汗がたまるところを……見たかっ……」

　ライノセラギルディはブルーの首元を見て不敵な笑みを浮かべると、そのまま爆散した。

「うううおおおおおおおおおおおお！　ライノセラギルディに続け————————っ!!」

「何がテイルブルーだ！　普段モニターで見ている映像と本物とで、胸の厚みが全く変わらぬわ!!」

「俺のソシャゲのコンプ率を見てくれい！　テイルレッド!!」

　妙な要望を伝えてくる奴やつもいるが、凄すさまじい乱戦が開始されてしまった。

　何とかホワイトを温存させるよう、彼女を囲むように陣を敷いて迎げい撃げきに当たる。

「アチョ——————————ッ!!」

　軍服を着た雀のような見た目のエレメリアンが、軍刀じみたサーベルを手にブラックに斬きりかかる。

　しかしブラックはサーベルを軽く手で払うと、そのエレメリアンに詰め寄った。

「スパロウギルディ……無理をするな！　貴様は戦わずにその辺でじっとしておれ！　それとも、レッドに軍服へのお着替えのリクエストでもするか!?」

「見み損そこなうな！　確かに、軍服は着て欲しいが……!!」

　俺を未練がましく一いち瞥べつし、そのエレメリアンはブラックへとなおも向かっていく。

「スワンギルディが消えた今、私は一介の戦士に戻った！　もはや命果つるまで貴様たちに挑むのみ!!」

「そのスワンギルディは何と言ったのじゃ……貴様に生きろと言わなかったのか!!」

「っ……!!」

　気迫は感じるが……ブラックと戦っているあのエレメリアン、一ひと際きわ弱いのが一目でわかる。

　参謀タイプなのか……？　そしてブラックは、妙にそいつのことを気にかけているようだ。

「わらわには、わらわの歌と眼鏡めがねを楽しみにしてくれる、大勢のファンがいる！　だからこんなところで負けるわけにはいかんのじゃ、絶対にな！」

　ブラックは、スパロウギルディを語勢で圧倒する。

「それなのに……同じく多くの者の思いを背負っている貴様が、気安く命果つるなどとほざきおって……！　スワンギルディのために戦うなどと、笑わせるでないわっ!!」

「私は……私は、もうこれ以上、親しき戦士が消えていくのを見たくないのだ!!」

　スパロウギルディの訴えに、ブラックは唇くちびるを噛かみしめる。

「……。わらわたちの目的は、首領だけじゃ……！　戦えぬエレメリアンは、黙ってどこかに行くがよいわ!!」

　ブラックの神眼鏡ゴッドめがねが閃ひらめき、スパロウギルディの周囲を黒い渦うずが取り巻いていく。

「カオシックインフィニット！　属性力エレメーラの深しん淵えんに呑のまれよ、スパロウギルディ!!」

「ううっ……無念……私も、スワンギルディと一緒に修行をしておくのだった……!!」

　スパロウギルディの声が、暗黒の中に消えていく。

　カオシックインフィニットは、属性力エレメーラで生み出した異次元に相手を放ほう逐ちくする技。

　ほとんどのエレメリアンは、異次元そのものに呑まれて消えるが……ブラックは万一にも、スパロウギルディが生き残る可能性に賭かけたというわけか。

「さあ、闇やみに呑まれて果てるか、爆散せしめるか！　好きな方を選べい、小こ童わつぱども!!」

　ホール内のエレメリアンたちと、大乱戦は続く。

　大ホールが、爆発していく。

　椅い子すが吹き飛び、壁に穴が空あき、モニターがひび割れる。

　多くのエレメリアンたちが笑い、泣き、語り合ってきたという場所が、炎に包まれていく。

『いつもテイルレッドの映像を見て、馬ば鹿かのように騒ぐ。幸せな時間だった。自分たちが侵略者であることを、忘れてしまいそうになるほどに──』

　スワンギルディの今いま際わの際きわの言葉が、頭をよぎる。

　しかし俺は唇くちびるを噛かみしめてブレイザーブレイドを構えると、エレメリアンたちの群れへ突き進んでいった。

　恨み言なら受け慣れた。お前はそう言っていたよな、ドラグギルディ。

　俺たちもそうなるだろうぜ。今だけは……幸せな時間を、奪う側になるんだから──。

◇

　レッドたちと離れて基地の廊下で戦い続けていたアナザーブルーは、エレメリアンの襲来が一段落したところで大きく息をついた。

「観み束つかは……お嬢様たちは、先へと進めただろうか」

　相変わらず、うっかり変身前の名前を出してしまっているが……

休憩時間は、文字通り一息の間しか与えられなかった。

「年とし増まのテイルブルーを倒し、テイルレッドたちを追うのだー！」

　廊下の奥から、さらに無数のエレメリアンが押し寄せてくる。

　どこからこんなに補充されてくるのか……アナザーブルーは、軽い目め眩まいに襲おそわれた。

　しかも、まともにやっては勝てないと悟った一部のエレメリアンは、最終手段に出た。

　首領の吐息ゴッド・ブレス──今は亡きマーメイドギルディの遺産、理性と引き換えに超強化を果たす装置を自らに使用し、犬のようなエレメリアンが巨大化を果たした。

　それはアナザーブルーを標的に定め、けたたましく咆ほう哮こうする。

「……。あまり弱音は吐きたくないが……こんな得体の知れない怪物と一人で向き合うのは、怖いな……」

　アナザーブルーの頰ほおを、一筋の汗が流れる。

「観束もお嬢様も、みんなも……ずっとこんな苦しい戦いをしてきたんだな……」

　廊下の壁を砕きながら向かってくる巨大犬を前に、アナザーブルーは必死に勇気を振り絞る。世界を守り続けてきた子供たちを、今こそ支ささえるために。

「……たとえ今日帰れるとしても……有休を取っておくんだった。これは、相当後を引く疲労になりそうだ……‼」

　ウェイブメイスを旋回させて構え、アナザーブルーは巨大エレメリアンへと走りだした。

◇

　大ホールの乱戦を潜くぐり抜け、俺たちは廊下を進む。

　ここからはエレメリアンの居住区が続くようだ。本当に、構造的にはトゥアールの地下基地にそっくりなんだな。

「大分時間はかかりましたが……一般兵のほとんどがあのホールに集結していたようですね。すんなりと進めています」

　ホワイトの言うとおり、結構な距離、敵に邪魔されずに進んでいる。

　さすがにあいつらも、自分たちの生活空間で暴れるのは嫌だったのだろう。居住区には姿が見えない。

　廊下の棚には、俺の大小様々なフィギュアが飾ってある。

　壁には、俺のポスターが貼ってある。タペストリーもだ。

　俺のぬいぐるみがあったり……グッズを探せば、枚まい挙きよに暇いとまがない。

　なんて生活感に溢あふれているんだ。本当に、俺たちの世界の街並みと変わらないな……。

　ここも、生活している奴やつらの楽しげな姿が目に浮かぶようだった。

　ほんの少しだけ、ちくりと胸が痛む。

　とにかく、ここには障害は無い。このまま、最後まで行ければいいのだが。

「……アナザーブルーとはかなり離れてしまいましたが、大丈夫でしょうか」

　心配するイエローに、ホワイトが太たい鼓こ判ばんを押す。

「アナザーブルーの属性力エレメーラは健在です。大ホールが無人になったのですから、すぐに追いついてきますよ」

　ホワイトはアナザーブルーのバイタルを確認しているようだが、

アナザーブルーからは通信が来ない。桜さくら川がわ先生が、テイルギアの通信機能に慣れていないだけだと思いたいが……。

　ブラックが不意に足を止め、横を向いた。道案内ではこのまましばらく直進しろと言っていたのに、ブラックは見えない糸に引っ張られるようにして廊下を曲がってしまった。

　俺たちも立ち止まり、彼女の後を追う。

　ブラックは、突き当たりの黒い扉の前で立ち尽くしていた。

「……ブラック……」

　俺が呼びかけると、ブラックは寂しそうな笑顔で振り返る。

「ここは、わらわの部屋だったところじゃ」

　ブラックが扉に手を触れると、光のラインが幾条にも走っていった。おそらく、セキュリティが元のままだったのだろう。解錠されたようで、独りでに開いていく。

「そのまま、残しておいてくれたんじゃなあ……。馬ば鹿か共が、八つ当たりで無茶苦茶に引き裂さいてもおかしくなかろうに……」

　壁一面の、エロゲー。倉庫のように無機質に整頓されているように見えてその実、お店のような好奇心くすぐる陳列をされている。ここは、イースナのお城だ。

「……心配するな。わらわの過去は、全て絶ち切る。この部屋は、わらわの手で──」

　ブラックは神眼鏡ゴッドめがねに触れ、ダークネスグレイブを構える。

　振りかぶったブラックの腕を、ホワイトが摑つかんだ。

　そうして胸の谷間からワンドア冷蔵庫程度の大きさの箱をにゅるんと取り出すと、スイッチを入れる。箱の上部から光が飛び出し、エロゲーへと照射されていく。

　次々と吸い込まれていくエロゲーを見て、ブラックが目をしばたかせた。

「はい、メガ・ネさん。これよろしくお願いします」

　ホワイトは回収を終えたボックスを、メガ・ネのお腹なかの異次元収納箱へと仕舞う。

「あ、うん。ありがとなあ、うちやったらこんなに素早く回収でけへんかった……」

「エロゲーは回収しましたが……この部屋は、あなたの移動戦艦をそのままドッキングしたものでしょう。さすがにこの艦ふねまで持って帰るのは無理ですね」

　俺とブルー、イエローはそのやりとりを見て、思わず頬ほおを緩める。

「もしかしたらこの先、私たちが大暴れして、基地が木こっ端ぱ微み塵じんになって。そうしてこの部屋も消えてしまうかもしれませんが……。あなたが今、自分の手で壊す必要はありません」

　ホワイトは握っていたブラックの手首を離すと、その手で今度はブラックの頭をわしゃわしゃと乱暴に撫なで回した。

「行きますよ、ブラック！」

「なんじゃ、子供扱いしおって！」

　先陣を切って部屋を出るホワイト。

　イースナの宝物であるエロゲーを回収した「お姉さん」の背中に、おかんは……メガ・ネは、ぺこりと頭を下げていた。

◇

　辿たどり着いたのは、アルティメギル基地の最奥の搬入口。

　確かに、これまで見てきた基地内でも、圧倒的な広大さを誇る場所だ。

　ブラックの案内では、この巨大な移動艇を何隻も格納可能だとい

う基地最大のスペースこそが、首領の間への道を繋つなげる場所だという。

　当然そこには、最強最後の「門番」が揃そろって待ち構えていた。

「待ってたぞー！　ツインテイルズ!!」

　陽気な幼い声が、存分に反響する。

　アポロギルディ。ポセイドンギルディ。ゼウスギルディ。ハデスギルディ。

　四体の神のエレメリアンが──それぞれに不敵な笑みを浮かべている。

　おそらくはこの決戦において、最後の難関である戦士たちが。

「残存部隊のほとんどのエレメリアンと、隊長のスワンギルディは倒した！　後はお前たちで最後だ……終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー!!」

　俺が指を突きつけると、ハデスギルディが心苦しそうに目を伏せた。

「スワンギルディのことは、残念だったよ……。彼の成長を、楽しみに見守っていたのでね。もう少し時間があればと思うと、悔やまれて仕方がない」

　冥めい府ふの神が、誰だれかの死を悼いたむなんて。よほど、スワンギルディに期待をかけていたんだな。

「貴様らがここへ乗り込んできた以上、ワシらのすべきことは一つぞ」

　ハデスギルディとは対照的に、ゼウスギルディは好戦的な笑みを深める。

「ここで戦うか、わらわたちと！」

　ブラックは息巻いて一歩踏み出すが、

「焦あせんなーて。俺、女の子オトすのには順序を大事にしちゃうタイプだから」

　ポセイドンギルディがちっちっちっと指を振る。

「顔が無くなるまでブン殴なぐりたい……」

　俺の横で、ブルーがシンプルに恐ろしい願望を発露させている。顔の形が変わるまで、という脅し文句が可か愛わいく思えてくる。

「余裕ぶってるけど、あんたらあたしたちとの戦いで傷を負って弱ってんでしょ。今までのようにはいかないわよ」

　ブルーの言葉を一笑し、ハデスギルディが説明する。

「全く問題はないよ。何な故ぜ我われら四体が神と呼ばれているのか……それは、本来エレメリアンができるはずのない多重属性を完全に極めているからなのだ」

「スワンギルディとやらに聞いたか？　ワシらアルティメギルの最大奥義を」

「ああ。ツインテール・ソ・ノモーノウ……二属性を等しく極限まで極めるってな……」

　ゼウスギルディに尋ねられ、俺は頷うなずきながら応こたえた。

「あらゆる属性は最強たり得る可能性を秘めている。だが、一つの属性を極めただけでは、究極まで高めたツインテール属性に届かないのもまた、事実」

　ハデスギルディがさらに続ける。スワンギルディが最後に師事したのが、こいつだということだが……。

「そこで僕たちは、ツインテール以外で何気なく好きになった髪型を極めたのさ!!」

　アポロギルディが誇らしげに胸を張る。

　そうして終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーたちは、本人たちが生来持った属性に加えて極めた、髪型の属性について表明した。

「私が、髪の巻き巻き具合に神秘を見出す、巻髪属性ウエーブヘアーを」

　まずは、ハデスギルディ。巻き髪が好きなのか……ウェーブはツインテールにも応用できるな。イエローのツインテールの先端もそうだ。

「俺は、髪の毛を大胆にアレンジしちゃう、可変髪属性アレンジヘアー～」

　そしてポセイドンギルディ。様々なアレンジだと？　ツインテールの得意分野だ。

「ワシはもっともベーシックなロングヘアーを好む、長髪属性ロングヘアー」

　女性型のゼウスギルディは、ロングヘアーを好むという。長い髪の毛は、ツインテールの基本だ。

「僕は短い髪が好きな、短髪属性ショートヘアー！」

　そしてアポロギルディは、俺がこいつに懐いたファーストインプレッションのとおり、短髪好きなようだ。当然、髪が短くったってツインテールにはできるぜ。

　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーがそれぞれ、自分の髪の毛についての嗜し好こうを打ち明けていく。

「つまり……お前たちはそれぞれ、ツインテールにできる髪型を愛してるってわけだな!!」

　俺は四体の神へと、共感にも似た言葉を突きつけた。

「うーむ……この話を聞かな具合、恐ろしく身近に感じる……！」

　汗を拭ぬぐう仕草をしながら俺を見てくるゼウスギルディ。

「あはは、首領様に似てるってはっきり言いなよ～」

　アポロギルディは、ゼウスギルディがぼかしたと思おぼしき点を直球で言ってくる。

　確かに俺は、昔から色々なエレメリアンに言われているんだよな、首領に似ているって。

　こんな時にまで、その言葉を聞くなんて……。

「そうして、髪の属性ともう一つの属性を極限両立させた存在……私たちこそが二属性戦士ツインテールなのだ」

　ハデスギルディが、自分たちの特性を総括するように宣言した。

「お前らどいつもこいつも、普通の髪の好みではないか……ごく普通じゃ！」

　ブラックが困惑する。

　しかし、俺はその力の有り様が確かな記憶として実感できている。

　ティラノギルディも、自分自身のツインテールを覚かく醒せいさせて百合属性ガールズラブと両立させるようになってから、とてつもない力を発揮していた。

　本能でツインテールを愛するエレメリアンにとって、様々な形でツインテールを目指すことが、生物としての進化の到達点でもあるのか。

「普通だろー？　でも属性力エレメーラって、そういうもんじゃん。めちゃくちゃドマイナーだから強いとか弱いとかはない……だから強いのさ」

　アポロギルディは、エレメリアンの神しん髄ずいをあらためて誇ってくる。

　核を一つ壊されようが、依然として自分たちは強者なのだと。

　終の零星フォー・ヴアリス・ジヨーカーの戦士たちは、堂々と手の内を明かして見せたのだ。

「それーっ!!」

　アポロギルディが元気よく腕を振ると、搬入口に光を凝縮したような階段が出現した。

「この階段を登った先にあるのはツインテールパレス……首領様の間へと続く宮殿だ。さ、ついて来なー」

　ツインテールパレス──。くそ……よりによってそのネーミングかよ。俺ん家ちだってそう呼ぼうとか、母さんが言ってたんだぜ……。

　こちらの答えを待たず、勝手に階段を登っていくアポロギルディたち。俺たちも腹を括くくり、その後に続く。

「まだ歩かせるつもり？　いい加減広すぎてうんざりしてたとこなんだけど……!!」

「心配するな、あと四部屋だけだ。せっかく基地へとやって来たのだ、もう少し散策を楽しめばよいぞ」

　苛いら立だつブルーに、ゼウスギルディが意味深なことを言う。

　階段の先は転送ゲートになっていた。極彩色の光の中に、俺たちは身を投じる。

「何だ、ここは……!?」

　視界に広がった光景に、俺は思わず驚きの声を上げた。

　あまりの眩まぶしさに一瞬基地の外に出てしまったかと錯覚したのだが、それはあながち間違いではなかった。

　ゲートを抜けた先には──一面のスカイブルー。常夏の浜辺が広がっていた。

　きめ細やかな砂粒が地平の果てにまで敷き詰められ、上空には雲一つない青空。そして、その青空との境界線がわからないほどの美しき蒼そう海かい。

　遥はるか彼方かなたにかろうじて壁が目視できることで、ようやくここがとてつもなく広大な部屋であることに気づけるほどだ。

「ここが洗髪殿フアーストパレス……。これより先、首領様の間へと続く四つの部屋を、我われら終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの四体がそれぞれ守護する」

　ハデスギルディが、妙なことを説明しだした。

「ちょっ……と待って、ふぁーすと……何？」

　ブルーが顔をしかめたからだろう。ハデスギルディは指先からレーザーを照射し、目の前の空間にこの先の部屋の見取り図を投影した。

　階段で繋がる四つの部屋に、わざわざ漢字で名前が示されている。そしてその部屋には、番号を示すふりがなもご丁てい寧ねいに振られていた。

「洗髪殿フアーストパレス……手入殿セカンドパレス……結留殿サードパレス……風揺殿フオースパレス……この四つの部屋を抜けた先に、首領様の間へと辿たどり着くことができると言ったのだ」

　ハデスギルディから説明を受け、ブラックがひいっと声を上げる。

「嘘うそじゃろ……そんなダッサい名前のところに今からわらわたちは殴なぐり込まなきゃいかんというのか⁉　いやじゃー‼」

「アルティメギルは組織ぐるみで名称や技名に無意味なルビをつけるのをやめてくれませんか⁉　私がデータベース化する時に手間がかかって仕方がないんですけど⁉」

　ホワイトも切実な訴えをぶつける。

「まあ、クソダサッ、て思ってるのはわかるけどさ、首領様の趣味だから許してあげて～」

「口が過ぎるぞ、アポロギルディ！　我われらが凡夫には理解叶かなわぬだけのこと……！」

　ハデスギルディが、苦しいフォローを入れる。

「それってつまりハッちゃんも、首領様のセンスにはついてけてないってことじゃんねえ。や、もちろん俺もそーだけど」

　ポセイドンギルディほどの陽キャでも、この名前には戸惑うというのか……。

　俺は冷静に、四つの部屋の意味を考察した。

「……ツインテールのあらましを順に準なぞらえて名付けているんだろう。髪の毛を洗い、手入れをして、しっかりと結び、それが風に揺れる……。お前たちの首領なりの、ツインテールの創世記ってところか」

「なんでわかんのよ……」

　ブルーが白目で俺を見てくる。

　何な故ぜだ、俺は大真ま面じ目めに敵の思惑を看かん破ぱしたのに……!?

「マジかテイルレッド、貴様このセンスがわかるというのか……ヤバすぎて可か愛わいいな、結婚しよう」

　ゼウスギルディにこうして求婚されるのも、もう慣れたぜ。

「僕たちは、四つの部屋に一体ずつ残る。君たちは一部屋に何人でもいいからさ、よく考えて配分しなよ～？」

　挑戦的な視線を投げかけてくるアポロギルディ。

「おお。んでこの第一房、洗髪殿フアーストパレスには……俺が残るわ。ヨロシク～」

　ポセイドンギルディが、サムズアップで自分を示す。

　俺はホワイトに視線を投げる。

　全員で一体ずつを相手して、突破していくのが確実か。しかし、それでは時間がかかりすぎるか。ホワイトも悩んでいるようだ。

「そっちが一部屋一体なら、こっちもあたし一人で十分ね」

　ブルーが一歩踏み出し、ポセイドンギルディと対たい峙じする。

「ブルー……」

　俺が心配して呼びかけると、ブルーはツインテールをかき上げた。

　頼り甲が斐いのあるツインテールだった。

「心配しないで、先行って。こいつ瞬殺して、すぐに追っかけるから」

　いつの間にか、アポロギルディら残りの三体の姿が消えている。

　この先の部屋を守護するという言葉は、偽いつわりではないのだろう。

「ここは任せた、ブルー!!」

「オッケー！」

　ブルーの快こころよい返事に信頼を返し、俺とイエロー、ブラック、シルバー、ホワイトは浜辺に設置された光の階段へと進む。

　さっきのハデスギルディが俺たちに示した見取り図は、思いっきり簡略化されたものだったようだ。

　房と房を繋つなぐ階段は、とてつもなく長かった。

「見えたぞ……第二房、手入殿セカンドパレスだ!!」

　階段の先にある転送ゲートの先に、次の房の一端が垣間かいま見えている。

　やっとの思いで辿たどり着いた次の部屋は……今度は、まるで火山の噴火口だった。

　マグマ噴き上げる灼しやく熱ねつの空間で、全身がとてつもない熱波に晒さらされる。

「やっほー、待ってたぞー！　まあ、ほんとは待ちたくなかったんだけどさー」

　アポロギルディは、この四極守護に乗り気ではないらしい。

「二番目でいきなりお前か……隊長は最後の房じゃないのか？」

　俺が尋ねると、アポロギルディはわざとらしくお手上げポーズを

した。

「戦うなら、早い方がいいからね。僕はテイルレッドを指名したいけど……どうする？　他の余り物が来るかい？」

　アポロギルディが守護する部屋なら、当然タイマンをしたことのある俺が残るべきだ。俺が名乗り上げようとすると、すんでの所でホワイトに止められた。

「───余り物かどうか、試してみるといいですよ」

　ホワイトがマグマに足を踏み入れる。こんな虚こ仮け威おどしは、自分のテイルギアには通用しないと証明するかのように。

「ホワイト！」

　俺が呼び止めると、振り返ったホワイトは余裕の笑みを浮かべる。

「確かに私も、アルティメギル首領の姿をこの目に焼き付け、叩たたきのめしたいですが……レッド以外を余り物と言われて黙っているわけにはいきません。それに、幼女属性リトルガールを持つこのエレメリアンとは、戦う宿命にあるような気がします」

「なるほど、君も幼女好きだったね。それなら少しは楽しめそうだな～！」

　ホワイトの強さは、俺が一番よく知っている。

　彼女が任せろと言ったのだ……俺たちは、先に進む！

　ホワイトとツインテールコンタクトを交わし、俺は先へと急いだ。

　俺とイエロー、ブラック、シルバー。

　並んで走る仲間の数が、どんどん減っていく。焦しよう燥そうのような寂せき寞ばくが、俺の胸に去来する。

　たとえ信じて別れても、つい後ろを振り返りそうになる。

階段の先は、薄暗い不気味な岩場が広がっていた。先ほどの火山もそうだが、王宮パレスの只ただ中なかとはとても思えない。

まるで黄よ泉みの国……地獄そのものに迷い込んだかのような錯覚に陥おちいる。

「結留殿サードパレス。ここにいるのは──ハデスギルディか……!!」

「そのとおり。さて、誰だれが私の相手をする？　といっても、当人はすでに腹を決めているようだがね」

音もなく姿を見せたハデスギルディは、ブラックへと挑戦的な視線を投げかける。

「……うむ。ここはわらわとメガ・ネが残る。首領には前に酷ひどい目に遭わされた分、一発お返ししてやりたいが……それはレッドたちに譲るとしよう」

ブラックは唯一、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの戦士と過去に因縁のあるツインテイルズ。彼女が決意した以上、大丈夫かと聞き返すことさえ侮ぶ辱じよくになる。

「……わかった。俺たちが必ず、ブラックの分も叩たたき込んでくるぜ!!」

「よく言った──さあ、ゆけ!!」

「二人とも、気ぃつけてな！」

ブラックとシルバーに晴れ晴れしく見送られ、俺とイエローは、最後の房への階段を駆け上がった。

ついに俺とイエロー、二人だけとなって最後の房への階段を踏破する。

「不思議な気分ですわ。ヒーローとして、敵の本拠地に突入。子供の頃ころからずっと映像の中で見続けてきた局面に……今、自分がいる。少し不謹慎かもしれませんが、わたくし今、興奮していますわ」

「いや……その方が頼もしいよ！」

　誰よりもヒーローに憧あこがれ続けたイエローは、こんな状況だってヒーロー番組で見慣れたシチュエーションってわけだ。けっこうなことじゃないか……！

「……もちろん、敵の基地に乗り込んだそのヒーローたちはみんな、悪の親玉をブッ倒して凱旋するんだよな？」

「ええ。ですがその役目は──」

　イエローは言葉半ばではっと前を見る。四つ目の部屋が、目の前に迫っていた。

「最後の房──風揺殿フオースパレスですわ……!!」

　しかし、ツインテールをなびかせる風を冠するはずのその部屋には、嵐が巻き起こり稲妻が轟とどろいていた。

　当然待ち受けていたのは、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー最後の神、ゼウスギルディだ。

「おお、順当に一部屋に一人ずつ置いてきたか……。それでいい、結婚はやはり一対一でなくてはな」

「別にお前らと結婚するわけじゃないけどな……！」

　自身の属性である結婚に喩たとえてくるゼウスギルディに、俺はきっぱりと反論した。

「……レッドはこのまま、先へ進んでくださいまし」

　イエローは、俺の肩にそっと手を添える。

「ここまで来たら、誰だれが残るかは考えるまでもないですわ」

「イエロー……」

「先ほどの話ですが……当然、敵の基地は大勝利で後にしなければなりません。そして、悪の首領に一太た刀ち届かせるのは、リーダー戦士と相場が決まっています!!」

　イエローはゼウスギルディの前に立ち塞ふさがり、その高貴なツ

インテールを嵐の中に堂々とたなびかせる。

「テイルイエロー……神たるワシの誇りに一弾浴びせた女よ。その怒りを一身に受ける意味、十分に弁わきまえていような」

「一弾が十弾、百弾になるだけです。わたくしは一歩も退きませんわ!!」

「その意気やよし！　フッ……もっとも、テイルレッドが首領様の元へ向かわずにどこかの房に残った時は、ワシがそこへ出向いて連れて来る役割だったのだが……その心配はないようだな」

　ゼウスギルディはイエローを讃たたえ、そして密かに帯おびていた密命を吐と露ろしてきた。

　結局こいつらは、初めから俺を首領の元へ案内するつもりだったのか。

　アポロギルディが、戦うなら早い方がいいと言っていた理由がわかった。

「だがテイルレッドよ……お前はこの先、後悔するだろう。四つの部屋のどこかで残っておけばよかったとな」

「そう思うなら少し待ってろ。首領をブッ倒して、その足でここに戻ってきてやるぜ!!」

　俺が啖たん呵かを切ると、ゼウスギルディは大きく口くち許もとを吊つり上げ、顎あごを振って前進を促うながす。

　イエローは俺の目線に合わせて屈かがみ込むと、俺をそっと抱き締めた。

「わたくしの憧あこがれたヒーロー・テイルレッド……後は頼みましたわ。アルティメギル首領を、必ず!!」

　抱ほう擁ようは一瞬。互いに装そう甲こう越しの温ぬくもり。

　嵐に翻ひるがえったそれぞれのツインテールが、僅わずかに触れ合う。

　それでも俺たちは、確かな再会の誓いを交わした。

俺はイエローに背を向け、最後の階段を目指し走った。

必ずまた逢あおう。ツインテールに導かれて出会った、掛け替えのない仲間たち。

そして……平和な世界で、ツインテールを結び合おう――!!

◇

四つの房全てを抜け、俺は首領の間を目指してひた走る。

みんな……俺を先に行かせるために、過酷な戦いに身を投じていった。

これまで終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーとは、俺がアポロギルディとタイマンで戦った時以外は、みんなで力を合わせて破ってきた。

奴やつらを一対一で相手をするのは、とてつもない負担になるはずだ。

けど、こうして心配している時間がもったいない。俺が少しでも早く首領を倒して四つの房に戻れば、そちらの方が仲間たちの負担も減るんだ。

首領の間へ続くこの通路はまるで、スタートゥアールのコックピット内で見た、異世界と異世界を繋つなぐトンネルのような光景だ。

あらゆる物理法則から解き放たれた超次元を、直接自分の足で歩んでいるかのような錯覚に襲おそわれる。

アルティメギルの首領。いったい、どんな姿をしたエレメリアンなんだ。

ドラグギルディのような、覇は気きが形を持ったかのような傑物

だろうか。

　それともティラノギルディのように、剽ひよう軽きんさの目立つ実力者だろうか。

　いずれにしろこれから俺が目にするのは、全身を禍まが々まがしいまでの棘とげや装そう甲こう、装飾で彩いろどられた、一目見てそれとわかる怪物中の怪物だろう。

　そう考えて、疑わなかった。

　長い光の道を走りながら、俺は思いつく限りのビジョンを描き、邂かい逅こうの瞬間に備える。

　そして――ひと際きわ大きな光に包まれた瞬間。広大な空間に、足を踏み入れていた。

「□□□□□□」

　その光景に、俺は圧倒された。

　異世界にも行った。

　様々な怪現象も目撃してきた。

　しかし、テイルレッドとして戦ってきたこの一年間のあらゆる不可思議の記憶を束ね合わせてもなお及ばないほどに、この空間は神秘で溢あふれていた。

　宇宙をそのまま凝縮したような。星の輝きをあまさず散らしたような。

　あまりにも荘そう厳ごんで、あまりにも神聖で。

　人間が足を踏み入れることを本能的に躊ちゆう躇ちよしてしまうような、幻想の世界が目の前に広がっている。

「ここが、アルティメギル首領の間――」

　不気味な旋律が木霊こだまする。パイプオルガンによる演奏だ。

　まるで、天国と地獄を行き来するかのような転調。人ならざる者が奏かなでる音色。

　なんて破滅的な音おん痴ちなんだ。これはまるで、死の国よりの呼び声だ。

　しかし、奇妙な光景はそれだけでは終わらない。

「鳩はと――!?」

　俺は思わず叫んだ。鳩が……白い鳩が、目の前をゆっくりと飛び去っていく。

　あの鳩は、どこから来て、どこへ行くのだろう―。

　俺は、視線の先に玉ぎよく座ざのようなものを見つけた。入り口から、天の川のように煌きらびやかな通路が伸び、そこには粒子状の壁に四方を囲まれた一角がある。

　玉座は、煌めくオーロラのようなカーテンで厳おごそかに守られていた。

「―よくぞ、ここまで来た」

　幾いく重えにもぶれた、不気味な声が聞こえた。

　あの薄布の奥に、アルティメギル首領がいる。

　先ほど音階の滅びた演奏をしていたのも、奴やつなのだろう。

　俺が身構えていると、オーロラのカーテンがはためいた。

　玉座に座っていた人物が、ゆっくりと歩を進めてくる。

「テイルレッド……究極のツインテールよ」

　その声を聞いた瞬間。

　俺のツインテールが、空間に鋭い刃やいばで縫ぬい止められたように感じた。

　まさか、と思った。

　少女の声だ。

　悪の首しゅ魁かい、首領の間から聞こえるはずのない、俺と同年代ぐらいの女の子の声だ。

　幻聴であって欲しいと願う俺をあざ笑うかのように、声はなおも響く。

「……この日を、どれほど待ちわびたことか……」

　そう、幻聴であって欲しい。この声には……聞き覚えがあるから。

　玉座を降り立ち歩むシルエットかが、ゆっくりと像を結んでいく。

　ついに見たり、アルティメギル首領。

　しかし俺は、予想していたどんな姿からもかけ離れたその容姿に、思わず目を見開いた。

「人間……だと……!?」

　血のように赤い聖装ドレスをまとった、細身の少女。

　俺の目の前に現れたのは、紛まぎれもない、人間の女の子だった。

　神聖さと邪悪さを兼ね備えたその装衣は、まとう者を神にも悪魔にも見せるようだ。

　しかし、首領が人間だったことよりもなお驚きよう愕がくの事実が、俺の喉のどから言葉を奪う。

「お前が……お前が！　アルティメギル首領だっていうのか!!」

　それでも絞り出した俺の叫びに……少女は、笑みを浮かべながら諸もろ手てを広げる。

「いかにも。余が全エレメリアンを統すべる者──アルティメギル首領である」

何な故ぜだ……何故、アルティメギルの首領が……エレメリアンの頂点が！

ツインテールの女神──ソーラと同じ姿をしているんだ!!

属性玉
―設定資料―
08

22 ポニーテール属性

持ち主 フェニックスギルディなど

結翼唯乃がテイルギア・TYPE－Pをまとう際、フェニックスラッシューターに装着する「テイルレインフォーサー」の核に使用される。その変身デバイスはペガサスギルディの遺作でもあり、強化前のツインテイルズでは三人がかりでも太刀打ちできないほどの力を唯乃に与えた。

23 教師属性（ティーチャー）

持ち主 ユグドラシルギルディ

武装を極大化させる効果を持つが誰一人使いこなせず、テイルカリバーの希望装填でようやく制御が可能となった。これによりテイルカリバーが天を割るほどの巨大な光波剣を生み出す。アルティメットチェインのレッドが切り札の一つにするほど、強力な属性玉である。

24 仮装属性（コスプレ）

持ち主 シケーダギルディなど

発動すると使用者の身体を投影し、模倣体を作り出すことができる。ただし生み出せるのは自律意思を持った分身ではなく、あくまで身代わり、デコイである。その分かなり精巧で、幻術を得意とするブラックでさえ騙されたほど。瞬間的な目眩ましには最適の能力。

第七章　ツインテール頂上決戦。

「な、何だ、その姿は……お前が、どうして！　ソーラと同じ姿をしているんだ!!」

　動揺しながら問い質ただす俺に答えず、アルティメギル首領は逆に質問で返してきた。

「テイルレッドよ。お前は、初めて思いを寄せたツインテールを覚えているか」

　突然何を言いだすんだ……。

　印象に残ってるのは、どこの誰だれか知らない年上のお姉さんだった気がするけど……その記憶も曖あい昧まいだ。

「いろんなツインテールを知って、思いを強くしていった。それ以外に言うことはない」

　だから俺は、偽いつわりなくそう答えた。

「余にはそれが女神ソーラだった……。かの女神に憧あこがれ、この姿を取ったのだ」

　首領は思い出を慈いつくしむように語る。

「それは素晴らしいことじゃないか。けど……ソーラのツインテールに憧れ、ソーラを模したなら……どうしてお前はツインテールにしていない！」

　だからこそ、俺は許せなかった。

　まるでそれは、ソーラからツインテールを奪ったような姿だったからだ。

「ハハハ……ハハハハハハハ！　不死鳥めも同じことを聞きよったわ!!」

　首領は高笑いを上げながら、天幕に包まれた玉ぎょく座ざを見やった。

「本来ならばこの身は、万物を寄せ付けぬ鉄壁の聖布ヴエールにて

護まもられている。……が、余はあえてこうしてお前の前に易やすやすと姿を見せた。なぜだかわかるか？」

「……わかるかよ」

「それは不死鳥が……テイルフェニックスが一度、この聖布ヴエールを砕き滅したがゆえよ」

　吐はき捨てるように言う俺に、首領は誇らしげに語る。

「あ奴やつは初めて、己の力のみで余の素顔を曝あばいた大殊しゆ勲くん者。それに敬意を表し、後に続くお前にはテイルフェニックスが切り拓ひらいた道を歩ませよう」

　言い回しがくどいが──要するにあいつは本来、強大な防御壁の中にいる。それをテイルフェニックスが一度破っているから……俺にはもう、同じことをさせないでおいてやるって言いたいわけか。

「感謝するがよい。貴様たちの仲間にな」

「……テイルフェニックスが俺たちの仲間だと、お前は認めてくれるんだな」

　唯ゆ乃のの笑顔を思い出し、俺の胸に熱のような感情が去来する。

「見み損そこなうでない。余は久しく敵を無くした存在。力を持つ者はいかなる陣営、いかなる属性であろうと賞賛を惜しまぬ」

　さすがに度量が大きい奴やつ。

　首領が一片の美点も見当たらない心からの邪悪ではなかったことに、俺はほんの少しだけ安あん堵どした。

「この調子では、不死鳥と交わした会話をそっくり同じくすることになりそうだ……もう御託はよかろう、テイルレッドよ」

　ドレスの布を揺らめかせ、首領が歩を進める。

　初めてだ。

　敵を前にして、緊張で足が竦すくむ。

「ではじっくりと見せてくれよう。極めに極めしその先の、頂点のツインテールを」

「!!」

　しかしその言葉で、俺は緊張を先置いて闘志が燃え盛るのを感じた。

　ツインテールにしていないのに……頂点のツインテールを名乗るだと……!?

　わかるぜ、唯ゆ乃の。

　今俺が、アルティメギル首領に対して思っている疑問……困惑……怒り。

　お前は全部、同じようにぶつけたんだろうな。

　俺はお前とまた逢あえるって信じてる。

　だから今は、お前が切り拓ひらいてくれた道の先にいる首領へと、全力で挑む!!

　唯乃……見ていてくれ!!

「まいれ」

　首領が無機質な声で開戦を告げる。

「ブレイザーブレイドッ!!」

　俺は走りながらフォースリヴォンを叩たたき、ブレイザーブレイドを手にする。

「完全解放ブレイクレリーズ！」

　そして初めから全開で、必殺技を叩き込んだ。

「グランドブレイザ――――――――――ッ!!」

　ソーラの姿をした存在へと迫る炎えん刃じん。

　しかし首領は、指二本でブレイザーブレイドの刃やいばを摘つま

み、グランドブレイザーを容た易やすく封殺してみせた。

「これが斬ざん撃げきとは笑止な。あまりに手つきが優しいので、余の髪をブラシで梳すくつもりなのかと思ったぞ」

「ツインテールにするなら、いくらでも梳いてやるけどな……!!」

　しかし、いきなり必殺技を叩き込んだのが功を奏した。

　見た目が人間だから……ソーラだから戦いにくいかと思ったけど……やはり首領は、エレメリアンだ。同じ人間の姿をしていても、唯ゆ乃ののような熱を感じない。

　ソーラの形をしたマネキン。息遣い、体温、微ほほ笑えみ……全てが偽いつわりだ。

　これで俺にはもう、迷いはない。

「プログレスバレッター!!」

　俺の持ち得る力の全てを注いで、こいつを倒す!!

　ツインテールを上結びに変え、攻撃力特化形態ライザーチェインにチェンジした俺は、二刀になったブレイザーブレイドツインで首領に攻撃を仕掛ける。

　刃やいばが触れる寸前で、首領の姿が消えた。

「テイルレッドよ。ツインテールとは何か」

　そして、周囲の空間から問いが反響する。

「ツインテールは……髪型だ!!」

　俺は迷わずそう答え、ブレイドを振るった。

「偽りを言うな。ただの髪型と断じず……真理を探究し続けた末に、究極のツインテールへと到達したのであろう」

　確かに捉えたと思った手て応ごたえはあっさりと摺すり抜け、また別の方向から声が聞こえる。

「余もそうであった。エレメリアンとして生を受けたその直後か

ら、ツインテールだけを思っていた」

　そこかしこから反響する声が、俺のツインテールを幻惑する。

「『生きたい』……『ここはどこだ』……『自分は誰だれだ』……生命いのちある者全てが順繰り辿たどるそれらの命題を余さず超越し、余はただツインテールのことを考えていたのだ」

「その点じゃお前に分がありそうだな。俺は産声を上げてすぐ、ツインテールを好きになったわけじゃない」

「フッ……それが人間よ」

「生きていく中で、いろんなことを知って、いろんな人に出会って……そしてツインテールを好きになった。始まりが遅くても、今のこの思いの強さは誰にも負けるつもりはない」

　変身限界時間の二二秒の寸前で、俺はツインテールを下結びに変える。

「そして……そんな人間の思いとツインテールを奪おうとするお前たちと、俺は戦う!!」

　高速形態フォーラーチェインにチェンジ。

　いずこかに存在するであろう首領を捕捉すべく、炎の尾を引きながら高速飛ひ翔しようする。

「そこだ！」

　首領の姿が像を結んだ。今度は両の手で、ブレイザーブレイドツインをそれぞれ受け止めている。しかし、グランドブレイザーを受け止めた時よりも、首領の手は微震している。手応えを感じさせているのだ。

「ここまで辿たどり着いた時点で、お前はすでに勇者だ。たとえこれよりあっさりと余に敗れたとしても、決して落胆はせぬ。それ程までにお前は、永きにわたり余の退屈を慰なぐさめてくれた」

　一つ、わかったことがある。

　こいつはツインテールじゃないが、確かに動きがツインテール

だ。

　ツインテールじゃないからと憤ふん慨がいせず、冷静にツインテールを捉えれば……それは、俺のもっとも得意とするフィールドだ。

　高速飛ひ翔しようで、徐々に、確実に首領の実体へと追いついていく。

「ほう……余の動きを捉えるか。素晴らしい。よほど日頃ごろからツインテールを見ていなければ、できることではないぞ」

「よほど日頃からツインテールを見てるからな！　けど、俺にとっては普通のことだ!!」

「ならば──これは視みえるか」

　不意に肩口をしたたかに叩たたかれ、俺は思わずたたらを踏んだ。

「な、何だ、この攻撃は……!?」

　次は、脚。腹……身体からだを次々と痛みが襲おそう。

　光弾を飛ばされたわけでも、衝撃波を放たれたわけでもない。

　気づいたら、俺の周囲の空間そのものが爆はぜているかのようだ。

　咄とつ嗟さにライザーチェインにチェンジするが……不可視の攻撃が、四方八方から襲いかかってくる。

「うわああああああああああああああっ!!」

　ライザーチェインの強化装そう甲こうが砕かれ、ギアの破片が宙を舞う。

　宇宙空間のような冷たい床に、俺は倒れ伏した。ノーマルチェインに戻り、よろめきながら立ち上がる。

「テイルレッドよ──先に伝えておこう。余にはまだ、真の姿が残っている」

「何っ!?」

　今の状態でも俺を圧倒しているというのに、さらなる戦力差を宣告してくる首領。

「しかしテイルフェニックスがまとっているのを見た時にも思ったが……その装束、美しい」

「……テイルギアのことか……？」

「そうだ。余は、自分の真の姿を他者に見せることを好まぬ。ゆえに真の姿に変身せずとも己が力を引き出す方法を模索し……そのように装束をまとう方法へと行き着いた。それを是非、お前に見てもらいたいのだ、テイルレッドよ」

　首領はぞっとするような冷たい微ほほ笑えみを向けてきた。

　ソーラの顔で。ソーラの声で。

「まさか、首領……お前も……」

「お前と今相あい見まみえたことで、その探究は完成を見た」

　首領は手の平を天にかざし、光を棒状に凝縮させていく。

　一瞬、光がツインテールに見えた。それもそのはず……形作られたその長大な杖は、先端がツインテールを模したかのように先割れていたからだ。

　それはどこか、完全解放ブレイクレリーズした俺のブレイザーブレイドを思わせる。

　さっき俺が攻撃した時、このイメージを完成させたのか……!?

「刮かつ目もくせよ。余が初めて手にした武器──名を、フューネラルケインという」

◇

　嵐が巻き起こり、雷が轟とどろく地獄の房は、しかし、それをなお上回る破壊の渦うずに巻き込まれていた。

　テイルイエローとゼウスギルディ。

　ツインテイルズとアルティメギル、両陣営最大火力を誇る両者が仲間や周囲の被害を気にせず争う様は、まさしく神話の中の大戦。

　生命いのちあるものが立ち入ることを許されぬ魔境が、そこにあった。

「はぁ……はぁ……」

　疲ひ弊へいと興奮とで息を荒らげ、全身の装そう甲こうを脱衣パージするイエロー。

　たった一人、脱衣の目撃者であるゼウスギルディは、装甲を外した勢いで揺れる胸を見てライバル心を刺激されたのだろう。自分も無意味にその豊かな胸を揺らした。

「嬉うれしいぞ、テイルイエロー……ワシとやりあえる人間が、この世に存在する事実がな!!」

「……そういえば以前、ポセイドンギルディと話していましたわね」

「ん？　な、何をじゃ？」

　声を裏返して動揺するゼウスギルディ。ひどく、わかりやすい反応だった。

「わたくしたちに、髪の毛のことを語るのはまだ早いと。ですが一度あなたたちを打ち破った今ならば、そのことを聞かせてくださるのでは？」

　イエローは時間稼ぎのためにそう言ったのではない。

　自分は、ツインテールを愛するまでに、愛を自覚するまでに時間がかかった。

　同じ女として、理解したかったのだ。ゼウスギルディはこれほどの強さを獲得するまでに、どれほどの愛を髪の属性に注いだのか

と。

「フッ……髪についてワシに語らせれば━長いぞ。ワシの全力に耐え切れたら、少しずつ聞かせてやるわ!!」

　ゼウスギルディが手しゆ杖じようを天に衝つき上げると、すでに轟いていた雷光を砕き割って神の雷が迸ほとばしり始める。

「さあ見事受けてみよ、人間界最強のドＭよ！　我わが雷終神話ライスシヤワーを!!」

「アブソリュートリングッ!!」

　イエローはアブソリュートチェインにパワーアップすると、即座の全砲門展開で真っ向勝負を覚悟する。

　嵐吹き荒れる空間にツインテールをアンカーとして突き刺して身体からだを固定し、全身の武装を一斉に展開した。

　そしてヴォルティックブラスターフォートレスを構え、アブソリュートリングから伸びたリードをグリップに繫つないで高火力モードを発動する。

（ゼウスギルディは攻撃力こそアルティメギル最強ですが、弱点も明確……！　癇かん癪しやくを起こさせて無差別に乱撃してくるのを凌しのげば、その後にチャンスが来ますわ……!!）

「絶対脱衣形態アブソリユートブラストモード━ファイヤ━━━━━━━━ッ!!」

　イエローの全身から、神に肉薄する極弾が解放される。

　裂れつ帛ぱくの叫びが、弾雨の炸さく裂れつ音にかき消されていく。

　もはやそれは星々を砕くかのごとき爆裂が絶えず展開する、創世の火中だった。

◇

黄よ泉みの国の只ただ中なかで、幻術を操る戦士たちの秘技が鍔競り合う。

夥おびただしき妄想により生み出された幻覚が、互いを呑のみ込もうと殺到する。

黒き衣をまとう冥めい府ふの者同士。不動のままにして、激しい戦いが繰り広げられている。

「……テイルブラックよ、よき幻覚だ……やはり君の才能は惜しいよ。しかしたとえ組織を出しゆつ奔ぽんしようと、君の過去は消えない。アルティメギルに死の神は二人いらないのだよ」

擬人化属性パーソニフフイの雄ゆうとして、あらゆる妄想を実体化する神、ハデスギルディ。

「悪いが、死神の称号なぞとっくに捨てたつもりじゃ。それにわらわの惚ほれた者は、女の過去を気にするような小さな奴やつではない。早くも器で負けておるな、死神」

その神の眼鏡めがねであらゆるものを、形なき妄想まで見通すと豪語する戦士、テイルブラック。

相棒のメガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIが、二人の前ぜん哨しよう戦せんを静かに見守る。

「フッ……確かに、ポセイドンギルディにしたり顔で言われそうだね……。過去にこだわる奴はモテないなどと」

何もせずに対たい峙じしているだけのはずの二人の周囲では、空間そのものが爆はぜている。

二人の幻術が現実にも影響を及ぼし、破壊のエネルギーとなって炸裂しているのだ。

「しかし君も、つまらない存在になってしまったようだ。昔の君ならば、ツインテールパレスの四部屋の名を聞いて目を輝かせただろうに……感性が常人のものに近づいた……」

ハデスギルディの双そう眸ぼうが妖あやしい光を放つ。

「――いや。女の子になってしまった、のかな……？」

「ねっとりエッチな感じで言うでないわきしょいわ――――――っ!!」

「そんなつもりは毛ほども!!」

　ブラックの鎌かまで殴打されるハデスギルディ。ついに直接の打撃が繰り出され始めた。

「あんた、話のわかる人に見えたけど……昔仲良かったブラックちゃんと、本当に戦わなきゃあかんの？　この戦いに、意味なんてあるんか……？」

　二人の妄想戦が一区切りついたところで、メガ・ネがハデスギルディに話しかけた。

「メガ・ネ君。君も人の親ならわかるはずだ。もっとも大切なものを守ること……それは、あらゆる情や倫理にも優先されることだと」

「はっ……」

　メガ・ネはブラックを見やり、覚悟を決める。

　自分にとってイースナが何ものにも替えられない大切な存在のように、ハデスギルディにとってはそれが首領なのだ。

「そういうことじゃ、メガ・ネ。とっとと戦いを終わらせて、わらわもあやつとまたちゅーするぞ。貧乳に負けてはおられぬわ!!」

「むっ……！　変態値、三〇万……。なかなかに変態だね」

　対戦相手の変態の度合いを数値化する、ハデスギルディの特技は健在だ。

「以前計測された時よりも数値が上昇したか。っていうか、なんでちゅーしたいっていうピュアッピュアなこと考えて上昇するんじゃ

……お前の特技の正確性が薄れたぞ」

「君が変態なキスを望んでいるのでは？　フッ……野暮な話だったかな」

　ハデスギルディが真ま面じ目めな顔でちょっと照れたふうにそう言うのが最高にキモいが、ブラックはその言葉を挑戦状と受け取った。

「ではここにいるのは、何のしがらみもない、ただの変態同士……それでいいね？」

「メガ・ネは普通ノーマルじゃが──さあ来い、インフィニットコンバインじゃ!!」

「了解や……いくでブラックちゃん!!」

　メガ・ネの機甲の身体からだが分離し、白銀の強化装そう甲こうに変形。

　ブラックの身体に装着され、インフィニティチェインが完成する。

「これでメガ・ネもわらわと一心同体。貴様の歪ゆがんだ変態観、わらわの正しき変態観で叩たたき伏せてくれる!!」

　ダークネスグレイブメビウスで冥めい府ふの瘴しよう気きはびこる宙を薙なぎ、ブラックは決死の気迫をみなぎらせた。

「期待しているよ。先を楽しみにしていた変態が一人消えてしまった以上、私が目をかけるのは君たちしかいなくなってしまったからね……!!」

　冥界じみた闇やみの中で展開される、熱き変態たちの戦い。

　かつての師弟は今、闘争をもって決別を果たそうとしていた。

◇

フューネラルケイン……葬送の魔ま杖じょう──。

首領は手にした杖を目の前に構えたが、それはその存在を誇示するためだけではなかった。

「お前たちに倣ならい、余もこう言おう──」

魔杖は、変身デバイスとして使うためだったのだ。

「テイルオン」

俺が聞いた中で、もっとも無機質な変身機構起動略語スタートアップワード。

首領の紅あかい聖装ドレスが光となって弾はじけ、代わりに黒き衣が全身を取り巻いていった。

いや、黒と呼んでいいものか。もはや、単純な一色で言い表すのも憚はばかられる……あえてパーソナルカラーを冠するならば、宇宙。奴やつがまとうのは、宇宙色の装衣だ。

装そう甲こうがほとんど無い、アンダースーツだけのものだが……それは紛まぎれもなく、テイルギアだった。そして、その造形はテイルレッドのスーツ部分との共通点が多く見られる。

おそらく性能などにまったく類似性はない、見た目だけを真ま似ねたものだろうが……ソーラの姿でテイルギアまでまとわれたことで、俺はますます心をかき乱される。

「余はこの衣を、テイルクロスと名付けた。お前との宴のために用意した正装だ、気に入ってくれたか？」

「……ああ。おかげで気合いが入ったぜ。お前を倒すためのな──」

俺はブレイザーブレイドを連続で斬きりつける。

首領は無造作に腕を動かし、四方八方から迫る刃やいばを受け止める。二度、三度と斬りつけても、ビクともしない。ほとばしる衝撃波が、俺のツインテールを揺らすだけだ。

いつの間にかフューネラルケインの先端の光こう玉ぎょくが、俺の腹に触れていた。

「フッ……」

「ぐっ……うううう……!!」

　それに気づいた時には光波弾が零ぜろ距離で炸さく裂れつし、俺は床を転がっていた。

「本家がこの程度では、衣装を着揃えた余も落胆を禁じえぬ。出し惜しむでないテイルレッド、余はお前に全てを曝さらけ出しているのだぞ」

　テイルクロスの着き心地ごこちと性能を確かめ、首領は刃を受け止めた腕のアンダースーツを満足げに見つめる。

　こいつの力を見極めるために、段階的にツインテールの出力を上げていたが……このままではただ翻ほん弄ろうされて終わるだけだ。俺も、全力を解放する。

「ツインテイルブレス！」

　俺は両腕をクロスさせ、叫ぶ。

「ツインテイル……オンッ!!」

　まとったテイルギアが、偽いつわりの空想装そう甲こうを許さぬと輝き猛たける。超越装甲を加積する。

　アルティメットチェイン。俺の究極のツインテールの全てを、アルティメギルの頂点へとぶつける!!

「それが究極のツインテールを体現した姿か……。美しい、美しいぞテイルレッドよ」

　テイルクロスとテイルギア。

　ツインテールの名を冠した装備の激突を前に、俺はツインテールを武む者しゃ震ぶるいさせる。

　それが引き金になったのだろうか。

　突とつ如じょ、俺の意識が、光の中へと引き込まれる。

『観み束つか総そう二じよ』

　光の塊かたまりが、俺に語りかけてくる。

『！　俺のツインテール……!!』

『そうだ……。私は、お前のツインテールだ。お前と常にともに在る──』

　それはツインテールだけが人の頭を離れ、形を保っているかのような輪郭だ。

『恐れるな。アルティメギル首領は一つの在り方としてツインテールを究めたかもしれないが……お前もまた、ツインテールを愛し極めた戦士。信念を以もつて戦いに臨のぞむのだ』

　幾度も俺を導いてくれた俺の心のツインテールが今、俺に激励を送る。

『私も最後までお前とともに戦う。全てのツインテールを守るために!!』

『……ああ!!』

　俺の意識が、現実へと戻る。おそらくは、刹せつ那なにも満たない一瞬の出来事だったはずだ。

　首領は俺を見やると、声こわ音ねに喜色を滲にじませた。

「今……自分の中のツインテールと話していたな」

「！　何な故ぜわかる……!!」

「わかるとも。余も遠い昔に、己のツインテールとの対話を終えている」

　俺は愕がく然ぜんとした。

　自分の中のツインテールと話せる存在が、俺の他にいた……!?

「その興奮を語り聞かせても、誰だれも信じようとはしなかったが

な」

「俺の仲間だって、半信半疑だったよ……呆あきれられた。でも、最後には笑って信じてくれたぜ、俺らしい……ってな」

　首領の周りの仲間たちは、誰も信じてくれなかったのか。

　……こいつも孤独だったんだ。

　だったら、唯ゆ乃のと同じように……全力をぶつけ合うことで、首領ともわかり合えるかもしれない。

　星の瞬またたきのような淡い期待を胸に、俺は右手を天にかざした。

「来い！　俺のツインテールッ！　テイルレガリア──────────ッ!!」

　俺の身体からだから飛び出した光が、双房戦闘支援機ツインテールアーマーとなって飛ひ翔しようする。

「ほう、ツインテールが空を飛ぶか。テイルレッドよ……お前とは戦っているだけで面白い。その空想力テイル……見事!!」

　首領が手の平を突き出すと、テイルレガリアの放った無数の光弾が一斉に制止する。

　そしてフューネラルケインを一旋させると、その光弾は全て俺に向かって飛んできた。

　俺はすかさずテイルレガリアをブレイザーブレイドに合体させ、究極双房剣テイルカリバーを完成させる。

「テイルカリバー！　無限装塡アンリミテツドモード!!」

　テイルカリバーから放たれた無数の剣けん閃せんが、反射された光弾を撃ち落としていく。

　俺はあらためて、対たい峙じする首領を凝視した。

　奴やつはあれだけの光弾を撃ち返しておきながら、涼しい顔で佇たたずんでいる。

「欲しそうな目をしおって……。それほどツインテールを結んだ余が見たいか？」

「！　誰だれがっ!!」

　心の裡うちを見透かされ、俺は声を荒らげた。

　いや──見たい。見たいが、奴はソーラを模している。そう思ってはいけないんだ。

「お前と戦った幹部戦士たちはさぞ驚いていたであろう？　それだけの強さと純粋さ、普通ならば両立できるはずがない……」

　首領はフューネラルケインを突き出した。

「テイルカリバー……道標装塡リーデイアモード!!」

　テイルカリバーによって俺のツインテール反射神経が増幅され、次元を超越した攻撃をも捉える。

　──見える。さっきまでは不可視の爆裂だと思っていたものはその実、ツインテール型に空間が湾曲した攻撃だった。

　テイルカリバーを叩たたきつけ、空間の歪ゆがみそのものを斬きり裂さいていく。

「お前は余に感じておるのであろう？　ツインテールを……目に見えぬ髪型を。ゆえに余の攻撃が視みえる……」

　挑発的に語りかけてくる首領。

　その通りだ……過去戦ってきた多くの強敵たち、そいつらに感じる熱きツインテール……魂たましいの髪型が、こいつにもあるのがわかる!!

　それなのに、どうしてこいつは……!!

「ツインテールじゃないんだ────────────────っ!!」

　テイルカリバーとフューネラルケインが激突し、激しいスパークが巻き起こる。

「お前は考えたことがないか。愛し、育てたツインテールが、いつ

か消えてしまうのではないかと」

「考えたことがないって言ったら……嘘うそになる。俺は実際に一度、ツインテール属性を失ったことがあるしな……!!」

「余も怖かった。恐ろしかったのだ。ツインテールを喪うしなうことがな……」

　フューネラルケインでテイルカリバーをかち上げ、首領はさらに空間攻撃を放ってくる。

　これほどの実力者が、素直に恐怖した過去を打ち明けてくるなんて……。

「だから余はあえて、ツインテールを〇ゼロにすることで悠久のものとしたのだ」

　俺は背中のブレイザーセイバーを射出して空間攻撃を斬きり裂さき、その隙すきを突いて首領へと突進む。

「うおおおおおおっ!!」

「むっ……！」

　渾こん身しんの一いち斬ざんで、初めて首領を後退させた。

「そういうことだったのか。エンジェルギルディがやたらと属性力エレメーラを捨てるだのどうのと妙なことをしていたのは……お前を真ま似ねしていたのか……！」

「ツインテールに関しては察しがよいではないか。そのとおり。ゆえに、あ奴やつには格別の期待をかけていたのだが……フッ、お前たちに入れ込むあまり、暴走が過ぎたようだがな」

　目に見えないツインテールを愛することと、存在しないツインテールを愛することは、似ているようで決定的に違う。

　失う恐怖に負けてツインテールを捨て去ったこいつを……俺は絶対に認めるわけにはいかないっ!!

「テイルカリバー！　輝光装塡ブリリアントモード!!」

　ブレイザーブレイドとテイルカリバーの二刀流で、俺はツインテールを体現する。

　首領もまたさらに速度を増し、俺たちは光となって絡み合い、激突する。

　視覚を超えた速さ。本能に頼った反応域での撃ち合いは、俺の心に根ざす完かん璧ぺきなるツインテールを浮き彫りにしていく。

　こいつもまた、心に完璧なツインテールを抱いだいているんだ。たとえそれが、存在しないものだとしても。

　その事実が、肉体の痛みよりも遥はるかに強く心を責め苛さいなむ。

「よき気迫だ。ではもう一つ上の、余の力を見せよう……」

　異様な光景が展開されていた。首領の間に星のように輝いていた光全てが、首領の身体からだと、テイルクロス、そしてフューネラルケインへと吸い込まれていったのだ。

　まるで……一個の宇宙をその身に宿すかのように。

　闇やみ色を増した空間の中で、首領は恒星として輝きを示す。

　その姿がかき消えた瞬間──俺は、訳もわからずよろめいていた。

「なん、だ……この速さは……!?」

「余のツインテールの速度は、光を摑つかむ。原子で構成された生命体である以上……光速には屈するしかないのだ」

「光速のツインテールだと!?」

　俺は、為なす術すべ無く次々と光に打ち据すえられていく。

　首領の攻撃が……ツインテールが、一瞬の光としてしか認識できない。

「ほう、光を……宇宙を相手取っても闘志を失わぬその目……さすがよな、テイルレッド」

　一瞬動きを止めた首領を、俺は睨にらみ付ける。

恐れるな。どれほど速かろうと……ツインテールの動きならば、俺はついていける。スケールがどれだけ大きくなろうと、同じことなんだ。

戦いが始まった頃ころから今までずっと、俺はそうして強敵と斬きり結んできたんじゃないか！

ツインテールが光速で動くならば……それを摑むべく、光速で手を伸ばせばいい。

身体からだが、物理法則から解き放たれる。

俺のツインテールが、光に溶け込んでいく。



「おお……」

　首領の驚嘆の声が、音の理ことわりを越えて直接心に聞こえる。

　手にした二刀を光の剣速で乱舞させ、俺は首領に追いすがった。

「だがそんなとてつもない動き……人間がいつまでも続けられるはずがあるまい」

　そう。少しでも手を休めれば、たちまち首領の光に打たれるだろう。

　ならば……休まなければいい。俺のツインテール、少し無理をしてもらうぜ……！

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

「むっ……？」

　首領の攻撃に先んじ、俺の剣が僅わずかずつ当たり始める。

　理事長が息継ぎせずに喋しやべっているのをヒントに、ふと思い描いたことだ。

　息継ぎという間断。地球に生きる動物である以上避けることはできないその決定的な隙すきを、ツインテールによる呼吸で覆くつがえす。

　俺はツインテールでのみ呼吸をし、残りの生命活動の全てを首領への剣撃に費やした。

「フッ……ツインテールで呼吸いきをするとは、見上げた奴やつ。人類ではなくツインテールを名乗ればよいものを……！」

「名乗っているぜ！　俺は、ツインテールだ!!」

「なんの。余もツインテールだ……!!」

　氷の笑みを浮かべる首領。

　炎の闘志をぶつける俺。

　ツインテールのぶつかり合いは、いつ終わるともなく続いた。

　　◇

「多少小悪魔チックな方が、幼女の可か愛わいさが引き立つんです！」

「幼女は純粋だからいいんじゃん、テイルレッドだってそうだろー？」

　ホワイトはなるべく力を温存してアポロギルディを手入殿セカンドパレスに足止めするため、巧みな幼女トークで舌戦を繰り広げていた。

　しかしアポロギルディはその狙ねらいを見抜いているようで、何とか戦意を引き出そうと細かく攻撃を仕掛けてくる。それをいなすホワイト。

「あれ～？　君とは戦ったことないはずだけど……僕の動きを見切ってない？」

「幼女好き同士、動きが読めるだけです」

「なぁるほど。君は他のツインテイルズの戦闘経験を自分に活いかせるわけだ。テイルレッドの戦闘データを活用してるんだね～！」

　ホワイトは内心、アポロギルディの洞察力に感心していた。確かに自分のテイルギアは、戦闘データなどをプログラムとして走らせることで様々な局面に対応できる。

　その能力を、こんな小競り合いだけで見抜くとは。

　もちろん、決して焦あせりを悟らせはしない。

　二人の争いは、心理戦の側面も呈ていしていた。

「首領様は君にも興味あるみたいだけど、僕はあんまりなんだよな～」

「じゃあ、戦わずにここを通してくれませんか？　私は仲間を助けに行きたいんです」

「……別にいいよ。一つ、質問に答えてくれたらね」

　思いがけない申し出に訝いぶかしむホワイト。

「そのテイルギアってのを創つくったのは君らしいね。すごい科学力だ……エンジェルギルディもずいぶんと羨うらやんでたもんなー？」

「それほどでもありますよ。幼女にも大人気なんですよ、羨ましいでしょう？」

　アポロギルディはニヤリと笑い、

「――――それほどの科学力があったら、ちん○んを消すぐらい、わけないことだよね？」

「何を言ってるんですか？　ただ○んちん言いたいだけの、可か愛わいいお子様ですね」

「すごいや、全然顔に出てない。君、よっぽど嘘うそだらけの人生を送ってきたんだねー」

　アポロギルディはホワイトのポーカーフェイスぶりを褒ほめただけなのだろうが、一言余計だった。

　ホワイトは地面の岩を蹴けり砕いてアポロギルディに急迫すると、シャイニングアームドの鉄拳をアポロギルディの顔面に突き込んだ。

「私はエレメリアンごときに見下されるほど、安い人生を送ってきてはいません」

　アポロギルディは涼しい顔で、両腕をクロスさせてホワイトの拳こぶしをガードする。

「僕にこんなつまらないことを言わせなきゃこうしてやる気を出さなかった、君が悪いと思うけどね……!!」

「とりあえず君との戦いをある程度楽しんだ後で、質問の続きをするよ……!!」

　アポロギルディの身体からだが、炎で風船を膨ふくらませるように伸長した。

「イレギュラーレングス……!!」

　アポロギルディは幼い子供から大人の女性の姿にまで、一気に成長。

　テイルホワイトの眼前から、即座に姿をかき消す。

「これがレッドの言っていた高速形態ですか……！　おとなしく幼女型のままでいれば可愛げがあったものを……!!」

　アポロギルディの闘気に呼応するように、周囲のマグマが猛たける。

　そのマグマを突き破り、アポロギルディは高速攻撃を開始。

　一発、二発と攻撃を受けたものの、ホワイトは並外れた反応速度でイレギュラーレングスの高速に対応。

「サイズアームド!!」

　シャイニングアームドを大きな鋏はさみの型に変形させ、背後から繰り出されてきたアポロギルディのダガーを挟み込む。

　武器を封殺するや、スカート型の装そう甲こうを翻ひるがえしてアポロギルディの腹に強烈な蹴けりを叩たたき込んだ。

「へぇ～、頭でっかちのおねーちゃんかと思ったら、全然武闘派じゃん」

　マグマの上の小さな岩に、右足だけで着地するアポロギルディ。腹を軽く手で払うだけで、ダメージを受けている様子はない。

「鍛きたえ方が違うんですよ……！　こちとら野生の猛獣が二四時

間いつ何時襲おそってくるか知れない危険地帯で、一年も暮らしてきたんです!!」

　ホワイトの超反応の源泉は、テイルギアの性能でも、科学者たる叡えい智ちでもない。

　悪友とともに過ごし磨かれ、研とぎ澄まされた本能。野生の勘だ。

「あはは、そりゃ並のエレメリアンじゃソッコーで返り討ちにされるわけだ！」

　けらけらと嬉うれしそうに笑うアポロギルディ。

「それともう一つ。私がでっかいのは頭ではなく、おっぱいです!!」

　ホワイトは剣型に変形させた武装で、一いつ気き呵か成せいに攻め込んでいった。

「シャイニングアームド──ソードアームドッ!!」

◇

　透き通るような一面の青の傍かたわらで、激闘が繰り広げられていた。

　浜辺の砂浜は、上空から爆弾を降らしていくかのように激しく土砂が巻き上がる。

　訪れた時には穏やかな漣さざなみのみが揺らめいていた海面が、二者の戦いの余波でいくつもの大渦うずを生み出している。

　ブルーとポセイドンギルディは、互いの三みつ叉またの槍やりを激しく撃ちつけ合っていた。

「テイルブルー……。スワンギルディとの戦い、見たぜぇ～」

「！　ってことはあんた……」

露骨に嫌そうな顔をするブルー。怪光線でテイル彗すい星せいを撃墜するのも、当然見られてしまったのだろう。

「そ、その……へへ、なんちゅーかさ、か……」

「か？」

どんな悪口を言われるのかと、ブルーが身構えていると──

「カッコよかったなぁ～って！　あ、言っちった!!」

照れて背を向けつつも、ちらちら振り向いてくるポセイドンギルディ。最高にウザい。

「──でさ。俺にも吐いてくれよ」

「は？」

「光線吐いてー！　俺にも吐いてー!!」

ポセイドンギルディは突然猛ダッシュし、ブルーに嫌すぎる懇願をしながら迫ってきた。

「へ、変態────────ッ!!」

全力で逃走するブルー。

陽キャを極めると、女子の吐く怪光線を自ら食らいに行くようになるのだろう。

「ナンパはお断りだって言ってんでしょ！　あんたキモいし！」

「だっ……だから俺はキモくねーし！　イケメンだし!!」

自身にとっての禁句である「キモい」を口にされ、ポセイドンギルディは足を止める。

「……無駄なのよ。どんなにナンパされたって、少しも心が揺らがない」

ブルーも砂粒を巻き上げて急停止すると、大おお仰ぎように溜ため息いきをついた。

「あたしね、昨日きのう……好きな男の子とキスしたの。一応、ちゃんとしたのではファーストキス……」

　そして、真剣な面おも持もちでポセイドンギルディと向き合う。

「ずっと大好きだった人と、やっと……キスできた」

「え、あ、ほぇ……？」

　陽キャらしからぬ激しい動揺で、目を高速で泳がせるポセイドンギルディ。

「ふ、ふぅーん。ふぅーん。キス。ふぅーん……」

　仕舞いには、その長ちよう軀くを乙おと女めのようにもじもじとくねらせ始め、

「やっべ超照れるわぁ」

　などと甘えたような声まで出し始めた。

「普通に照れてんじゃないわよリアクションに困んでしょーが!!」

「いや、んなこと急にカミングアウトされてもこっちが困っし！　おめでとうとしか言いようねーし!?」

　激しく動揺しつつも、祝福の言葉を送るポセイドンギルディ。普通にいい奴やつだった。

「だから今のあたしは、力が限界までチャージされてんのよ。あんたごときとっととぶっ飛ばして、先に進むわ!!」

　ブルーはアンダースーツの下に、素早くパッドをスロットインさせた。

「エターナルパッド！」

　最強形態エターナルチェインに変身し、ウェイブランスエクシードを構える。

　先のテイル彗すい星せいとの激突の疲労が、一気にこみ上げてくる。

「オッケー、もっと二人で楽しもうぜ、テイルブルー!!」

　女性を手玉に取るかのように、あらゆる物質を自在に操作するポセイドンギルディ。

　穏やかな海の水が突とつ如じよとして二つに割れ、遥はるか天高く持ち上がる。まさしくそれは、人が思い描く神の所業そのものだった。

　意思を持ったように踊る大瀑ばく布ふが、ブルーを押し潰つぶさんと飛ひ翔しようする。

「あたしは何も楽しくないっ……てーの!!」

　ブルーは変幻自在に乱れ舞う水の攻めを冷静に見極め、槍やりで捌さばく。

「へぇ～、とんでもねー気配察知能力……人間にしてはやるじゃん」

「鍛きたえ方が違うのよ……！　こちとらタガの外れた痴ち女じよが二四時間いつ何時惚ほれた男に襲おそいかかるか知れない危険地帯で、一年も暮らしてきたんだから!!」

「つまり君は、その男の子のナイト様ってわけか。いいねぇ～そーいう気の強いコを、俺はオトしたいわけよ!!」

　どれだけ袖そでにされてもめげることなく、天界のナンパ師は愛を語らい続ける。

　そして永遠の愛をツインテールに刻んだ少女は神の寵ちよう愛あいすら一いつ顧こだにせず、たった一人の少年のために槍を振るうのだった。

◇

　あまりにも激しい攻防によって、首領の間は原型を失い始めた。

　空間そのものがあちこち破断し、世界が悲鳴を上げている。

　俺と首領の戦いは、もはや一個の宇宙を崩壊させつつあった。

　首領はようやく光速の動きを止め、満足げに頷うなずきを落とす。

「素晴らしい……あの不死鳥が愛するわけだ。実際に手を合わせねばその強さがわからぬものよな、究極のツインテールよ!!」

　俺が全力をぶつけ続けてもなお、首領は未いまだ涼しい顔をしている。

　いや……ようやく悲願が叶かなったかのような、満ち足りた微笑を浮かべている。

　これが、アルティメギルの極致……。

「……エレメリアンたちの侵攻から世界を守りたいか、テイルレッド」

　首領はひどく優しい口調で、俺にそう語りかけた。

「当然だ！　俺たちはそのために、ここにやって来たんだ!!」

「お前が世界のツインテールを救う方法が一つだけある」

　方法なんて、わかりきっている。目の前にいるお前を倒すことだ。

　そんな固定観念は、首領の次の言葉によってあっさりと砕かれた。

「テイルレッドよ……アルティメギルの首領となれ。お前が全てのエレメリアンの支配者となるのだ」

　思考の埒らち外がいの提案。

　俺は少しの間呆ぼう然ぜんとしてしまったが、

「何、言ってやがんだ……ふざけるな!!」

　その放心を撥ば条ねにするようにして、激しく言い返した。

「ふざけてなどおらぬ。余は直属軍へこう命を下した。『テイルレッドをアルティメギルの女神として迎え入れよ』とな……。お前を、余の後継者としたかった」

　確かに。神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンから、そんな命令を首領から受けたと何度も聞いた。

　俺はその真意を、本人から聞かされることとなる。

「余はツインテールを極めるため幾億の時を流る転てんし、余の後に生まれ出いずる全てのエレメリアンを従えた……。しかしそれももう——飽きた」

「なっ……」

「余は、自分以外の者がどうエレメリアンを従えるかを見てみたい。お前次第だテイルレッド—お前の器量次第では、人間を襲おそうなと命令を聞かせることができるやもしれぬ。フッフッフ、それは奴やつらに『死ね』と命を下すことと同義だがな……」

　本気だ。本気の目だ。

　こいつは自分の享きよう楽らくのためなら、ここまで巨大に育った組織をもあっさり捨てるつもりだ。

　確かに、俺の命令なら……俺が首領になれば、エレメリアンを御することができるかもしれない。

　俺をアイドル扱いしてくるあいつらなら……。

　そしてそれは、結果的に世界を守ることに繫つながるのかもしれない。

　だったら、俺は—

「断る!!」

　それでも俺は、アルティメギルの……侵略組織の首領になることだけは絶対にできない。

「俺はツインテイルズ……テイルレッドだ！　正しいツインテールのために戦う戦士だ!!」

　テイルカリバーを構え、今一度心のツインテールに炎を灯ともす。

「──余は本気で申し出たのだが……唯一最後の機会を逸したな、テイルレッドよ」

　常に薄笑みを湛たたえていた首領は初めて、俺に失意にも似た眼まな差ざしを向けてきた。

「明日を夢見てしまったお前では、余を破滅させることは叶かなわぬ」

「テイルカリバー！　超越究極装塡ハイパーアルテイメツトモードッ!!」

　黄金の炎えん刃じんが虹にじ色のオーラをまとい、神秘と邪悪の空間全てを照らす輝きを放つ。

「願わくば消えてくれるな。光あれ、女神の後継者よ」

　かざしたフューネラルケインの先端の光こう玉ぎよくに、宇宙の始まりを告げるように小さく、淡い光が灯ともる。

「二房の輝きよ、零ゼロへと果てよ」

　首領が終しゆう焉えんの言葉を紡つむぐ。

　その場の全てが、原子さえもが鼓動を停とめる中──俺のツインテールだけが、熱く燃え盛っていた。

「ゴッドブレイザ────────ッ!!」

「受けよ我わが神しん技ぎ、テイルエクステイション──」

　虹にじ色の超越斬ざん撃げきが、あらゆる存在を許さぬ超次元へと激突する。

　決して相あい容いれぬ、二つのツインテールの極致がぶつかり合う。

　俺は首領と戦ううち、こいつのツインテール馬ば鹿かっぷりにも共感していた。

　俺と同じじゃないのかと。だったら、今までの好敵手たちと同じく、戦いを通じてわかり合えるのではないのかと。

　しかしそれは淡い幻想だった。こいつが辿たどり着いたツインテールは、俺とはあまりにも世界が違いすぎる。

　俺は初めて……理解できないツインテールに出で逢あってしまった。

「う、ぐ、おおおおおおおおおおおお!!」

　俺は咆ほう哮こうし、テイルカリバーに渾こん身しんの力を込める。

　身体からだが悲鳴を上げる。俺のツインテールが、限界を超えてスパークし始める。

　そして俺は、アルティメギル首領がツインテールに懸けた永えい劫ごうの時間、そのものを受け──。

「はぁーっ……はぁーっ……!!」

　アルティメットチェインが解除され、ノーマルチェインに戻った俺は、とうとう床に膝ひざをついた。

　強すぎる……。

　戦闘力だけじゃない、無のツインテールでありながら、ここまで見事なツインテールを俺の心に叩たたきつけてくるなんて……!!

「余の神技を受けて、未いまだ五体とツインテールが残っているとは……お前は本当に素晴らしいな、テイルレッド……」

　首領の声に、初めて息遣いが交じっている。

　首領は肩口から腰まで、袈け裟さに走った光条を手で押さえ、満足げに笑っていた。

俺のゴッドブレイザーも、奴やつのテイルクロスを貫いて一太た刀ち入れていたんだ。

しかし……受けたダメージの差は、歴然だ。

首領はフューネラルケインを地面に突き立てると、ゆっくり俺の元へと歩いてきた。

「ここまでだ。やはりお前の存在を消してしまうのは惜しい……。お前にはまだまだ、余の退屈を慰なぐさめて欲しいのだ……」

首領は俺の前に屈かがみ込むと、俺の顎あごに手を添え、そっと持ち上げる。

「余のものとなれ……テイルレッド。余は、お前の全てが欲しい。その正体もろともな」

とうとう、アルティメギルのトップのエレメリアンにまでプロポーズされちまったよ。

もう、笑うしかねえな……。

だから俺は、首領の言葉の違和感に気づけなかった。

「断るって、言ったはずだ……！」

「……意志は固いか。ならば一度、決定的な敗北を与えてくれるぞ」

「決定的な敗北だと……⁉」

首領がフューネラルケインを振るった瞬間。

俺たちの周囲の空間が歪ゆがみ、ここへ来るまでに突破してきた四つの関門の映像が浮かび上がった。

そこで繰り広げられている四つの戦いが、俺の目の前に映し出される。

そしてその映像はこの首領の間と物理的に繋つながり、戦士たちが敵味方関係なく次々と首領の間に転送されてくる。

最強変身チエインエヴオルブをしたブルー、イエロー、ブラッ

ク。そして、ホワイト。

　アポロギルディ、ポセイドンギルディ、ゼウスギルディ、ハデスギルディ……。終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーたちも一緒だ。

「……！　みんな……!!」

　再会を喜びたいところだが、全員、満まん身しん創そう痍いだ。

　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーも同じぐらいのダメージを受けてはいるが、首領の前だからか、奴やつらは皆、余裕を装っている。

「う、ううっ……ここは……！　しゅ、首領の間に転送されたのか……？」

　首領の間の全ぜん貌ぼうを知るブラックが、真っ先に状況を看かん破ぱする。

「……えっ……？　何でソーラがここにいるのよ!?」

　首領の姿を見てブルーが驚き、その動揺が仲間たちにも伝でん播ぱしていく。

「こいつは、女神ソーラの姿を使っているだけだ……！　こいつこそが、アルティメギル首領なんだ……!!」

　俺が歯は噛がみしながら言うと、ブルーたちは驚きよう愕がくに目を見開く。

「私たちを、どうしてここに……！」

　ホワイトは、故郷の仇かたきともいえるアルティメギル首領をきっと睨にらみ付けた。

　ソーラではなく首領と認識した瞬間から、トゥアールがいつも本物のソーラに向けていた優しい眼まな差ざしは、もうそこにはない。

　だがホワイトのテイルブレスレボリューションは、断続的に放電している。

　どれだけエネルギーを節制して運用しても、変身限界時間を遥はるかに超えてしまったんだ。

「え──────っ!?　こういうことしちゃうの、首領様!?　僕ら何のために、わざわざ四つも部屋守ってたのさー!!」

　そのホワイトと戦っていたアポロギルディは、全身傷だらけながらもいつもの天てん真しん爛らん漫まんな笑みとともに首領に意見する。

「ああ、せっかくの真剣勝負に水を差された……死ーのうっと……」

　ゼウスギルディはマリッジブルーモードで地面に寝転がる。奴やつがあの状態になるのは、全力を出し尽くした後のはず。イエローはたった一人で、ゼウスギルディをあそこまで追いつめたんだな……。

「そう言うな、余もテイルレッドにかなり追いつめられた。ならば、余の親衛隊たるお前たちは余を護衛まもりに馳はせ参じなければなるまい？」

「んー。首領様に頼られちゃうの、ちょい嬉うれしいねえ」

　ポセイドンギルディが陽気に応こたえる。奴の全身も、かなりの傷を負っていた。

「ぐっ……うう……」

　遅れてもう一人、転送されてきた。アナザーブルーだ。

「アナザーブルー！」

　俺が呼びかけても応えることも満足にできず、ボロボロになったアナザーブルーが地面に膝ひざをつく。

　ツインテールパレスで戦っていたブルーたちだけでなく、アルティメギル基地に残ったアナザーブルーもここまで転送されてきたんだ。

「あ、あれからまたエレメリアンが、わらわらと沸いてきてな……。やたらでかいのやら……すごく大変だったぞ……」

アナザーブルーはようやくで俺たちに状況を告げる。

そのエレメリアンたちと、たった一人で戦い続けてくれたんだな、先生。俺たちの殿しんがりを守って……。

俺は、全ての仲間の覚悟を背負って首領の間に辿たどり着いた。首領もそれを歓迎し、俺と死闘を繰り広げた。

首領は自ら、その真剣勝負を放棄したのだ。

「みんなをここに連れてきて、どうするつもりだ!!」

その真意を問い質ただすべく、俺は再びツインテイルブレスを出現させる。

どれだけ身体からだに負担がかかろうと、もう一度アルティメットチェインに変身して勝負をかける。そう思った瞬間。

「お前に決定的な敗北を与える──そう申したはず」

首領がかざしたフューネラルケインから、光が照射された。

「うわああああああああああああああああっ!?」

俺のテイルギアがスパークし、変身を逆回しにするように、装そう甲こうが粒子となって消えていく。

抵抗することすらできず、俺は男の──観み束つか総そう二じの姿に戻り、床に倒れ伏した。

俺は愕がく然ぜんとしながら、自分の手の平を見つめる。

「やはり、お前の最大の秘密はこれだったか、テイルレッド──お前は、男だ」

まるで目の前の真実をあらかじめ知っていたかのように、首領は確信に満ちた声でそう言う。

そういえばさっき、正体もろとも俺が欲しい、って……！

「俺のテイルギアが、強制解除されるなんて……!!」

「レッド!!」

ブルーが俺を抱き起こす。

「もう──テイルレッドではない」

首領の宣言に、俺は歯は噛がみする。しかし俺は、終の零星フォー・ヴアリス・ジヨーカーたちの反応を見てぞっとした。

誰だれ一人、俺の正体を見て驚いていない。

ポセイドンギルディは、囃はやし立てるように口笛を吹いているが……。

アポロギルディはまだわかる……俺が男だと疑うかのような、カマをかけてきていたからな。だがそれも疑惑の段階だったはず。何な故ぜ、他の連中まで!?

「驚いたっしょ。実は俺らみんな、お前の正体が男じゃないかなーって疑ってたから」

逆に軽い口調で、とんでもないことを言ってくるポセイドンギルディ。

「何だと……!?　……気づいていたのか!?」

「フッ……。色々気になってはいたが……話は簡単だ、テイルレッド。私たちは首領様とともに、究極のツインテールとはどんな存在かを、話し合ったことがあった」

ハデスギルディも得意げに語り聞かせる。

そして首領が、部下たちの言葉を引き継ぐ。

「ツインテール属性の戦士は、結局自らが愛するツインテールを兵器としなければならない。それゆえに心を曇らせ、歪ゆがみ、弱くなっていく……。才ある多くのツインテールの戦士たちが、そうして消えていった。余はそれを見送り続ける中、一つの仮説を立てた」

首領は冷淡に目を細めると、俺に真実を告げてきた。

「どれほどの強さを得ても、ツインテールへの純粋な憧あこがれを失わず、愛を曇らせずに求め続けることのできる存在。それは普

段、ツインテールが〇ゼロな者──すなわち、男ではないのかと」

　ツインテール属性ではなく、ツインテール力が〇ゼロ──首領がしきりにそう言っていたのは、こういうことだったのか。

　属性力エレメーラではなく、ツインテールを持たない存在……それが、俺だと……!!

「本来、ツインテールを持たぬ男が女性以上にツインテール属性を高めるなど、天地が逆巻いても有り得ぬこと。しかし、それでももし……もし男でツインテール属性を極限まで高めることのできる、全異世界の特異点のような存在がいたとしたら……それこそが、究極のツインテールの正体ではないかとな」

　俺を見る首領の目は、悲願が成就したかのような歓喜に満ち溢あふれていた。

　女神ソーラに憧あこがれ、ついにはその姿まで模したエレメリアン。

　その憧れは究極のツインテールへの執しゅう着ちやくに転化され、そして、究極のツインテールの真実に辿たどり着いてしまった──。

「お前……俺を男だと疑ってた上で、女神になれって……⁉」

「無論」

　迷いなき双そう眸ぼうに見竦すくめられ、俺は愕がく然ぜんとした。

　アポロギルディはステップを踏むようにして、俺の前へとやって来た。

「幼女属性リトルガールを極めた僕が、テイルレッドほどの幼女に感じるものが少なかったんだ。何かあると思っていた……けど、つまりはこういうことさ」

　テイルレッドが女だと思って接している以上、強力な属性力エレメーラを持ったエレメリアンは俺に対して違和感を持つことがあった。女の子と女の子が仲良くする百ゆ合りの反応を、俺に全く感じないのが当然なように。

　そうして俺は今まで、何体かのエレメリアンに、属性との矛む盾じゅんを疑われてきた。

　最後に真実に辿り着いたのは、アポロギルディ……こいつか……!!

「──僕はずっと、ち○ちんを見たいと思っていた。そしてテイルレッド……君ならその願いを叶かなえてくれそうな予感がしていたんだ。属性よりももっと単純な欲求……だからこそ気づくことができたんだろうね」

　アポロギルディは首を傾かしげ、にっこりと笑った。

「ちんち○見して」

「何ッ………………!?」

　俺の絶句に続き、ブルーたちがざわつき始める。

　あれほど弱っていたホワイトが、両目を見開いた。俺を心配してくれているのだろう……。

「別にいーじゃん、人間の女は他人においそれと裸見せちゃ駄目みたいだけど、男はむしろ女に見られると嬉うれしいんだろ？」

「とんでもない偏見だぞ、それ!!」

「駄目っ!!」

　ブルーは慌あわてて俺を背中にかばう。

　くそっ……決死の覚悟でやってきたのに。

　仲間たちと信念を分かち合って、敵の本拠地に突入してきたのに……!!

　どうして俺は今、敵の幼女にちん○んを見られそうになっているんだ……!!

「お前の仲間たちもこの体たらく。もはや万策尽きたであろう」

　首領は芝居がかった仕草で両手を拡ひろげ、決定的な一言を告げた。

「勝負ありだ、究極のツインテールの少年よ」

属性玉
―設定資料―
09

25 閉所属性（リミットスペース）

持ち主 アメーバギルディ

簡易のトラップを形成し、相手の進行を阻害する。効果は自分の手が届く範囲と限定的。こちらも邪険属性と同じく本気で対抗されるとすぐに破られるものだが、咄嗟の判断で状況を覆すという、戦闘補助を目的とした属性玉変換機構の理念に叶った発動効果である。

26 腰属性（ウエスト）

持ち主 フラミンゴギルディ

発動すると、トリモチを踏んだかのように一瞬相手の足を地面に縫い止めることができる。ブルーは属性玉の同時発動でこの効果を応用し、貧乳属性で形成した防御壁に相手を身体ごと縫い止めるという使用方法を見せたこともある。

27 母属性（マザー）

持ち主 プテラギルディ

発動すると高速化できる、有用性では指折りの属性玉だが、その分使用難易度も高く、ブルーは使いこなせなかった。一方母性があるからかアナザーブルーはむしろもっとも得意とする属性玉の一つであり、ノーマルチェインしか持たない彼女に爆発力を与える重要な属性玉である。

エピローグ

最大最後の危機。

終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー……特にハデスギルディは、ほっとしたような表情を浮かべていた。

首領がほぼ無傷で戦いを終えたのだ、親衛隊のこいつらは安あん堵どもするだろう。

首領は氷のような目で、俺たちを傲ごう然ぜんと見下ろしてくる。

「敗者たる貴様たちには、もはやこの聖域に留とどまる資格はない。自分たちの世界へ、疾とく立ち去るがよい」

立ち去れ……だと。

俺たちのツインテール属性を奪うんじゃないのか……⁉

「あっ、そのまえにちんち」

アポロギルディの言葉を遮さえぎり、首領が邪悪な微ほほ笑えみを向ける。

「ここまで余を愉たのしませた、その褒ほう美びを取らせようというのだ」

フューネラルケインを手にした首領は、先端の光こう玉ぎよくを俺たちへと向ける。

「お前たちは機会を与えられながら、余の組織を侵略することは叶かなわなかった。今度は、余の番であろう？」

「待て！　首領──────────ッ‼」

叫び虚むなしく、俺たちは光に包まれ……そして、首領の間を追い出された。

一瞬宇宙空間に放り出されたかのような浮遊感に襲おそわれた後、激しい衝撃が身体からだを襲う。

俺たちは、草むらの中に投げ出されていた。

「どこだ、ここは……!?」

　すぐに立ち上がり、あたりを確認する。まさか、いずことも知れぬ異世界か!?

「私たちの、世界です……外国ですが」

　変身解除したトゥアールが、小型の端末を操作して状況を把は握あくする。

　ブルーたちも、次々に変身を解除していった。

「……本当に……戻って、きた……」

　呆ぼう然ぜんと呟つぶやくイースナ。

「あれが、首領……。あんな冷たい目をした奴やつが……」

　愛あい香かは、自分の声に悔くやしさを滲にじませるその理由を語る。

「ヴァルキリアギルディと約束してたのよ。首領の顔を見てやるって。それが……」

　激闘の末に交わした戦いくさ女め神がみとの約束。それを思わぬ形で果たしてしまった愛香は、行き場を失った感情で拳こぶしを震ふるわせていた。

　静かに揺れる草。あまりにも普通な光景。

　その只ただ中なかにいる内に、徐々に、俺たちは現実を実感し始めた。

「首領に、もう自分と戦う資格はないと言われ、人間の世界へと送還された……」

　慧え理り那ながやつれた表情で言う。

「これでわたくしたちはもう、アルティメギル基地へは行けないのですわね……」

　彼女も、凄せい絶ぜつな戦いに身を投じていたはずだ。

「……みんな生命いのちがあるだけめっけもんや……そうやろ、イースナちゃん!?」

　メガ・ネは、全身がボロボロになり、所々内部部品が露出している。

　ブラックと合体し繰り広げた戦いが、それ程過酷なものだったのだろう。

「そう、だけど……私たち、これからどうすれば……」

　イースナは泣きそうになりながら空を見上げた。

「あそこまで辿たどり着いたのに……俺はっ……！　俺が首領を倒せていれば……!!」

　俺は悔くやしさのあまり膝ひざから崩れ落ち、地面を拳で殴なぐりつけた。

「総そう二じ様のせいではありません！　もし首領と戦っていたのが私たちだったら、もっと早くに倒されていました……!!」

　トゥアールは俺の背中をそっと支ささえ、そして皆を見渡して言った。

「メガ・ネさんの言うとおり、私たちは生きています。全員、属性力エレメーラも無事です！　また時間をかけて力をつけて、首領に挑みましょう!!」

「そうね、このままじゃ終われない……。あのナンパ野郎もまだブッ倒してないし！」

　愛あい香かは戦意を萎なえさせることなく、全員を励ますように努めて声を明るくする。

「今回の戦いで首領がある程度満足したのであれば、世界のツインテール超常現象も収まるはずですものね……！　ええ、また特訓して、今度こそ！」

　慧理那も、前向きに仲間たちを奮い立たせる。

　俺も何か言葉をかけなければ、と思った時。首領の最後の言葉が

気になった。

　次は自分の番──だと。

「！　あ、あれ……！」

　涙を堪こらえるように空を見上げていたイースナが、血相を変えて指差す。

　空に、巨大なスクリーンが形成される。いつもの、アルティメギルの全世界規模の演説だ。

　しかし、そこに映ったのは──俺があの首領の間で目にした、聖布ヴエールに包まれた玉ぎよく座ざだった。

『この世界の人間たちよ。余はエレメリアンを統すべる、アルティメギル首領』

　幾いく重えにもぶれた声……聖布ヴエール越しのシルエット。

　しかしそれは紛まぎれもなく、先ほどまで俺が戦っていた首領だった。

『たった今、ツインテイルズは余の居城へと乗り込み──そして敗北した』

　俺たちは顔を青ざめさせ、為なす術すべ無くその宣言を聞き続けた。

『ゆえに余には、ツインテイルズの守護するこの世界の人間の心の輝き、その全てを我わがものとする権利がある』

　何な故ぜ奴やつが、むざむざと俺たちを元の世界へ帰したのか。

　それは、奴が次の楽しみを見つけたからだ。

　傍観者から、侵略者へと変わるために。

　そして俺たちは……世界の終しゆう焉えんが始まることを悟る。

空に浮かぶ、首領の玉ぎょく座ざの映像。

聖布ヴエール越しに、首領のシルエットが大おお仰ぎょうに諸もろ手てを広げた。

『これよりアルティメギルは、この世界への最終侵攻を開始する』





テイルギア設定資料 17

アルティメギル首領が、テイルギアを参考に創造した闘衣をまとった姿。あまりに強すぎるため制御が難しいテイルギルディという真の姿を秘している首領だが、テイルクロスはその姿に変身せずに全力を解放するための制御デバイス。そのため装甲パーツは備えておらず、テイルギアでいうところのアンダースーツ部分のみで構成されている。一個の宇宙を身体に吸収した超絶の闘法「光速のツインテール」は、この姿でも行使することが可能。なおテイルギアが空想のテイルとツインテールのテイルから名付けられたのを看破した首領だが、テイルクロスはそこへさらに装布のクロスと罪を背負う十字架のクロスをかけて名付けている。

フューネラルケイン

葬送の魔杖。テイルクロスをまとう際の変身デバイスの役割も兼ねている。首領の強大すぎる全力を受け止めることのできる唯一の武器であり、常時完全解放した状態を維持している。テイルフェニックスのフォースフェニックスラッシューターやテイルレッドのブレイザーブレイドとの対戦を経て作ったため、デザインに類似性が見られる。



武器:フューネラルケイン
必殺技:テイルエクスティション

ULTIMAGUIL-CHIEFTAIN
+TAILCLOTH

あとツインテールがき

もう、「あとツインテールがき」を書くこともあと僅わずかです。

だいたいこのページを書く時はいつも疲ひ弊へいしきっているのですが、今回は色々思い出しながらキーボードを打っています。

長く続いたシリーズの終盤ですので、「ああ、このキャラクターがこんなに喋しやべるのはこれで最後かもしれない」……今巻は幾度もそんなふうに考えながら原稿を書いていました。

一巻からの皆勤エレメリアンであるスワンギルディが、一つの結末を迎えました。

ただ一シーンのギャグキャラから始まり、かませ犬が板につき、それでも何度も苦難を乗り越え、ついには部隊の隊長となり、ツインテイルズを追いつめるほど強くなった。

ある意味、エレメリアン側の主人公のような奴やつでした。

残るは最強の敵。ツインテイルズの戦いも、一つの結末が近づいています。

ここまで長らく応援し続けてくださった皆様ならば、最後まで総そう二じたちを信じてくれることでしょう。

自分も、悔いの残らないように残りの物語を紡つむぎます。

今回も、イラストの春日かすが様や担当の濱はま田だ様、完成と出版に携たずさわる全ての方、そして読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。今さら言うまでもなく、俺ツイは様々な変態さんたちのお話です。しかし同じ変態であっても、正しき心を持った変態は世界の守護者となり、心が歪んでしまった変態は、悪の首領となった。巨大な力はそれを持つ者次第……今回はそんなお話です。俺、ツインテールになります。──佳境です。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。18

２０１９年９月18日　電子書籍版発行

著　者　水沢　夢

発行人　立川義剛

編集人　星野博規

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０１９年９月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451809-2


GAHO
ガ報
No.149
ガガガ文庫
9月刊
絶賛発売中
!!!
残暑をガガガッと迎え撃つ!!
実った新作&人気シリーズ続刊!
定価:本体630円+税
著者コメント
新作です!一生懸命書きました!よろしくお願いします!
飛行駆逐艦艦長をつとめる美姫イザヤと、超傲慢天才参謀クロト。幼なじみでありながら素直になれない二人が駆るのは重雷装飛行駆逐艦「井吹」!国家の命運をかけて世界最強の飛行艦隊との決戦に挑む!
裏面にも情報掲載!
[プロペラオペラ]
著:犬村小六 イラスト:雫綺一生


冬が終わり、季節は春。主人公達はそれぞれ、新しい一歩を踏み出していた。京、千尋、春斗、伊月、それぞれの道の先に待ち受けるものとは……！大人気青春ラブコメ群像劇、いよいよ最終章突入！
そして、新しい日常が始まる。
ドラマCD付き特装版も同時発売!!
13
ドラマCD付き特装版
妹さえいればいい。
平坂 読
GAGAGA
価格:本体1,926円+税
妹さえいればいい。
平坂 読
イラスト／カントク
13
GAGAGA
定価:本体593円+税
著者コメント
いよいよラストスパートです。どうぞ最後までお付き合いください。ドラマCDもよろしく！
[妹さえいればいい。13]
著:平坂 読 イラスト:カントク


決戦の時。アルティメギル基地へ突入せよ！
定価：本体630円＋税
俺、ツインテールになります。18
水沢夢
イラスト
春日歩
GAGAGA
著者コメント
今回は特撮名物、敵基地への突入！ 光と闇、それぞれのツインテールの頂点が、ついに相見えます！
アルティメギル首領との決戦を前に、世界ではツインテールの地上絵が出現するなどカタストロフィーの前兆が巻き起こる。そして、愛香たちの想いは――。今こそアルティメギル基地へ突入せよ、ツインテイルズ!!
［俺（おれ）、ツインテールになります。18］
著：水沢（みずさわ） 夢（ゆめ） イラスト：春日（かすが） 歩（あゆむ）


スキなんて嘘――
キライも、
たぶん嘘。
定価:本体593円+税
鶴城 東
なたーしゃ
クラスメイトが使い魔になりまして 2
千影を助けて以来、望まぬ形で注目を浴びることになった想太。千影の実家に呼び出され、売り言葉に買い言葉から千影との婚約を認めてしまう。おまけに監視役までつけられて…？ 険悪主従ラブコメ第2弾！
ドラマCD 企画進行中!!!!!
著者コメント
二巻です。一巻ではメインヒロインでありながら微妙に出番に恵まれなかった藤原さんが大活躍します。
［クラスメイトが使い魔になりまして 2］
著:鶴城 東 イラスト:なたーしゃ



エリアスの提案を機に、
生徒会のクリスマスイベントを
手伝うことになった人研。
聖なる夜を前に、
異能力者たちの恋愛模様が
動き出す。
そして、業平はついに
愛河を誘う決心をして――
青春未満ラブコメ第7弾。
高二の、
人生で一度きりの
聖夜が幕を開ける
定価:本体593円+税
物理的に孤立している俺の高校生活
My Highschool Life is Physically Isolated.
7 SEVEN
森田季節
illustration: Mika Pikazo
GAGAGA
著者コメント
七巻目となり、恋愛模様も
じわじわ進んできました。
ぼっちたちの全力のクリス
マスをお楽しみください!
[物理的に孤立している俺の高校生活7]
著:森田季節 イラスト:Mika Pikazo


頼れるエルフ嫁との、
穏やかな異世界狩猟ライフ……とはいかず?
巨大スライムの撃退に魔女との対決、
国王暗殺の阻止って……
それもハンターの仕事ですかあ!?
リアルな実銃のウンチク満載の第2巻!
ガガガブックス
GAGAGA BOOKS
"本物"のハンター
頼られまくり!?
定価:本体1,200円+税
著者コメント
シンがエルフの奥さんとの絆を深めながら、手持ちの猟銃が通用しない新たな敵と対決していく第二巻です。
[北海道の現役ハンターが異世界に放り込まれてみた2]
著:ジュピタースタジオ イラスト:夕薙


グリッドマンの
知られざるもう一つの戦い。
定価:本体1,350円+税
SSSS.
GRIDMAN
NOVELIZATIONS
VOL.1
～もう一人の神～
水沢夢
[イラスト]
bun150
原作:SSSS.GRIDMAN
SHOGAKUKAN
著者コメント
ツツジ台に起こった異変とは!? 新怪獣も登場する、SSSS.GRIDMANのもう一つの物語をお楽しみください!
ある日、突如として変化した世界。
そして、未知の怪獣が出現。
グリッドマンのもう一つの戦いが始まる!
話題沸騰の大人気TVアニメ
『SSSS.GRIDMAN』が、
完全オリジナルストーリーでついに小説化!
[SSSS.GRIDMAN NOVELIZATIONS Vol.1 ～もう一人の神～]
著:水沢 夢 イラスト:bun150 原作:SSSS.GRIDMAN

『プロペラオペラ』発売記念

㊙イラストラフ公開!!!

『飛空士シリーズ』『ヴィヴィ・レイン』の犬村小六先生完全新作『プロペラオペラ』の発売を記念してガ報だけでしか見られない㊙設定ラフを公開!
さらに作者の犬村小六先生、イラストの雫綺一生先生からのコメントもご紹介するゾ!



白之宮イザヤ

犬村　そういえば暴力的なお姫様はまだ書いたことがないな、と思って書きました。腰つきが良いですよね。

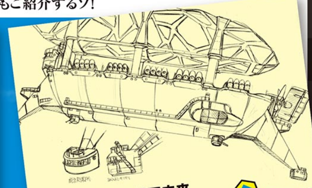
雫綺　当初は黒髪という指定だったのですが、デザインの上でクロトと対比させたかったので無理を言って白髪設定に変えてもらいました。



戸隠ミュウ

犬村　男所帯の井吹において、リオとイザヤを護衛する無口で健気なくのいち。艦内にはミュウのファンもごく一部存在します。

雫綺　めっちゃ好きなタイプのキャラクターです。最初に送ったデザインは少し地味すぎると感じているので、本編ではこっそりと調整したいところ。



メカデザイン／松田未来

犬村　左右両舷に十基四十門の空雷発射管を持つ重雷装飛行駆逐艦。一巻のプロットの必要上、こういう装備になりました。

雫綺　本職の方にデザインしていただいて本当に良かったと思っています。カッコいいです。でも描くのは自分なので、ヒィヒィ言いながら描いています。



黒之クロト

犬村　これまで書いたどの主人公ともタイプの違う主人公。このひとの性格を掴むために文庫本二冊分ほどのボツ原稿が出ました。

雫綺　高飛車で高圧的だけど意外と努力家で憎めないキャラとのことで、すぐにイメージできました。愛されキャラになればいいなぁ。



風之宮リオ

犬村　井吹艦内で水兵たちとマイクを通じてコール&レスポンスするお姫様。男だらけの艦内にマイナスイオンをもたらします。

雫綺　デザイン後に本編を読むと思っていたよりゆるふわな感じだったので、表情等でその感じを出せればと思います。

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

TVアニメ コップクラフト DRAGNET MIRAGE RELOADED

BD&DVDいよいよリリース開始!



【発売日】2019/10/23
【価格】12,000円+税

特典には80ページの第1話絵コンテ集をはじめ、映像特典としてノンクレジットOP他、キャラクターデザイン・木村博美氏描き下ろしの三方背ケース付き!

フェア SSSS.GRIDMAN

大人気「SSSS.GRIDMAN」フェア開催決定!

SSSS.GRIDMANラジオCD「とりあえずUNION Vol.2」の発売に合わせキャンペーンの開催が決定! 一部店舗で対象商品を購入の方にイベント優先応募申込券と特典を配布! 詳細はHPをチェック!



公式HP: https://gridman.net

コミックス 物理的に孤立している俺の高校生活

コミカライズ連載スタート!



マッグガーデンのコミックウェブサイト「MAGCOMI」にて月イチ連載開始! 青春未満な異能力者たちの物語を漫画版でも楽しもう!

原作:森田季節
キャラクター原案:Mika Pikazo　漫画:らま

コミックス レイロアの司祭さま

コミカライズ連載スタート!

各ストアに先行販売されていた漫画版が「マンガワン」にて連載開始!

原作:朧丸
キャラクター原案:野崎つばた
漫画:shimazaki



コミックス 北海道の現役ハンターが異世界に放り込まれてみた

異世界狩猟ライフがコミカライズ!

『MAGCOMI』にてコミカライズ企画進行中! 開始時期は今後のガ報、GAGAWIREで告知予定!

原作:ジュピタースタジオ
キャラクター原案:夕薙
漫画:カルトマ



イベント **弱キャラ友崎くん**



※デザイン中のものです。

物販イベント「関友高校文化祭in大宮マルイ」

大宮マルイにて10月18日～29日で開催! 商品ラインナップをご紹介!

- •フォトスタンド•カンバッジ•デカアクリルスタンド•デカキーホルダー
- •マグカップ•長方形クッション•ミニタペストリー•フルグラフィックTシャツ その他多数!

さらに!!!!!

屋久ユウキ先生&フライ先生で、まさかの"**チェキ会**"も開催決定!!!! 2000円以上お買い上げで、参加券※がもらえます!ふるってお求めください! ※応募者多数の場合は抽選になります。

「屋久ユウキ先生×フライ先生」サイン会inアニメイト大宮

アニメイト大宮にて10月26日、27日の2日程で開催! 全国のアニメイトにて、10月18日発売の「弱キャラ友崎くん Lv.8」をご予約(全額内金)いただいた方にイベント応募用紙をお渡しいたします。応募者の中から抽選でサイン会にご招待いたします! 詳しくはアニメイトHPでご確認ください。

ガガガ文庫の人気作がぞくぞく

「オーディオブック」に!



「聴く本」として話題のオーディオブックに、ガガガ文庫が参戦!声優さんたちが朗読する物語の世界を体感してみよう!詳しい情報は小学館オーディブックの公式twitterを要チェック! ▶**https://twitter.com/audio_sho**

オーディオブックとは? 書籍を朗読したものを録音した音声コンテンツの総称。アメリカで主流だったが、近年日本でも拡がりを見せている。

ガガガ文庫の「最新刊」が電子書籍でもすぐ読める!!

ガガガ文庫「イラスト完全版」電子書籍

同日発売してます!

「Amazon Kindleストア」「紀伊國屋kinoppy」「BOOK☆WALKER」「楽天kobo」「iBooks」などで配信中!! 今後もどんどん取扱店拡大予定です!

作品内のカラー口絵イラストやモノクロイラストを全点再現!

ガガガ文庫**最新刊**の電子書籍も**毎月18日頃**に発売!! 気になる続刊や話題の新刊が、紙版発売と同時にお楽しみ頂けます。

書店員さんとガガガくん

ガガガくん

まだまだ暑い日が続いて来て夏の終わりが見えないネ！
そんな夏にピッタリの作品を読んで欲しいナ！

今月の書店員さん



書泉ブックタワー　小笠原詩織さん

GAGAGA SUPPORTER SHOP

住所:〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町1-11-1
電話番号:03-5296-0051
営業時間:10:00〜21:00
定休日:年中無休
URL:https://www.shosen.co.jp/

人気作品から一般書店では置いていないコアな作品まで豊富な品揃えで皆様のご来店をお待ちしております！

小笠原さんのオススメ本



『夏へのトンネル、さよならの出口』

青春真っ只中の少年少女から青春を懐かしむ大人までこの夏におススメの作品です。いざウラシマトンネルへ!

▶新人賞作品から人気作品まで盛りだくさんダネ！いっぱい展開していただいて嬉しいヨ！



編集後記

・手前味噌ながら、最近校了時の原稿で感動すること多し。役得です。（☆）
・お店で飲むビールと、うちで飲むビールってなんでこんなに味違うの?（湯）
・実家の福岡に一週間帰省して東京に戻りたくない病を発症するも、すごくリフレッシュできました!（濱）
・人生2回目の手術が無事終了。外科医ってなんで自分の切り取ったものを患者に見せたがるのん?（岩）
・僕の特技はアンデルセン神父の下手くそな真似です。（小）
・編集者になってから、大学生活と同じ長さを働いているってのが信じられない。（田）
・11月刊行予定に初の担当作品が載ってます!
鋭意制作中ですのでお楽しみに!（榊）

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○（作者名）宛